

心理學圖說

文學士  
見尾勝馬著

東京  
同文社版

特25

716

0  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
60  
1  
2  
3  
4  
5


始





時220  
716

心 理 學 圖 說

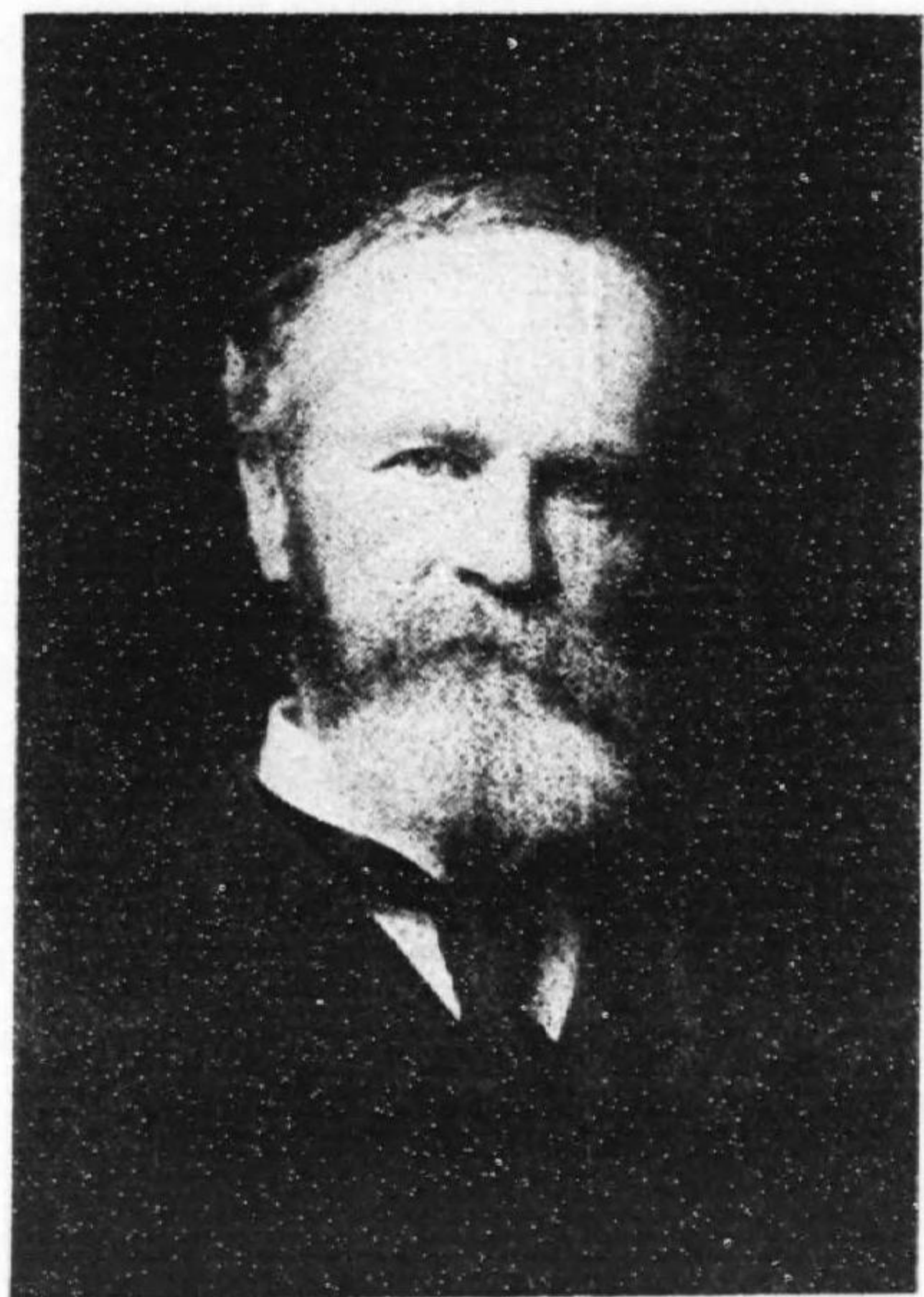


文 學 士  
見 尾 勝 馬 著



同 文 社 版





*Wm James*



*Josiah Roper.*





*Dr. Smith,*

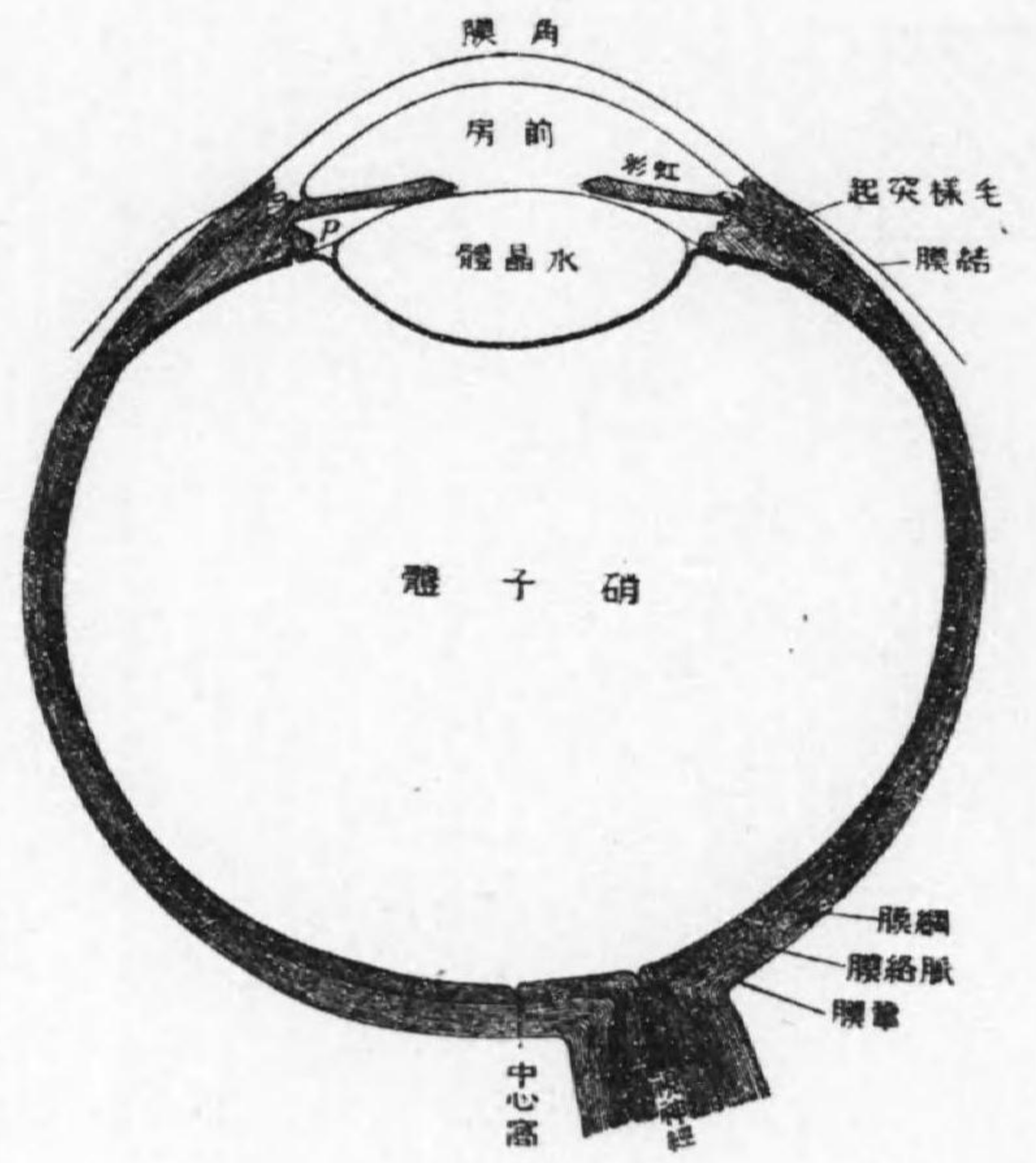


目には青葉山ほとゝぎす初鯉

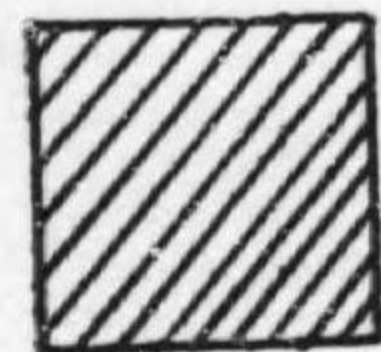
(山口素堂)

五色ハ令ム人ノ目ヲ盲セ五音ハ令ム人ノ耳ヲ聾セ五味ハ令ム人ノ口ヲ爽ガ馳騁ハ田獵ハ  
令ム人ノ心ヲ發セ狂ヲ難レ得ル之ハ貨ハ令ム人ノ行ヲ妨ガ  
(老子五色章第十二)

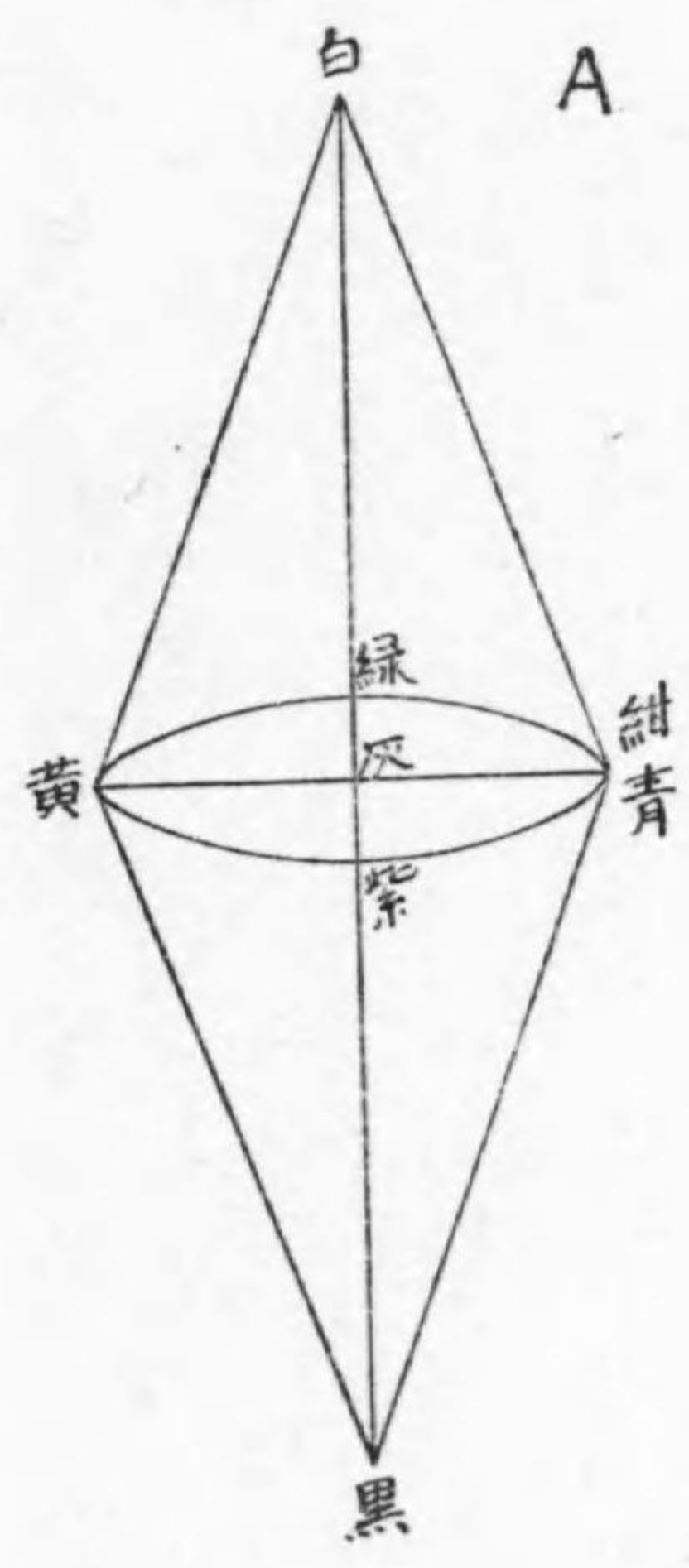
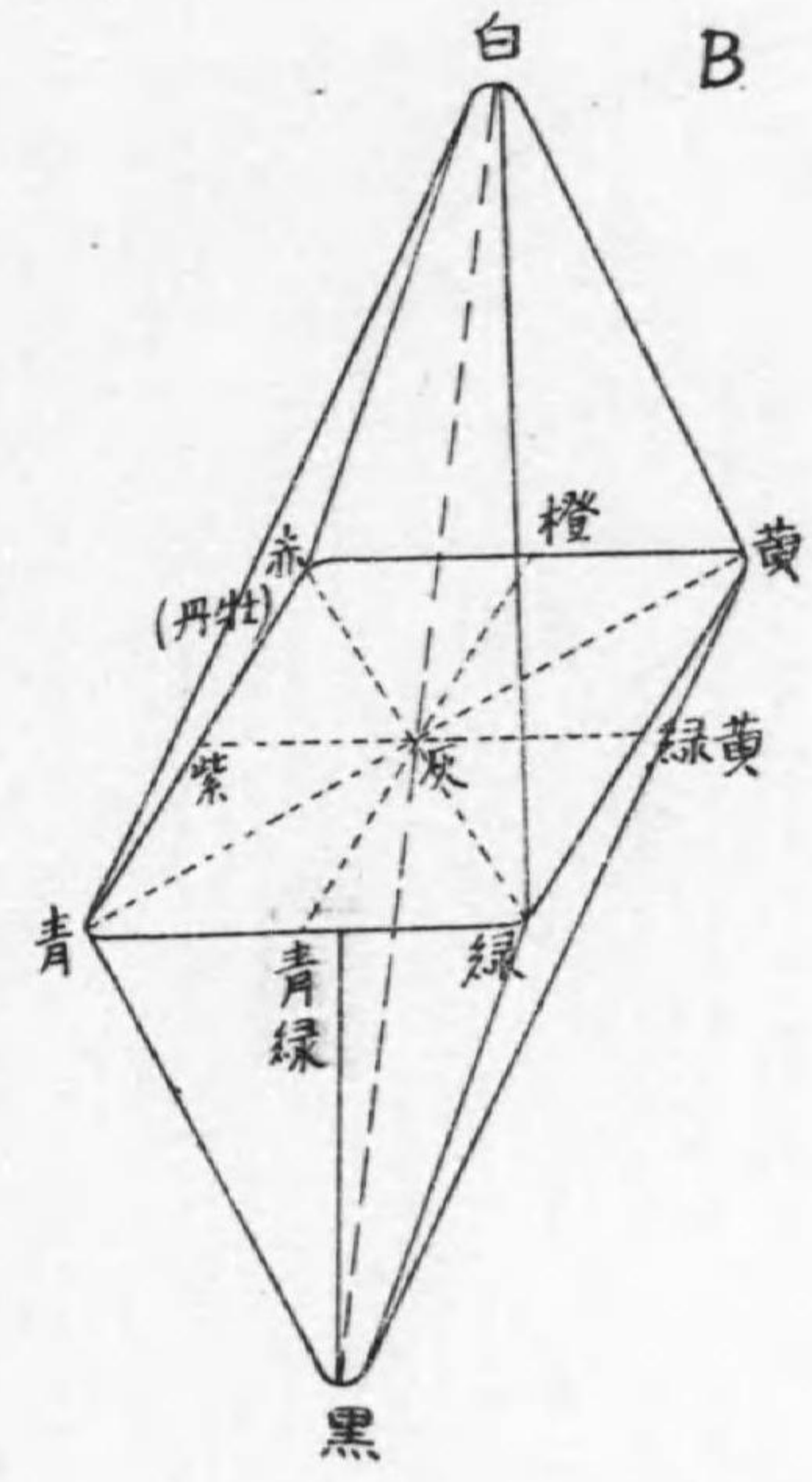
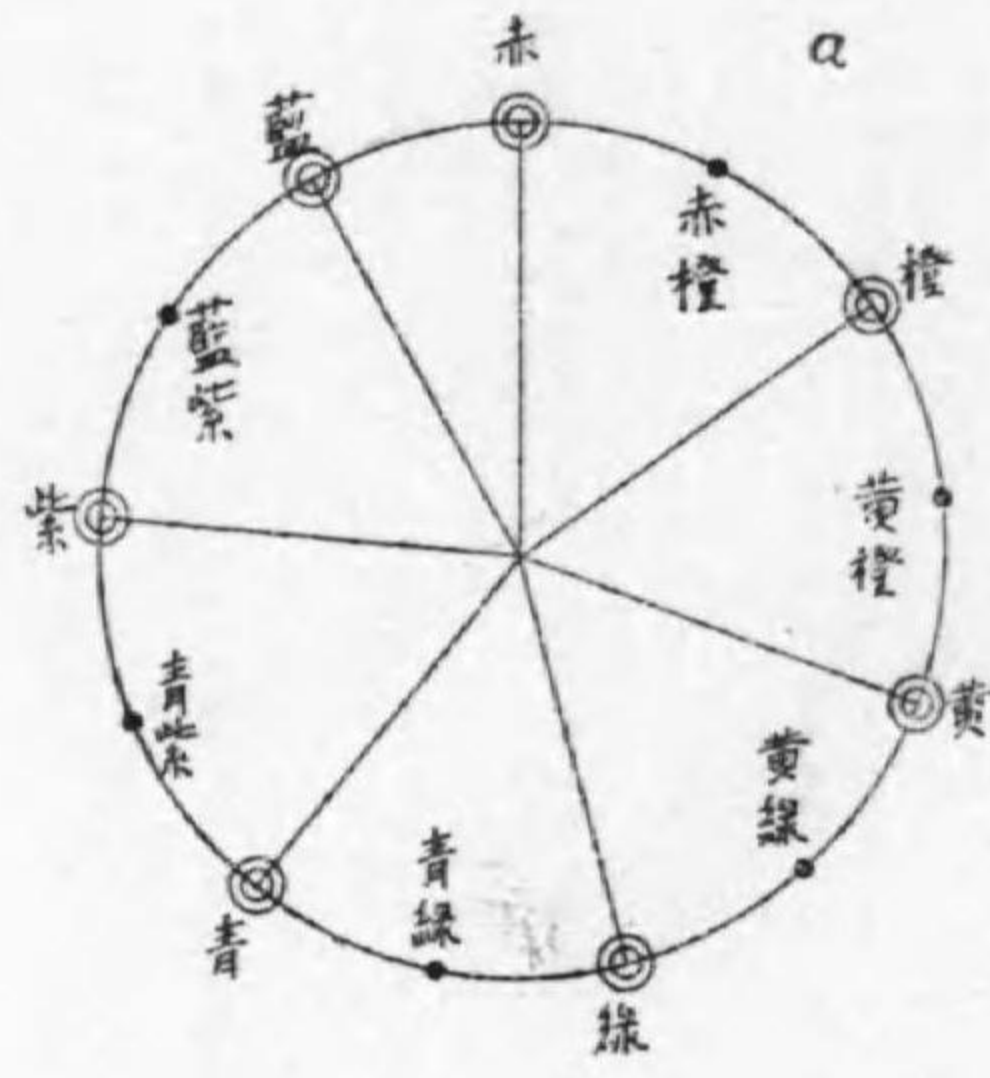




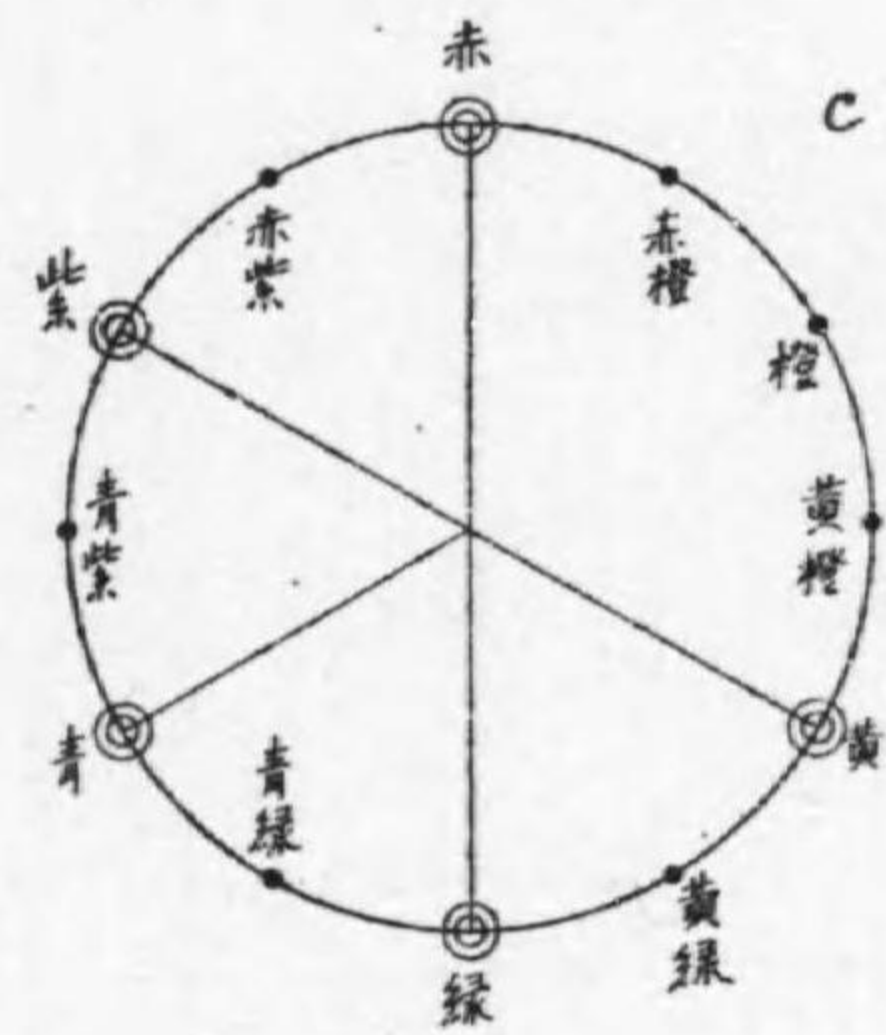
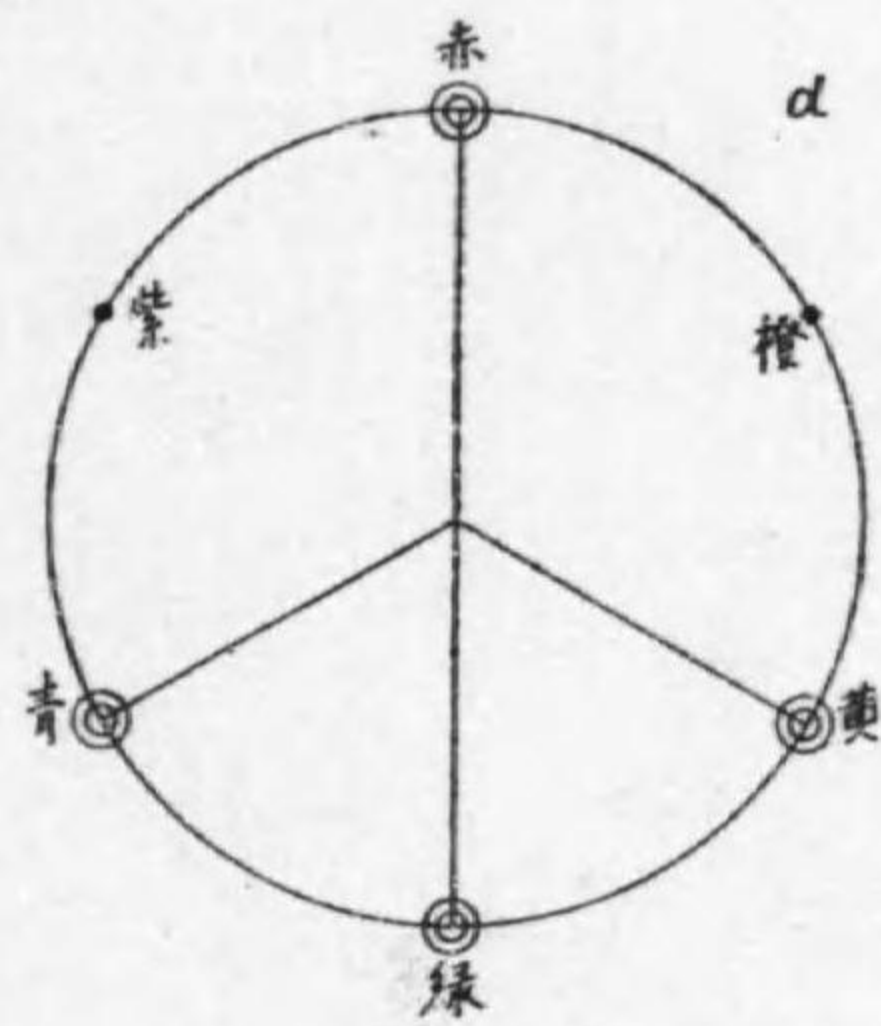
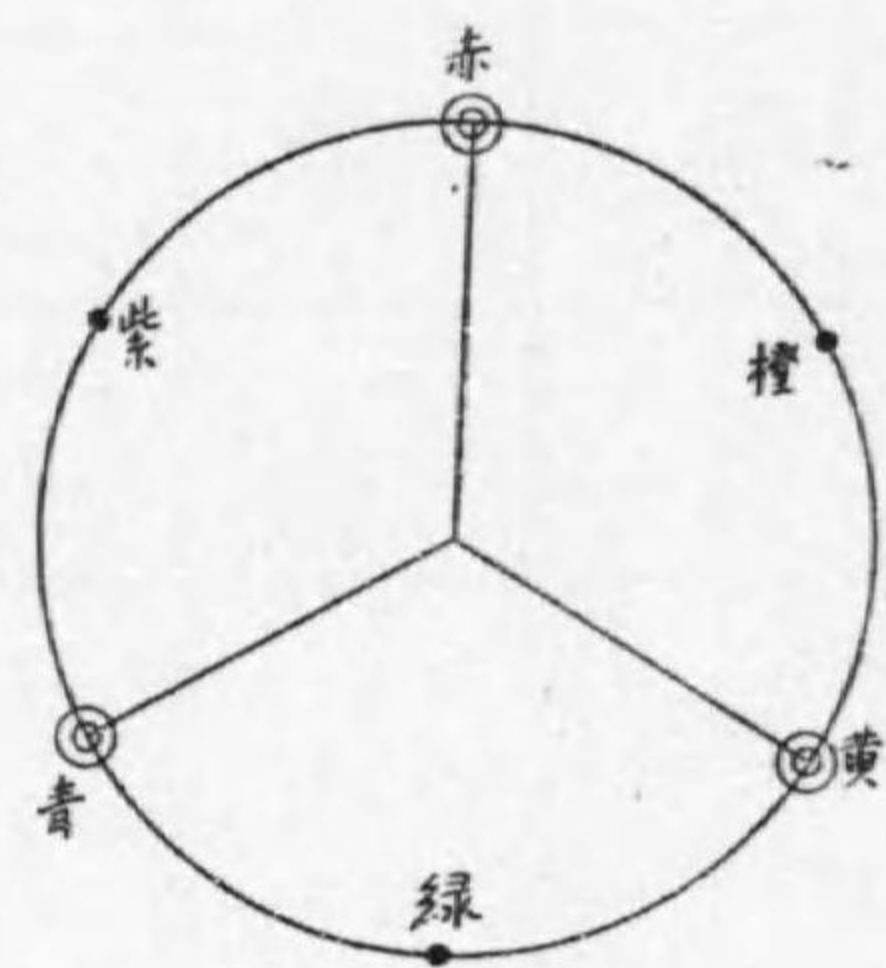
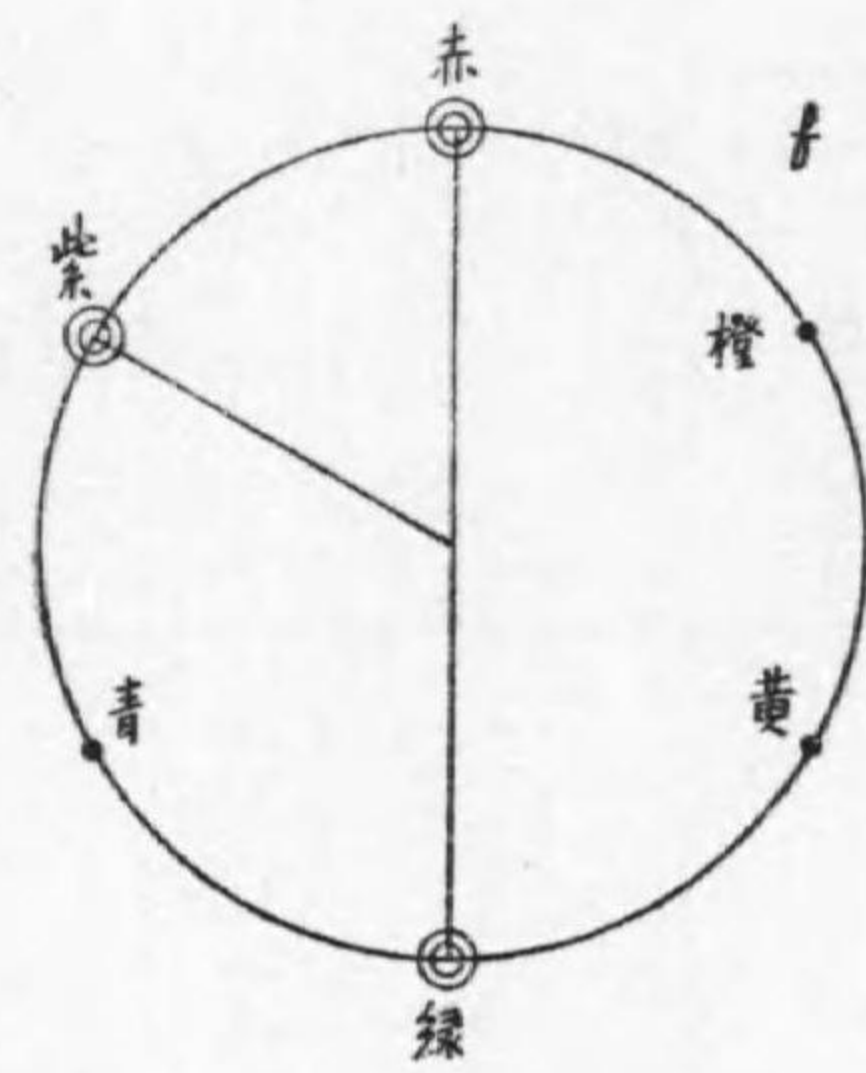












五



青	赤	白	黒	黄
木	火	金	水	土

- 一月は………白色
- 二月は………白色
- 三月は………薄紅
- 四月は………綠
- 五月は………紫
- 六月は………水色(無色透明)
- 七月は………水色(無色透明)
- 八月は………濃綠
- 九月は………濃綠
- 十月は………褐色
- 十一月は………鼠色
- 十二月は………灰色



One step to the white death-bed.  
 One with skull and seven dry bones.  
 On Death's white and winged steed.  
 The shadow of white death has past.  
 It is the white reflection of your own  
 My cheeks is cold and white, alas!  
 And the thin white moon lay withering there.  
 The owl was awake in the white moon-shine.  
 The cold white light morning.  
 The eastern star looks white.  
 The point of one white star is quivering still.

白

源順

銀河澄朗素秋天。又見林園白露圓。  
 王弘使立晚花前。蘆洲月色隨湖滿。  
 霜鶴沙鷗皆可愛。唯嫌年鬢漸皤然。  
 毛寶龜歸寒浪底。  
 葱嶺雲膚與雪連。

「註」

毛寶龜……搜神記に「晉の毛寶人の白龜を釣り得たるを見て贖ひて之を江中に放つ、寶、後、將となり、戰敗れて江に投ず、物を躡着するが如し、漸く浮びて岸に至る。寶之れを視れば即ち昔日放ちし所の龜なり」と

王弘……陶淵明九月九日に酒なかりしに白衣の人の至るを見る。即ち王弘の酒を送るなり。



A well, Dark, gleaming, and of most translucent wave.  
Thy (=stream's) darksome stillness,  
Distinct (=distinctly reflected) in the dark depth.  
Of that still fountain.  
Some forest-bosomed lake, Glassy and dark.  
The dark Italian air.  
From his dark eyes alone.  
His eyes were dark and deep.  
Her dark and deeking eyes.  
In thy dark eyes a power like light doth lie.

「黒」

緑なす髪(黒いつやのある髪をいふ)

「解」

白色を詠じたる詩であつて、毎句白色を離れない最も苦心の作である。  
さて素秋の天には銀河の澄みて横はるを見、又處々の林園には白い露の圓らかなるを見ることが出来る。かの毛寶の放ちし白龜は恩を忘れずして寒い浪の底より恩人を救ひて歸り、陶淵明の酒無かりし時、即ち白衣の人の酒を贈り來るものがあり、白い花のある蘆洲の月は潮と俱に満ち、葱嶺の白雲のちぎれば雪と連りて生ず、其他、霜に鳴く鶴、沙に眠る鷗、孰れもみな白くして愛すべきも唯年漸く老いて兩鬢の髪のそろそろ白くなるは同じ白色にても嫌ふべきものであるとの意である。



ウェルス (N. A. Wells) による色彩の象徴を次にかゝげ  
る。ウェルスは色彩の感動的價值 (affective value of colours)  
を研究した人である。

「赤」

Crimson = deep Red 深紅,

1). Passion 熱情,

2). rage 憤怒,

3). blood 流血, 殺害,

Red-brown

Vandyck red

Garnet (暗紅色又は柘榴石)

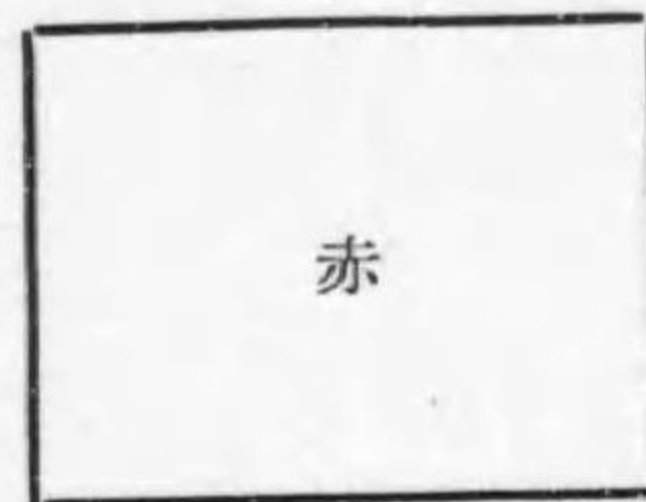
} Glarinet.

with red hands 人を殺して, Idleness is a red rag to hin  
(邦語の赤手と比較せよ) 人がなまけるのを見ると彼は非  
常に怒る。

a red republican 過激なる共和主義者。

red vengeance 猛烈なる復讐。

red flag 戦闘 (革命などの) の合圖。



Hell, a red gulph of everlasting fire.

His soul must roasted be in hell's red lakes immortally.

A red mouse in the middle of her singing.

One saw a red cross stamped upon the sun.

I beheld Their red swords flash.

Dart the red lightning.

A melancholy light, like the red dawn.

Like the last glare of day's red agony.

Round the red west when the sun dies in it.

When red morn Made paler the pale moon.



次に高山樗牛博士の赤に關するものをあげれば。

「赤は活動の色なり、煩惱の色なり、意慾の色なり。是を喩へば赤は太鼓の響の如く……赤は情慾に熱せる男子の如く……赤は爛漫たる牡丹花の夏に傲れるが如し……。」

と。

又松本亦太郎博士のものをあげれば、

「諸色の中で人の心を最も強く興奮させるのは赤い色である。緑は非情の生物が外面に發顯する色であるが、赤は有情の生物の身體に流動する重なる色である。併し赤は又天象の色として或は植物の色として頗る著しい色である。火山が爆發して天に火の柱を立てる時などは赤も随分凄じいものになる。何人も知つて居るのは夕やけの現象である。」

通例地上に於て眺めることの出来る赤い風色は秋の紅葉である。碓氷峠、日光山あたりの紅葉は滿山燃ゆるが如く、京都附近の紅葉は色が冴えてゐるが箱庭的の風景が多い。或年の十月の初めにロッキー山を通過した。ロッキー山脈にはそれこそ實に大きい山が突兀として天に聳え、雪を戴いて氷河などが流れて居る。裾の山々溪々の木の葉は眼路の及ぶかぎり紅に染められ、汽車はいくら走つても容易に紅葉の洞を出ぬけることが出来なかつた。

花として咲出づる紅は淡紅のものが多い。深紅は濃厚に過ぎてこれを廣い面積に擴げると比較的味が乏しくなるが淡紅となると喜悅の情があつて味が深くなる。櫻の花でも、桃の花でも、れんげの花でも、櫻草でも、民衆の狂喜するのは皆淡紅である。尤も小さい花なら深紅でもよい。罌粟の花とかダリヤの花とか云ふ様なものは美しい。牡丹でも一二輪深紅で咲いて居るのは見榮えがある。」

其他建築の方面に於ても、

- (1) 淺草の雷門、
- (2) 本郷帝大の赤門、
- (3) 伏見稻荷の鳥居、
- (4) 嚴島の神殿、

等はいづれも赤の權威をあらはすものである。又俳句で赤に關するものを一二あげてをく。

腸を牡丹と申せさくら鯛

梅の花赤いは赤い／＼かな

几草は色彩詩人らしい。

几草。 惟然。



x  
x  
x  
x  
x  
x

晩夏と云つてもまだふさはしい、初秋のある日の事でした。北條入江の奥の遊廓の裏手から、友達と二人で、かなり険しい凸凹の山坂を喘ぎ喘ぎ登つて行つたと思つて下さい。すると驚いた事には下の方から、念佛講の歸途でもあるか、白髪頭ばかりのお婆さん連が七八人、杖をついたり曲りこけた腰に後手を拱んだりして、えつちらこ、えつちらこと上つて来るのです。シンとした山坂で、しかも上りつめようとする坂の向うは夕暁が眞赤なのです。その中でお婆さんのもご／＼した話聲ばかりが後から追つかけて来るのです。物凄いな何たか怪しな事が起りさうでした。振り向くのも恐ろしいやうな気がして、せつせと登つてゐると、つい後では、「上見りやそりやきりは無えだがな、下見りやまたきりが無えだよ。」だとか、「地獄に落つるのも因縁じや、ふわふわふわ。」と笑ふかと思ふと、「あゝ厭じや厭じや長生するもんでねえだ。」と溜息したり、「こちとらもう直ぐに御成佛じや、」南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」と口々に遣つて来るのですから溜りません。やつと上りつめると火のやうに飛び連れてゐる赤蜻蛉に面をうたれてハツとなると其處は眞黄色な栗畑でした。夕焼は赤し、電柱は赤し、逃げ出さうとすると気がついたか、「お若いの待たつしやれ、これさ。」と急に淫りがましくなつて、思ひきつた閨房の秘密まで曝け出した椰揄を浴びせかけて、ほつほつと追つかけて來ま

す。二人ともすつかり恐くなつて二筋道の一方へ逃げると、向うの道に白髪頭の皺くちや面の齒もな  
いもご／＼の大口ばかり開けて一列に並んで此方に向くと、

「これさあんで逃げるのだあ、婆は若えのが好きじやわよ、おほつほつほ、」

「しゝこと教へてやるだよ。」

「こつち來お。」

「ふわ、ふわ、ふわ、ふわ。」

(北原白秋)



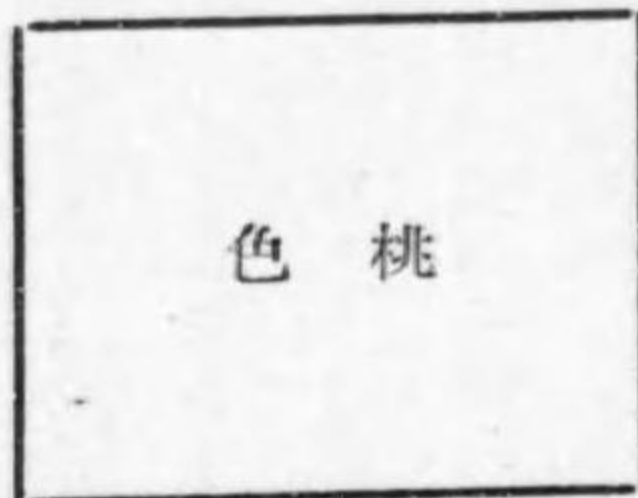


Oh, Hymen clothed in yellow jealousy.

Yellow: — Joyous, gay, merry;

Yellow-green: — cheerful, smiling.

Yellow.  
a brilliant copper yellow. } Horn.

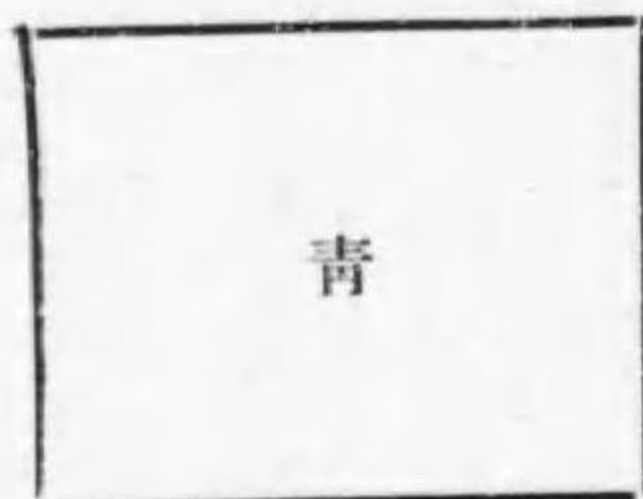


When child wanders home with rosy smile.

The roseate sun-light quivers.

Fearless and free the ruddy children played.





It was the azure time of June.  
Green strength, azure hope, and eternity.

「青」

Blue: — Cool tranquility.

Blue 又は azure of the sky — Flute.

涼しき 静けさ、

Blue-Green: — Sedate, Sober

Blue 又は azure of the sky — Flute (沈着、冷静)

Blue — Violin.

a true blue royalin,

硬直 (節操堅き) の勤王家、

Blue blood (貴族又は門閥)

to be in the blues

=have a fit of the blues

=to be in low spirits

氣が塞ぐ、

快々として樂しません、

元氣揚らず

to look blue — 機嫌が悪い。

松本博士の黄に關するものを引用すれば、

「小規模に於ては地上の花の色となつて人を樂しませる、冬の密柑畑、春の菜畑は何人が眺めても  
怡悦を感じる。連翹・山吹、月見草、黄菊、水仙の類、四季の花として何れも懐しい趣がある。南瓜、  
胡瓜の花にも捨てがたい野趣がある。」

尙黄色をつかつてゐる俳句を三四あげてをく。

影とらんとすれば春の水黄なり

燒原や蒲公英黄なり蝶黄なり

麥有つて菜の花いとゞ黄なりけり

菜の花の化したる蝶や法隆寺

青 數 鬼 曉  
々 畝 城 台



次に高山樗牛と松本博士の青に關するものをかゝげる。

「一種の色としては素より多少の力を有すれども、而かも其の力は他の多くの色に於けるが如く、積極に人心を昂むる力に非ずして、むしろ消極的に人心を鎮むる力なり。黄、橙黄、もしくは赤の熱色なるに對して所謂寒色なるや、青の表示するところの感情は冷なり、靜なり、安慰なり、寂寞なり、その光力の強きものにありては、打見たるところ一分爽快の趣無きに非ざれども、尙ほ吾人の感情を能動の側に昂揚するの力無し。次の刹那にありて、そが吾人を導く所、やがては沈思の境なり、冥想の域なり。而して更に一步を轉すれば、人心の裏面に互りて、幽渺名づけ難き一種の憂鬱なる潤色を與ふるなりされば青の表示するところの感情は、先づ以て人心消極の半面に關はれりと謂ふべきか。即ち哀みなり、信なり、平和なり、慰藉なり、凡そ輕浮、活動、執着、煩惱等もいろ／＼積極的の感情はそが主として反對する所なり。一言すれば、青の色相の一面は意志を没するにあり。

而して青はその他面に於て、無限てふ觀念と最も密接なる關係を有するが如し。予の見るところによれば、青はさながら暗黒の輝けるが如きなり。究まりなき遠距離もしくは限りなき夜の空の色相を帯び來れるが如きなり、少しく大袈裟に言へば「無限」「永遠」「神祕」と云ふが如き不可思議なる實在が、その實在を示さむが爲に、假りに色相を帯び來れるが如きなり。されば吾人の是れに對するや、

情の一面に於て、沈靜、安慰の感あると同時に、知の他面に於ては、幽邃、深遠の想ひを生ず。是に於て、宗教、哲學の對境なる絶對、もしくは彼岸の世界に對する沈思と冥想と起る。而かも是の際、吾人の心には渴仰と云ふが如き意志に關はるはたなき無かるべし。そは感情の側に於て既に意志を没し去りたればなり。既に意志なくして而かも沈思あり、而してこの沈思や、無限、永遠、神祕に對するの沈思なり、純粹なる認識 (reines Erkennen) 是に於てか起る。純粹なる認識とは意慾の繫縛を擺脫して單に對境を認識するの謂なり。既に意慾の繫縛を擺脫せるを以て意慾の主體たる「我」は實際に於て消滅せるに等し。即ち是れ佛家の所謂無念無想の境界、物我同體の意識なり。青の色相が人心に及ぼし得べき最高の影響は實に是の境地に到りて極まれりと謂ふべし。」

X X X X X X

寒冷色の中心は青である。そして青に近い色は青緑から紺青に至るまで皆涼しい感じを與へる。

日本や伊太利あたりでは晴天には大空は青々として眞に美しい。然るに北歐諸國では晴れて居る時でも空氣が透明でなく、空は灰色になつてゐる。勿論多少の青みはあるが、さへ／＼とした青色ではない。鉛の様な色をしてゐる。

北歐の人が伊太利の自然を讚美して止まないのは彼等が青天白日の美を見る事の稀な證據である。



さてこの大空の色は飽和の度の強い青ではない。濃い青を日光で薄くしたのだ。あの淡青即ち空色は静かな色だが喜悅の色である。

最も濃い青即ち紺青は深い海の表面に於て見られる。極めて濃厚な紺青は深さ一萬八千呎もある大西洋の水面で見られる。紺青の水より雪白の波の花の咲くのも不思議だが、咲いた花が忽ち紺青に染められるのも面白い。雪白と紺青との争は限りなく繰返されて二つの色彩が目覺ましく活躍する。紺青は如何にも美しい色だが沈鬱で一種の凄みがある。希臘の内海や伊太利の沿岸の如く海が深くなる  
と紺青は稍淡くなつて瑠璃の寶玉を液化した様に爽快になり、更に瑞西の山間ルツエルの湖水などになると藍青は緑を帯びて恰も翡翠の玉を水に化したるが如く、色は静かだが沈鬱の趣は淡くなる。ライン河の上流などになると緑色は益々勝つて青色を壓する。概して水は深きより淺きに移るに従ひ紺青より青を経て緑に移るのである。地球の大部分をなして居る水の色が青であり、天空の色が青であるのだから天地の色は青が主調になつてゐると謂はなければならぬ。空の見える處、水の動く處、人間の心を沈靜させる働きが絶えず行はれて居る。花の中にも菖蒲、紫陽花、野生の朝顔などの色は何れも涼しく靜かに人の心を休息させる色である。

x x x x x x x

尙吾々が日常使用してゐるインキの色なども青色となつてをるの吾々の目を鎮めさすには非常に好都合のものである。試験の答案用紙の罫の色などもよく赤を使用してあるのを見受けるが此頃青を用ふるやうになつたのは非常に面白い。

又浴衣などでも紫がかったものよりも水色のものが夏にはその着用する人にうつりもよければ、又見る人によい感じを興へるものである。

青空のやうな帷子かたびら着たりけり

一 茶。

緑と青との混合の例として次の句をあげてをく。

青柳の日に緑なり句を撰む

漱 石。

又「青物」など用ふるが實は「緑物」である。





「緑」

Green: — peaceful, neither sad nor cheerful.

(悲哀にあらず、快活にあらず)

Green; rather a crude tint }  
 生ノ(未成熟ノ) } oboe

Green eye 悋氣、嫉妬、(青眼と比較せよ)

a green hand 未熟者(邦語青二才と比較すべし)。

to be in the green 血氣壯なり。

to be in a green old age 老いて益々壯なり。(鏗鏘たり)

次に高山樗牛及び松本博士の緑に關するものをかゝけてをく。

「緑は青の一步を轉じて赤に近づきたるものなるを以て、それが表示するところの感情は青の沈靜に加ふるに黄の理想を以てす。即ち是れ安慰の中に一分意志の發動を交へたるものなり。是を以て緑は古へより希望の色なりと謂はる。そは希望とは理想に對する向上の思索に外ならざればなり。」

「地上に於ける非情の生物の有する特色であつて天には無い色が綠色とその附近の色である。」

この色は紫紺と橙黄との中間に位する、いつまで眺めて居ても飽きない色である。嫩草や若葉は大抵淡綠色で始るが日を経るまゝに綠色となり、終に暗綠色となる。若葉の萌え出るときは誠に美しい。氣が暢びくする五月初めの若葉は四月初めの花よりも遙かに趣が深い。東台、東山、宇治、嵐峽の新緑を訪うて樂しむ人の割合に少ないのは花見客の多數が自然の風色を樂しむ心をもつて居らぬ事を示して居る。佛獨あたりでは花に對しては餘り騒がないが、森林の色を樂しむことは著しい。また英米では面積の廣大なる芝生を造ることが實に巧である。共に其の國民が綠色趣味に富んで居る事をよく示して居る。日本の三都のうちで市街に樹木の最も多いのは東京である。殊に高臺から見渡すと東京は樹木の都と謂つてよい。京都は周圍に美麗なる山色はあるが御苑を除いては市中には樹木が乏しい。大阪は市の内外共に樹木は甚だ少い。製造都會が自然を隔絶するは己むを得ないが、自然か





「紫」

Violet: — Subduing, serious

制する、服する

To the point of melancholy.

Purple: — Stately, pompous, impression.

いかめしく、尊大なる

M. Albert Lavignac: —

violet — Cor Anglais (楽器の一種)

Raff: —

Purplish to brownish—violet — Trombone (一種の大喇叭)

自分の考: —

violet — 琴、

to be born in the purple 王侯の家に生れる。

to marry into the purple 素性賤しき女が高位の人の妻となる (玉の輿に乗る)

A woman of no birth may marry into the purple. 女は氏なくして玉の輿。

ら餘り隔離すると人の心は俗了する。大都會に樹木鬱蒼たる大公園を作るのは都人士の心身を健全ならしむる上に必要な事である。」



次に松本博士の紫に關するものをかゝげる。

「暖かい色と寒い色との中間に在る點に於ては緑と同じであるが、色の性質に於て正反對なのは紫である。紫にも紺青に近いものと赤に近いものとある。

牡丹、芍薬、鸚鵡の花は赤に近い紫で、杜若、菖蒲、菫、藤の花などは紺色に近い紫である。木蓮の花は丁度桔梗と赤との中間にある。人間に培養された朝顔の花は差別が甚だ多いが大低赤と青との中間に變化して紫色のものが最も多數を占める。總じて紫色の花は人を興奮させると同時に人を沈靜させる。派手なるが如く、おとなしきが如く、兩様の趣が具はつて居るために人を惱ます色である。薄紫になると優美の情趣が加つて来る。

紫色に光輝が加はると莊嚴な色になる。ゲーテが「神がすべての人に審判を下す世界の末日の色は必ずや紫色であらう」と言つたのは其の莊嚴の趣から考へたものであらう。ヴィクトリア女皇は紫を好み、女皇の大葬の日は倫敦市中紫の幕で張りつめた。紫は王者の色と謂ふことも出来る。」

尙次に榜牛のものをあげれば、

「紫は青と赤との中間に位するもの、而してその表示するところの感情は渴仰 (Sehnsucht) なりのやうなものがある。」

又次にかゝげる詩は新井白石が自分の肖像に題したものである。その眼の莊嚴さをあらはすに如何に巧みに紫の字を用ゐたかがうかがはれる。

自題肖像

新井君美(白石)

蒼顔如鐵鬢如銀。紫石稜々電射人。

五尺小身渾是膽。明時何用畫麒麟。

晉書、桓溫傳「眼如紫石稜」

又東京などで醤油のことを「むらさき」と云ふがこの使用なども面白い。  
次に二三紫をつかつた俳句を紹介してをく。

海邊の曙といふ題に

紫の夜はあけかゝる春の海

几 菫。

紫に明け行く方や春の水

關 更。



The Sensation

行く春や紫さむる筑波山

紫の曙さめて遠柳

又北原白秋の次の散文も紫に關するものとしては面白い。

蕪村。  
蘭更。

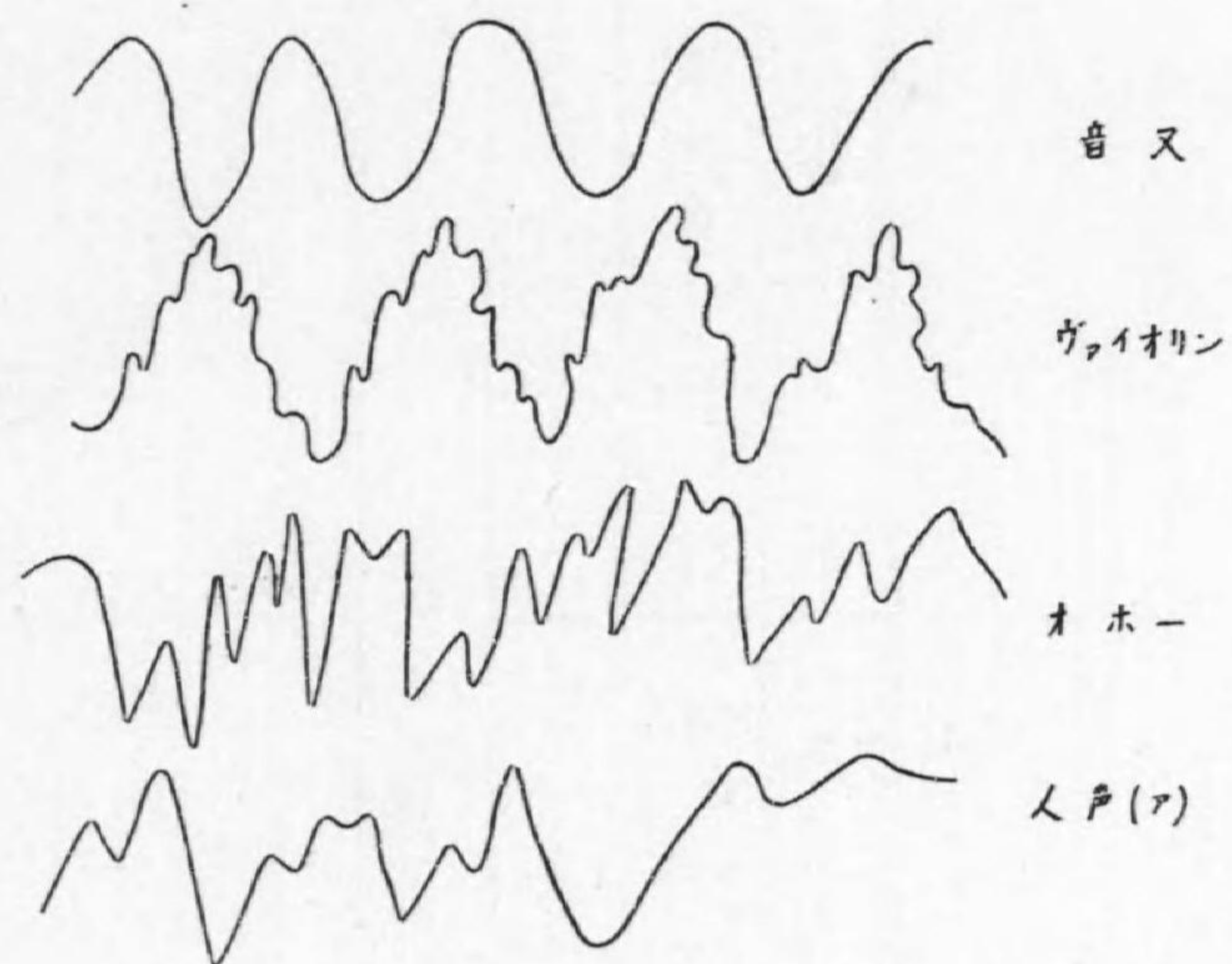
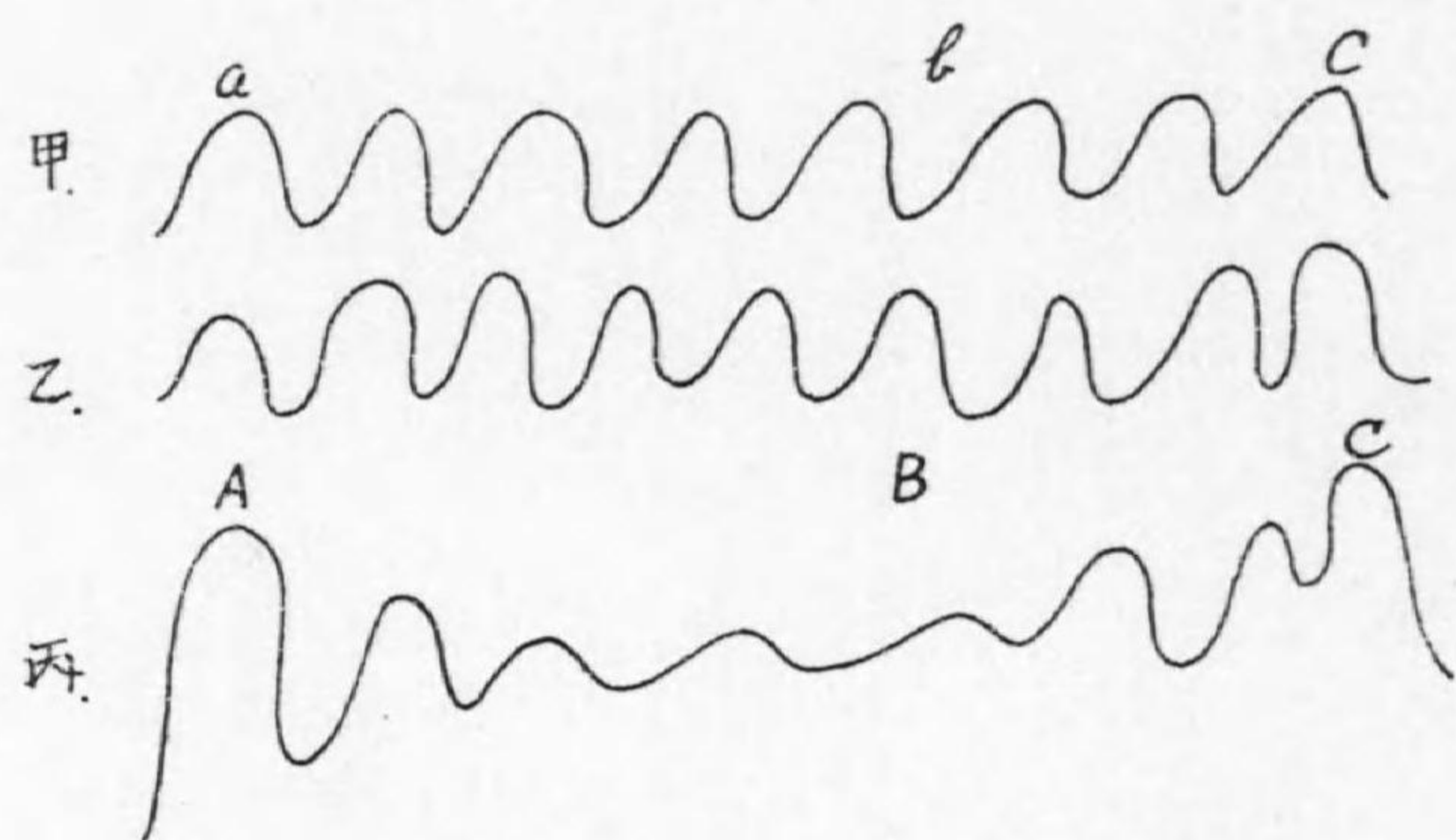
「ああ、その親しい風景の中に、私に一番近く、柳が枝垂れ、ほそほそと紫の煙を立てはじめた草葺の家、あれこそ私の家ではないか、妻がもう夕餐の煙を立ててゐる。私はたまたまなくなつて茄子やもろこしの間を駈け抜けた。」

紫の煙！ 紫の煙！ 私は私達のこの畑の中の新居を、その晩、紫烟草舎と名をつけた。」



振動數比	歐洲名	日本名	音階表
1	do	ド	
$\frac{9}{8}$	re	レ	
$\frac{5}{4}$	mi	ミ	
$\frac{4}{3}$	fa	フ	
$\frac{3}{2}$	sol	ソ	
$\frac{5}{3}$	la	ラ	
$\frac{15}{8}$	si	シ	
2	do	ド	







「音の有無の對比」

餘鯉何汎々。空水共悠々。  
陰霞生遠岫。陽景逐廻流。  
蟬噪林逾靜。鳥鳴山更幽。  
此地動歸念。長年悲倦遊。

古池や蛙飛び込む水の音

静けさや岩に染み入る蟬の聲

谷深く柚木伐る音長閑なり

長閑さや障子にあたる蛇の音

松は終日奏でゝ濱の長閑なり

雉子ないて山を長閑にしたりけり

車 籟。  
里 十。  
野 芙蓉。  
青 々。

鯉はねて水静なりほととぎす

綱引のこゑこだまして静なり嶽を背にする校庭の秋

長閑さや岩の鷗の啼きもせず

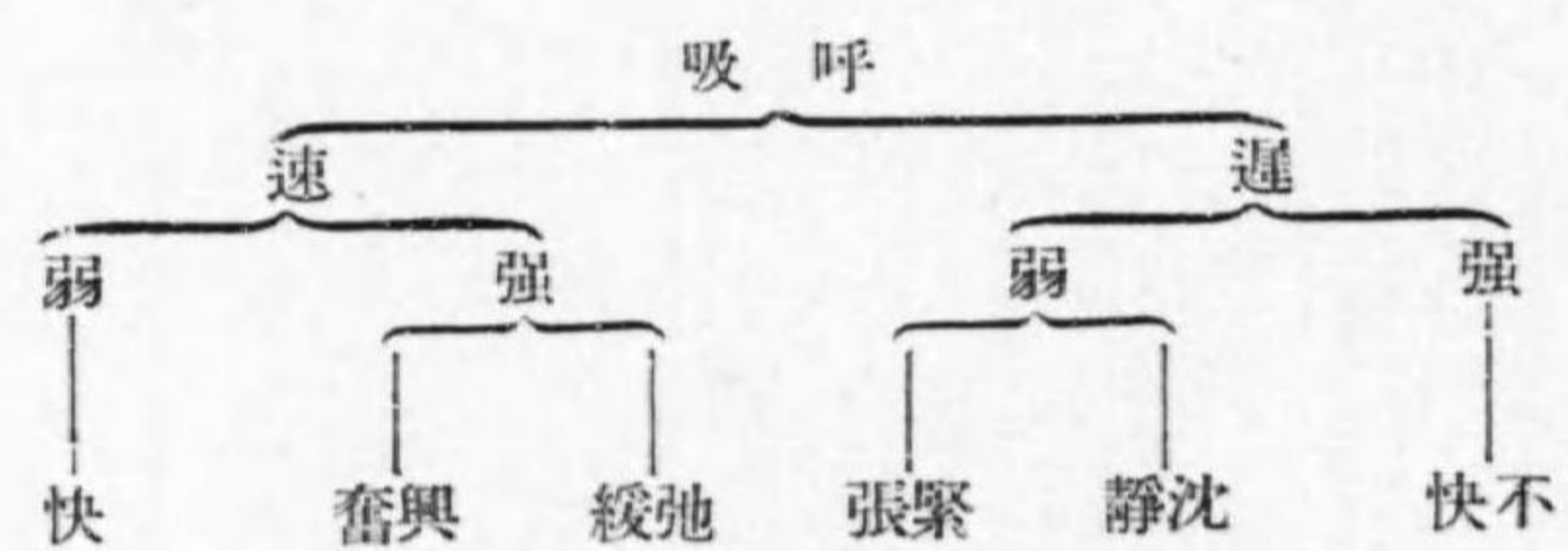
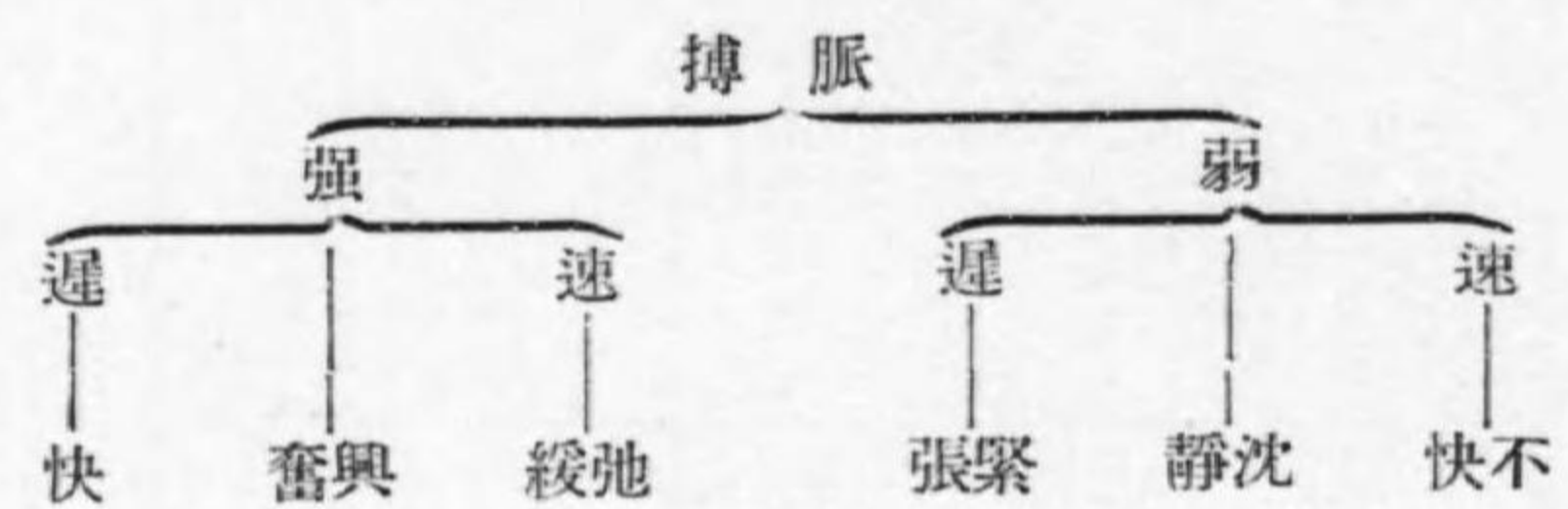
言 水。

斗 入。

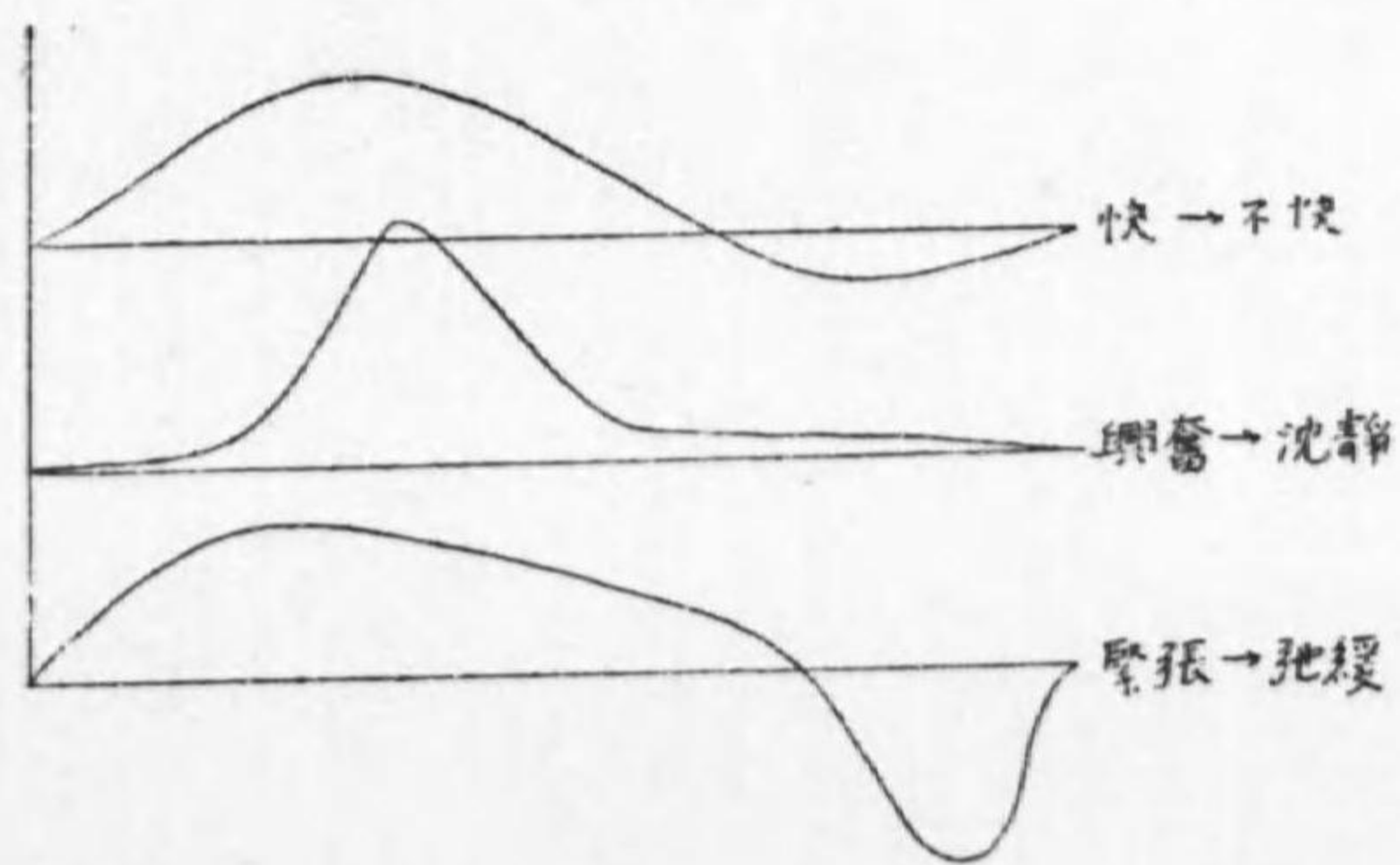
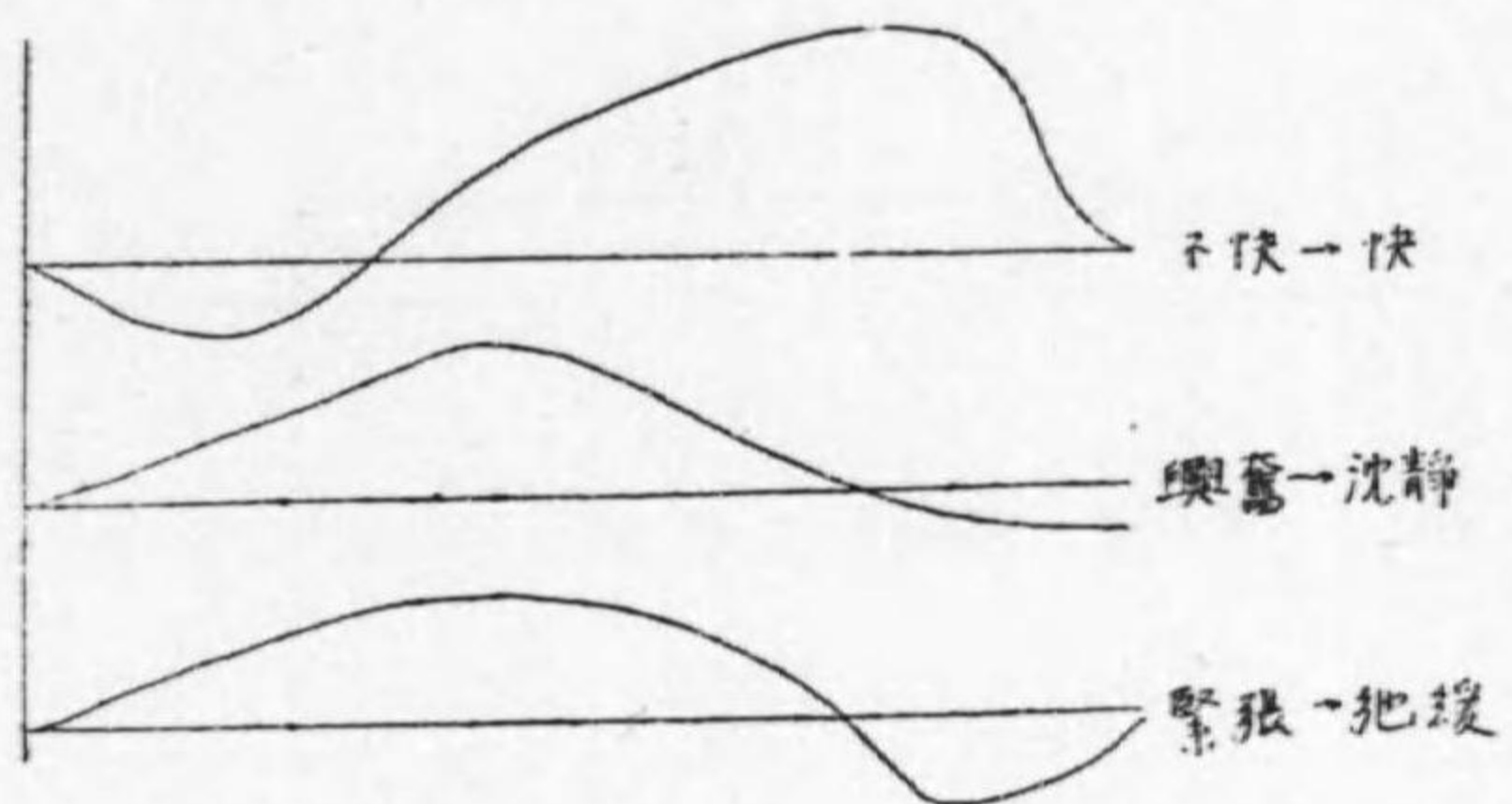
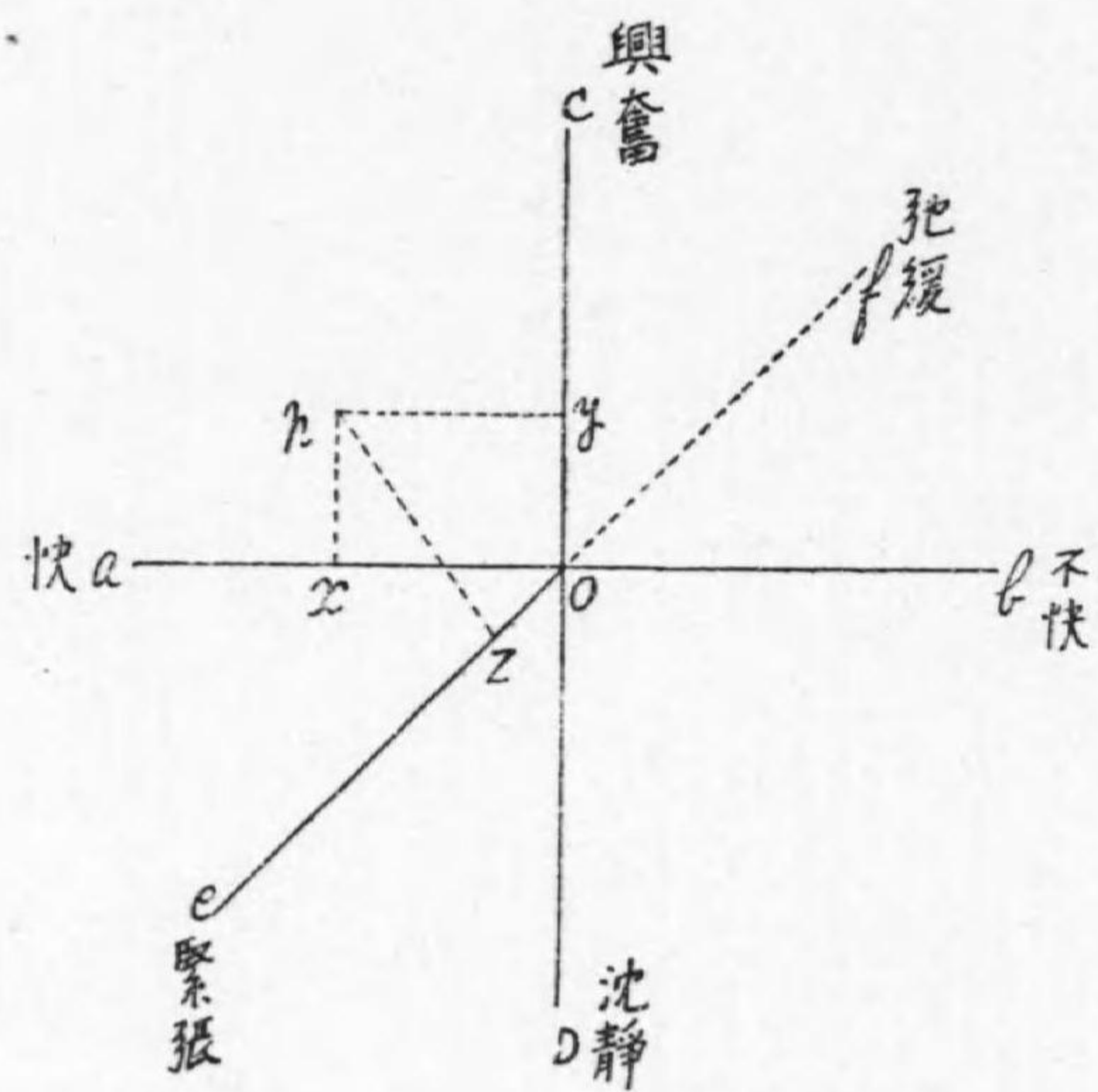


*The Simple Feeling*





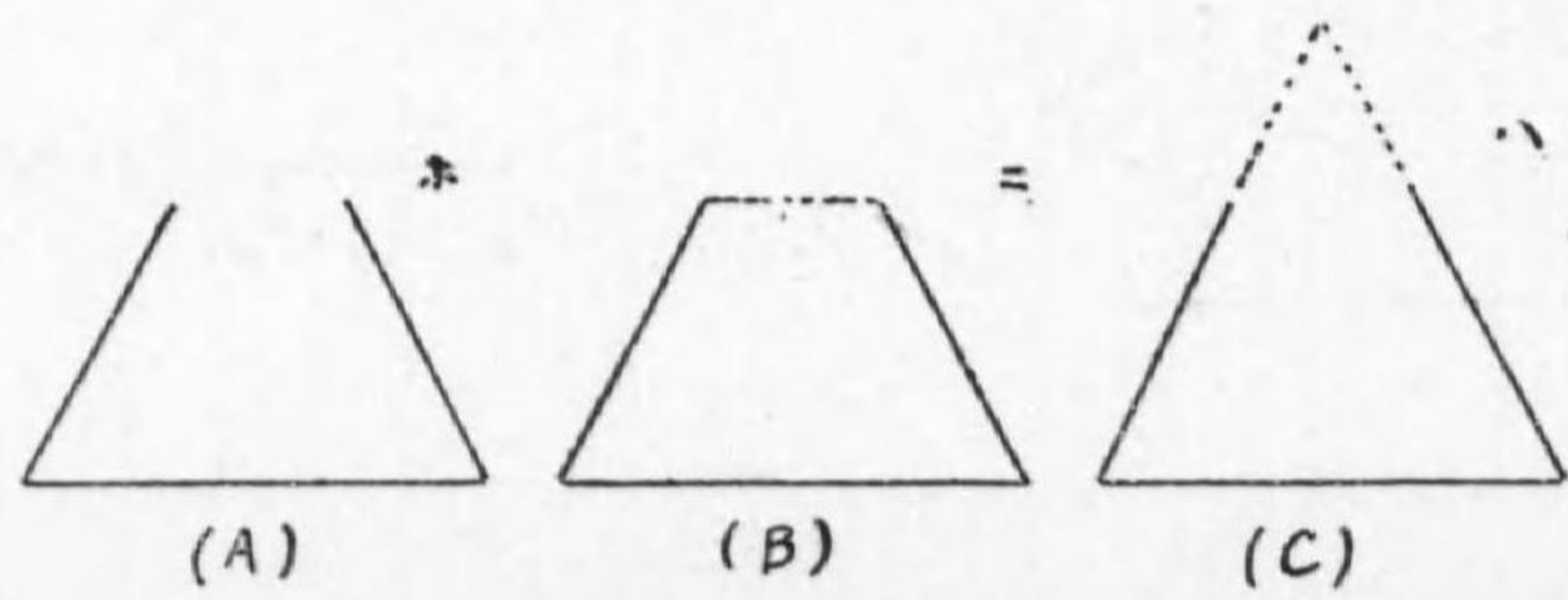
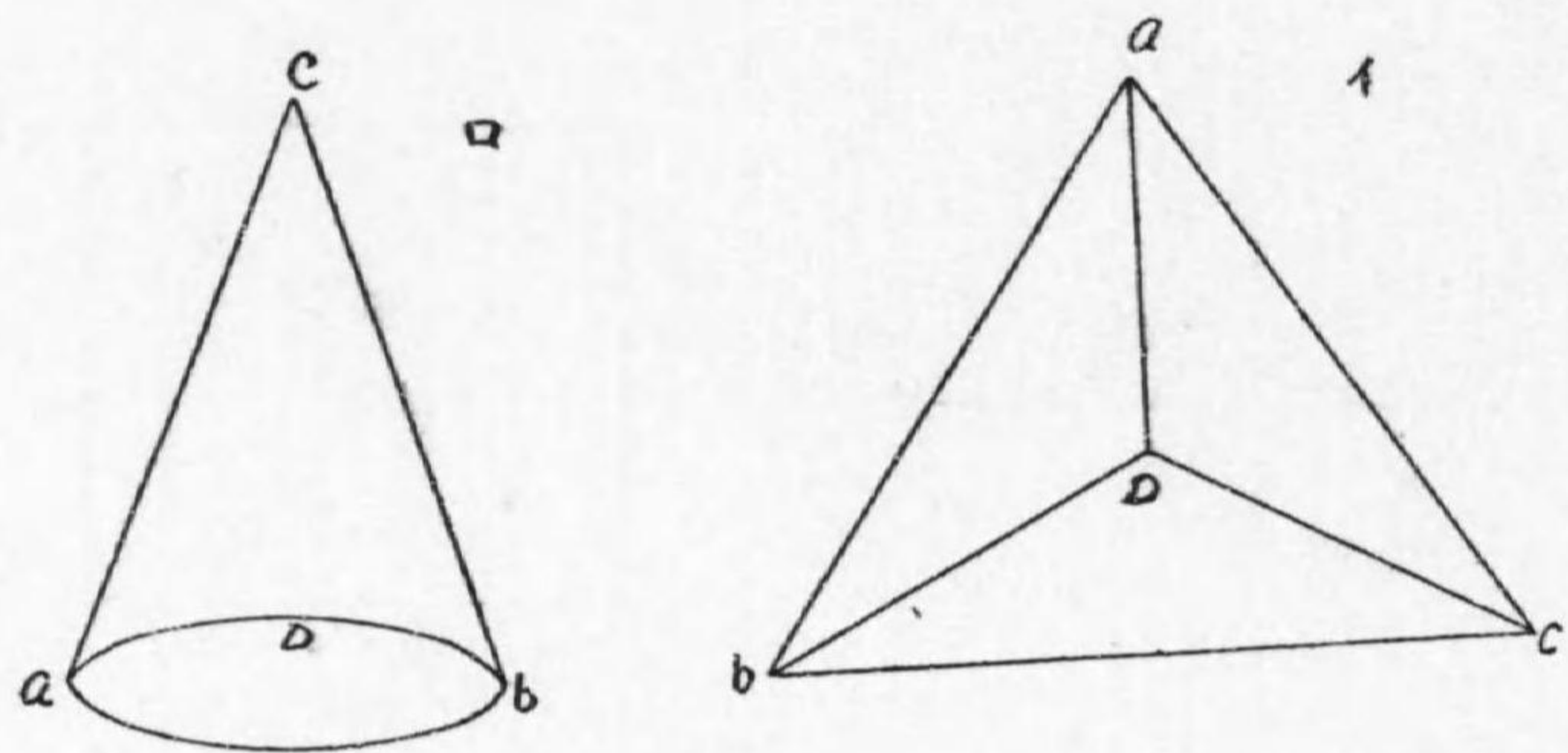




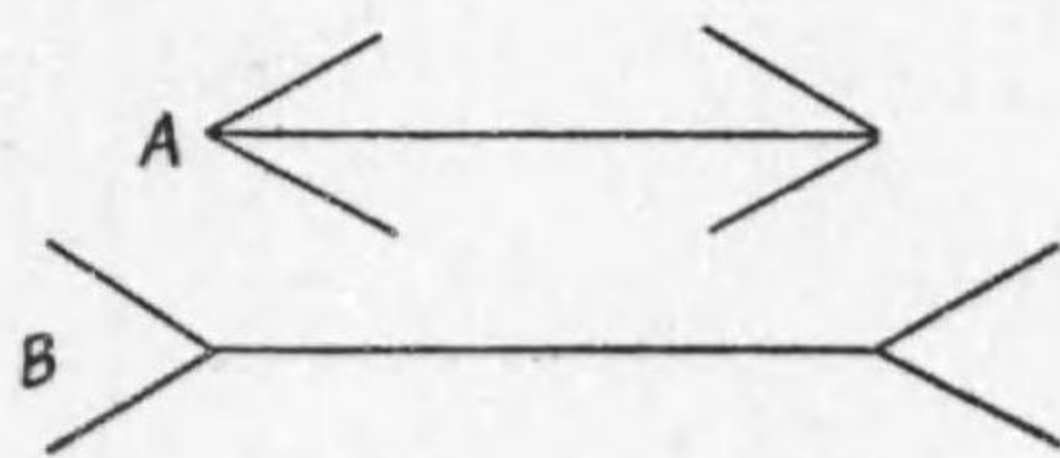
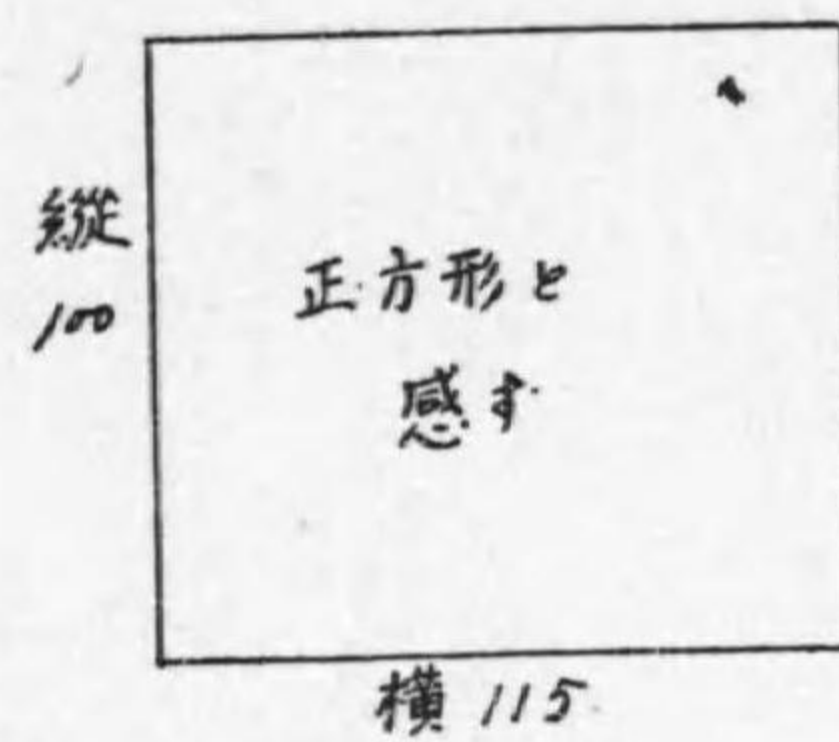
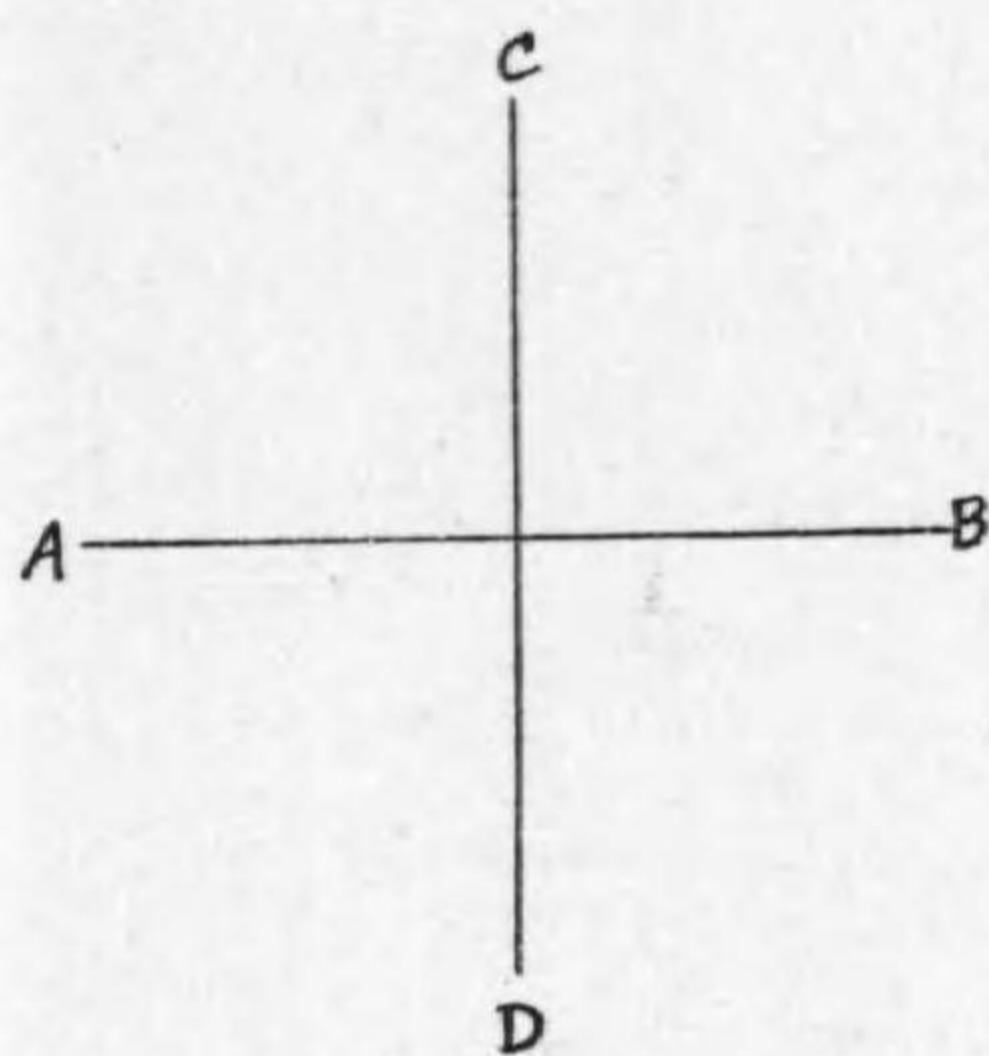
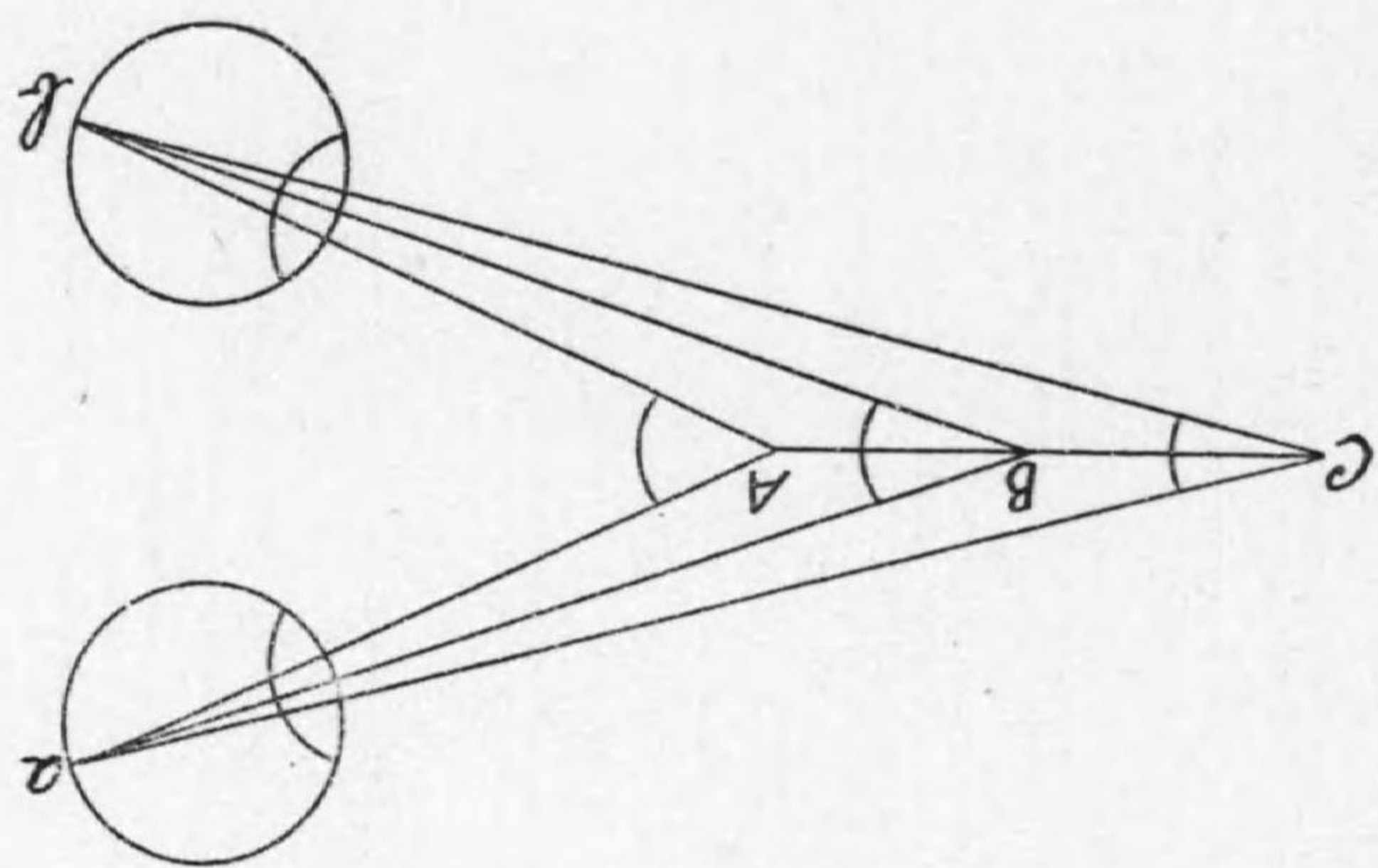


*The Idea or Mental Image*

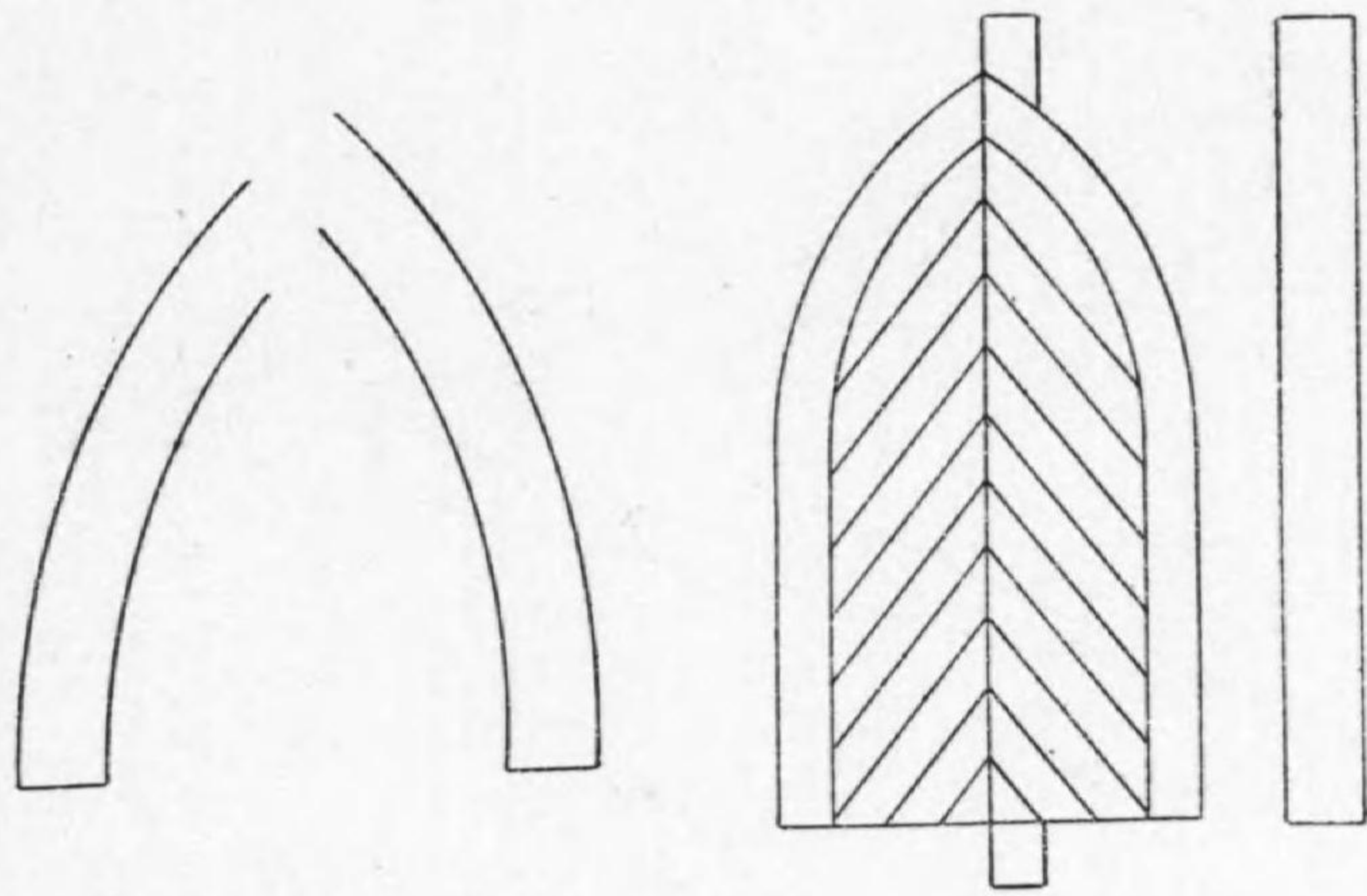
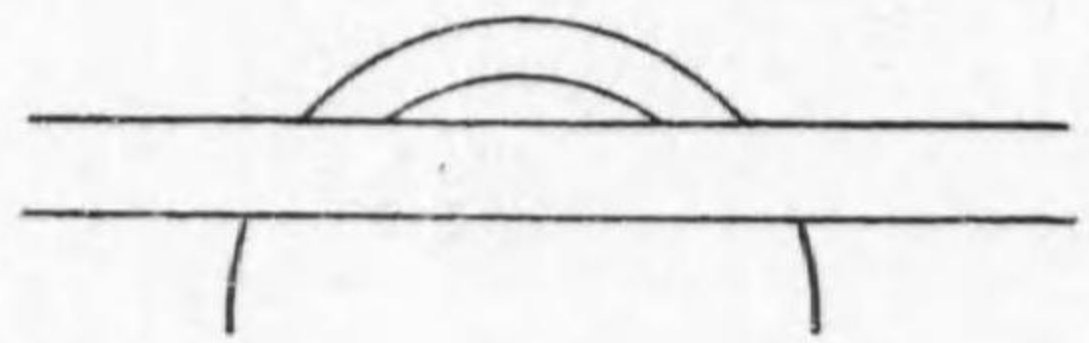
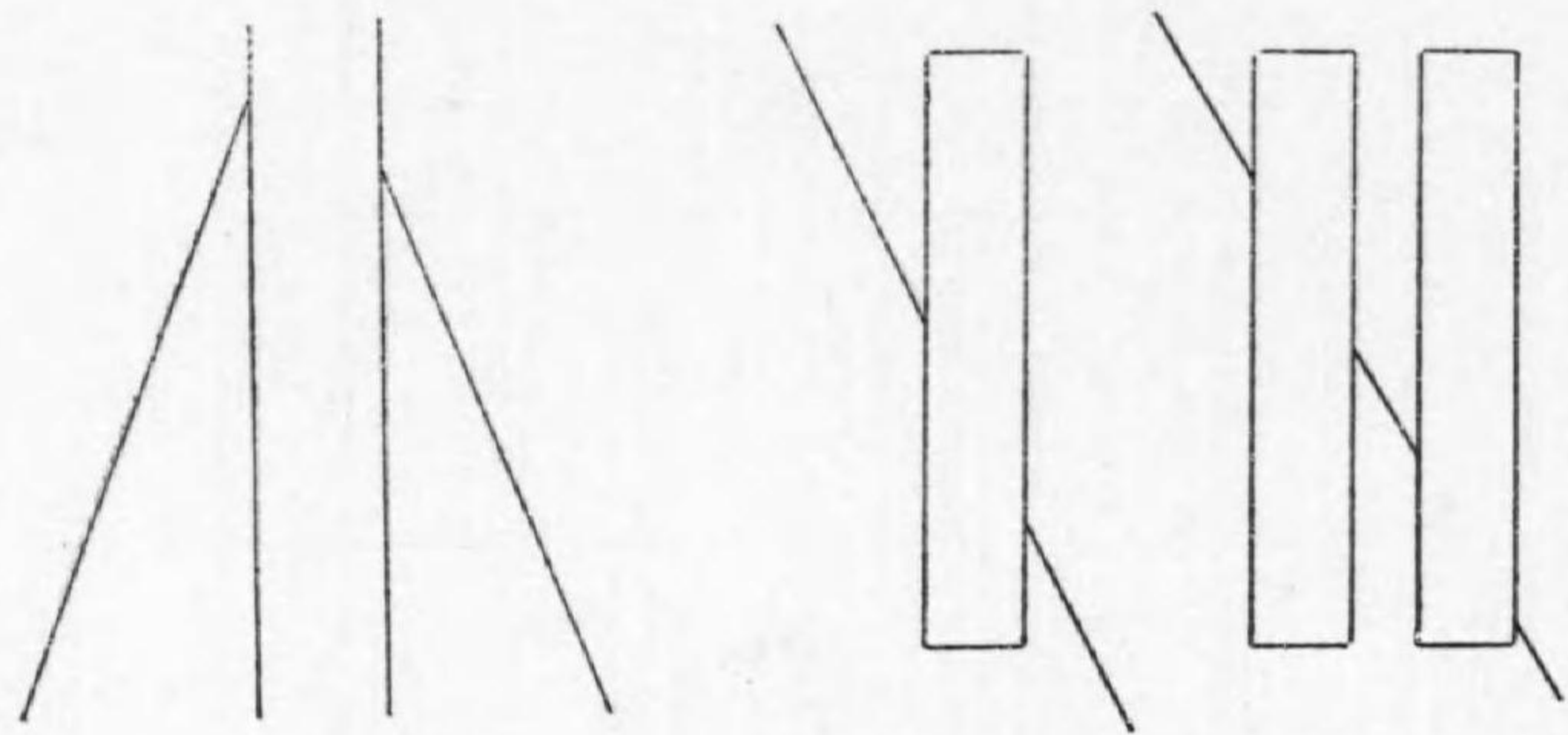






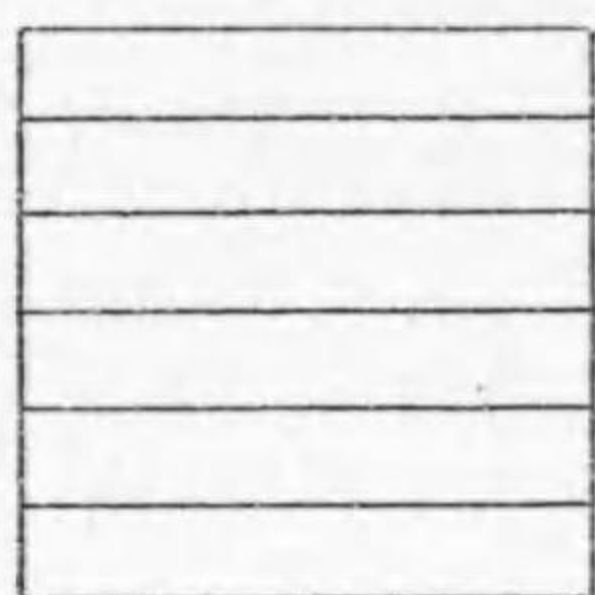








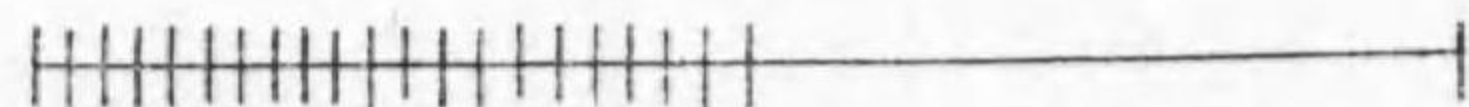
(口)



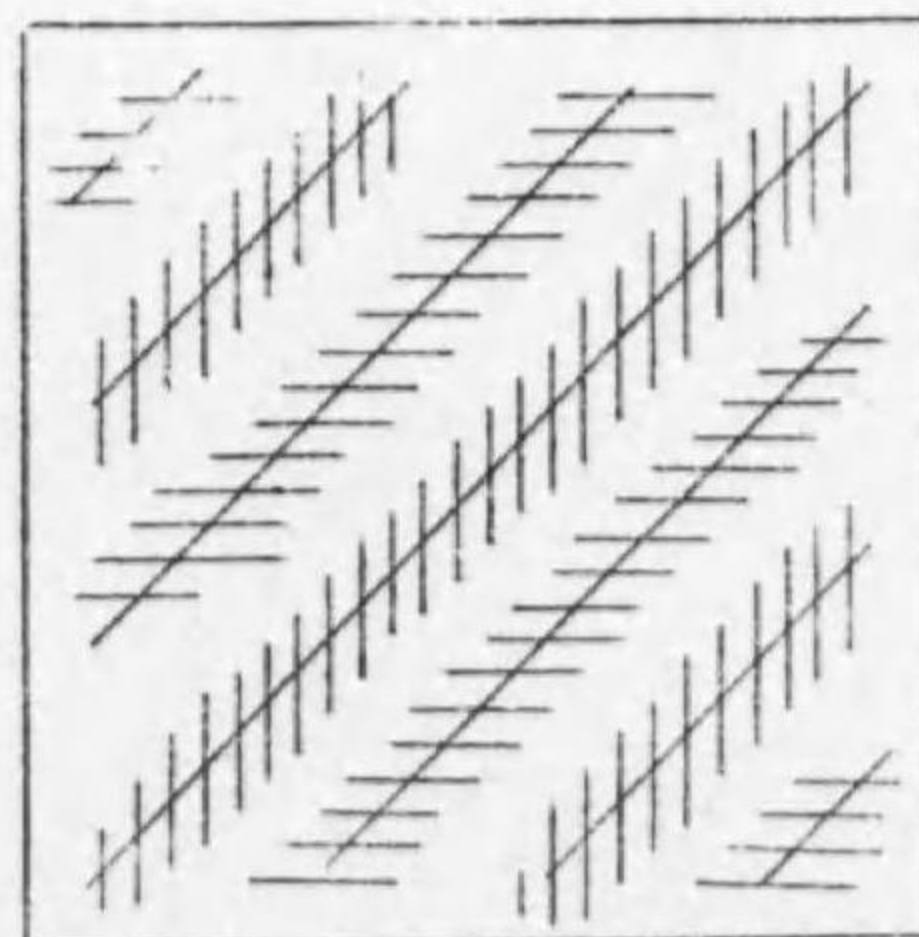
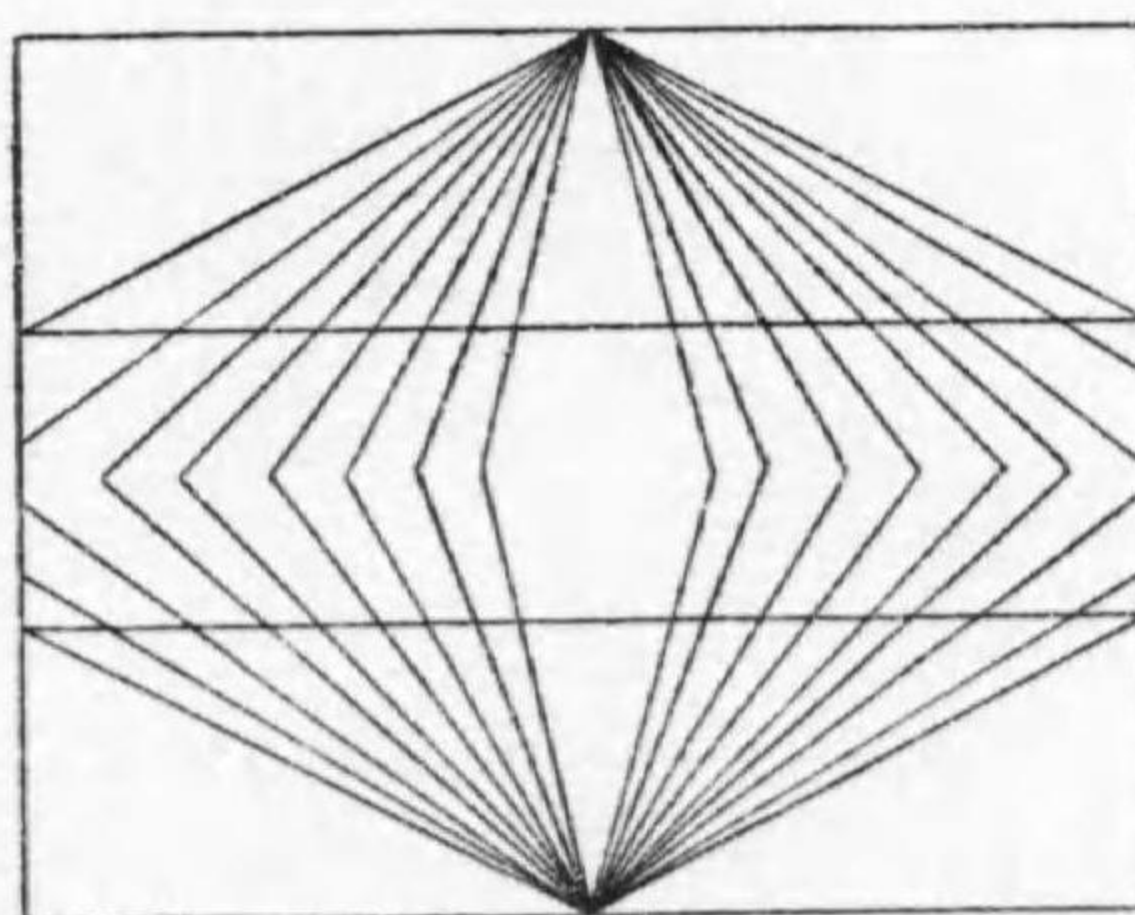
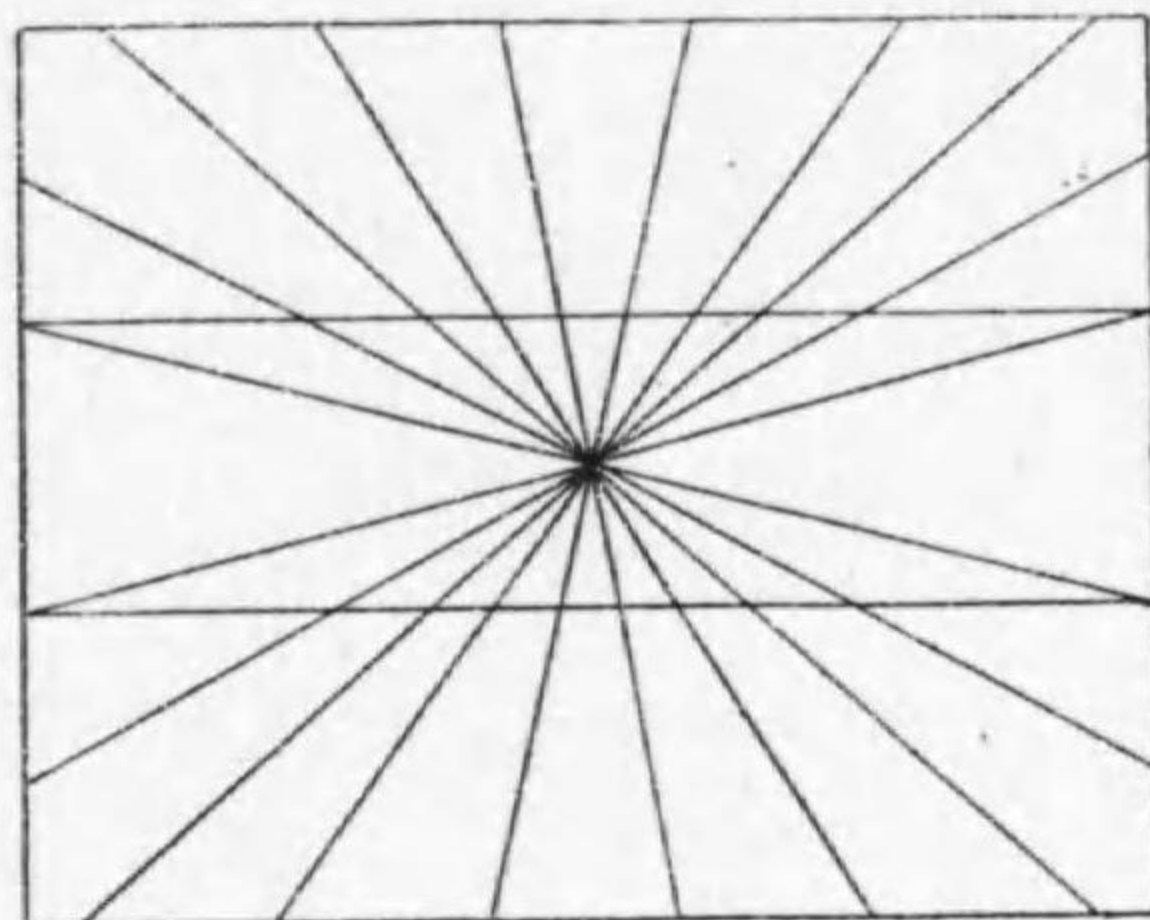
(イ)



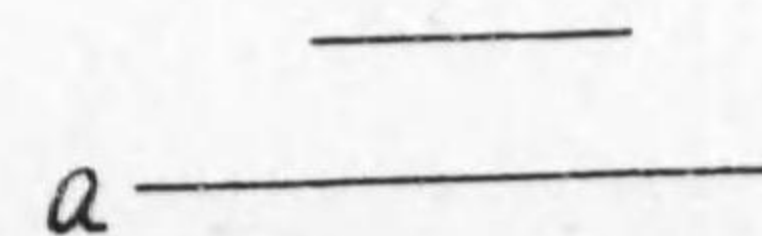
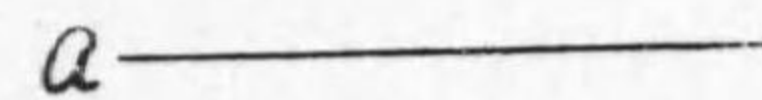
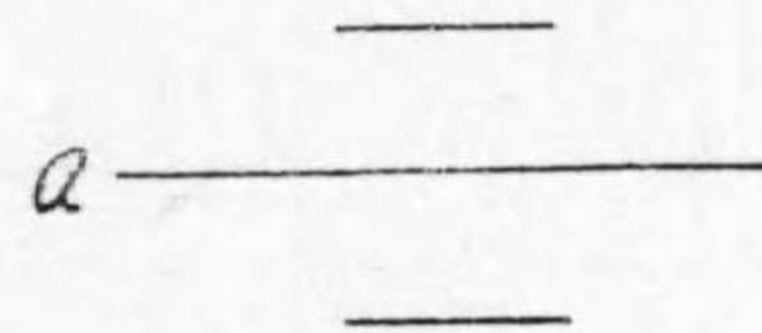
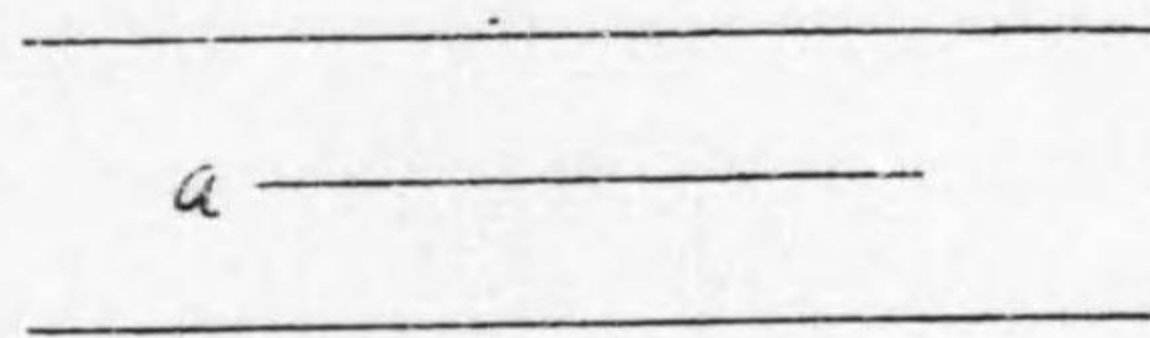
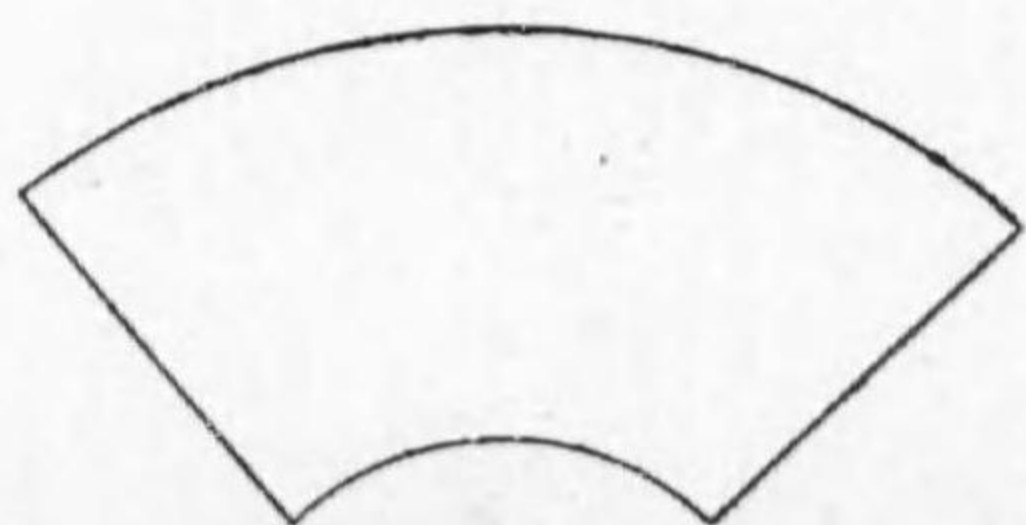
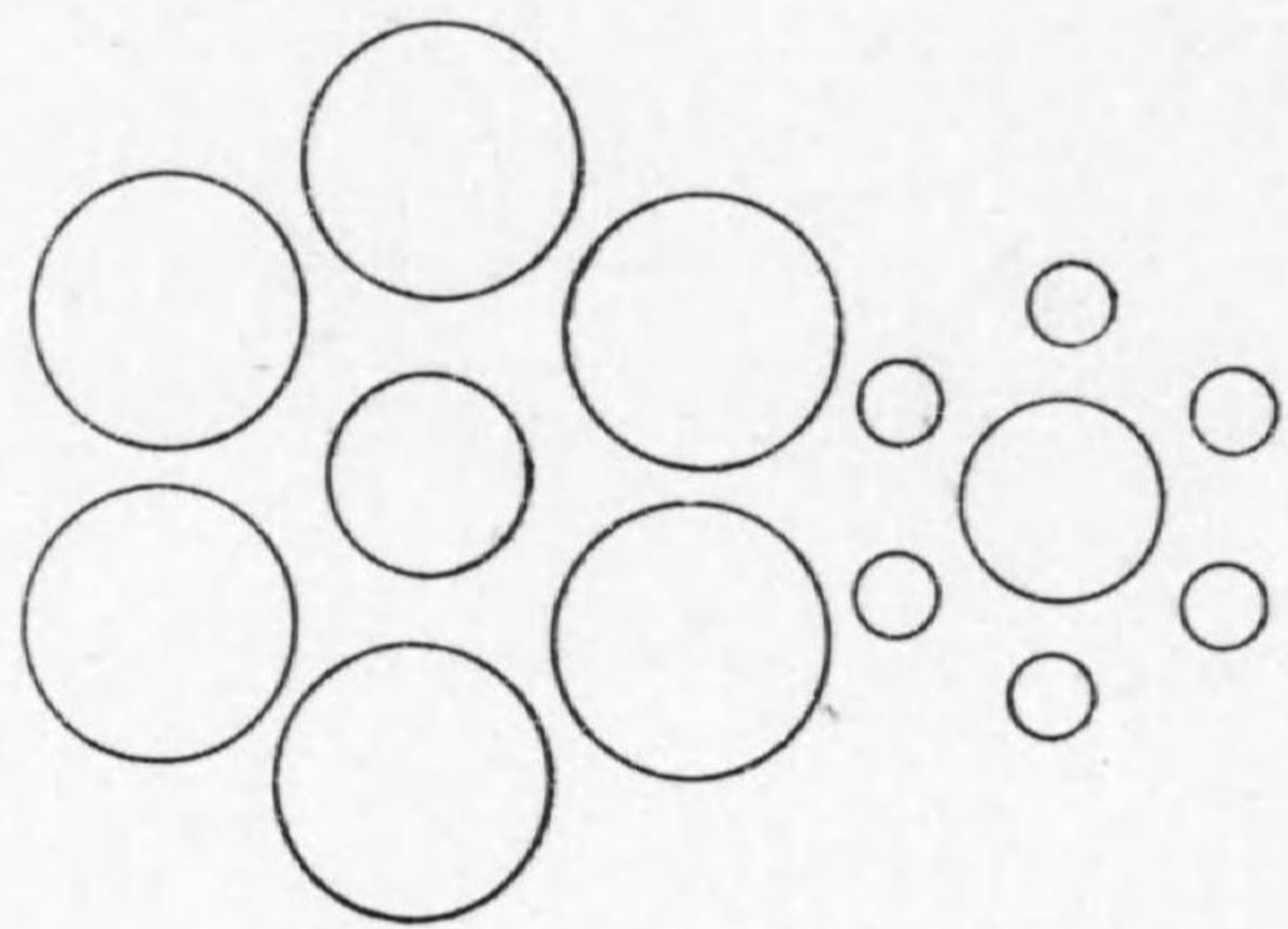
(ハ)



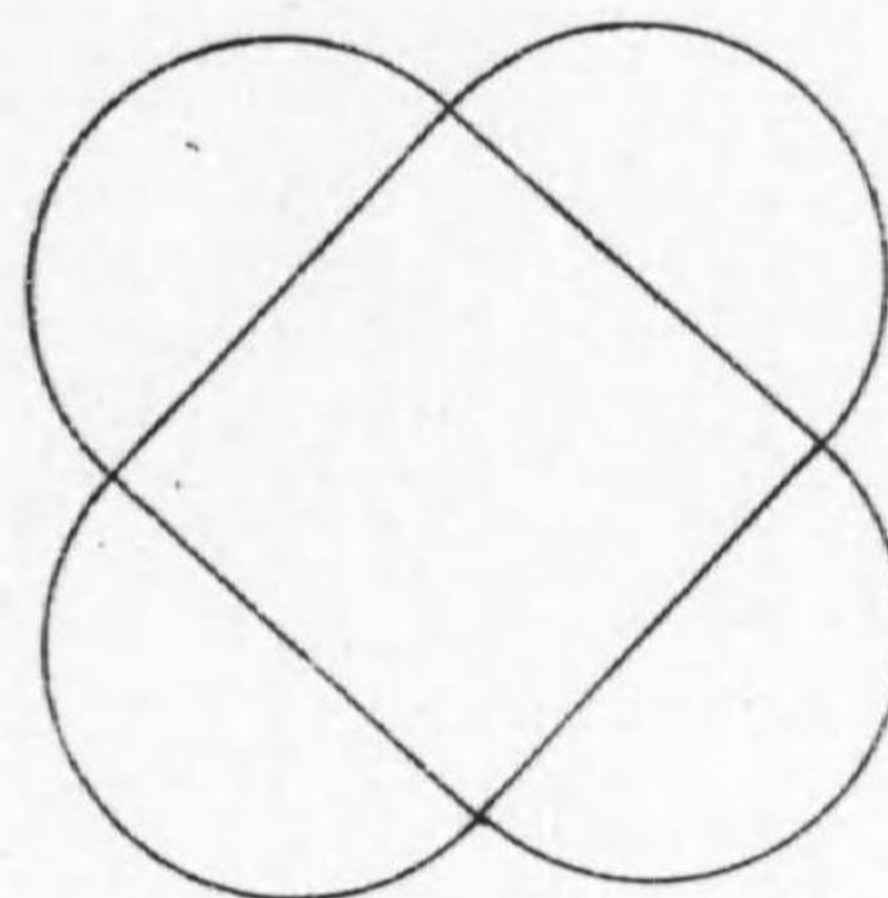
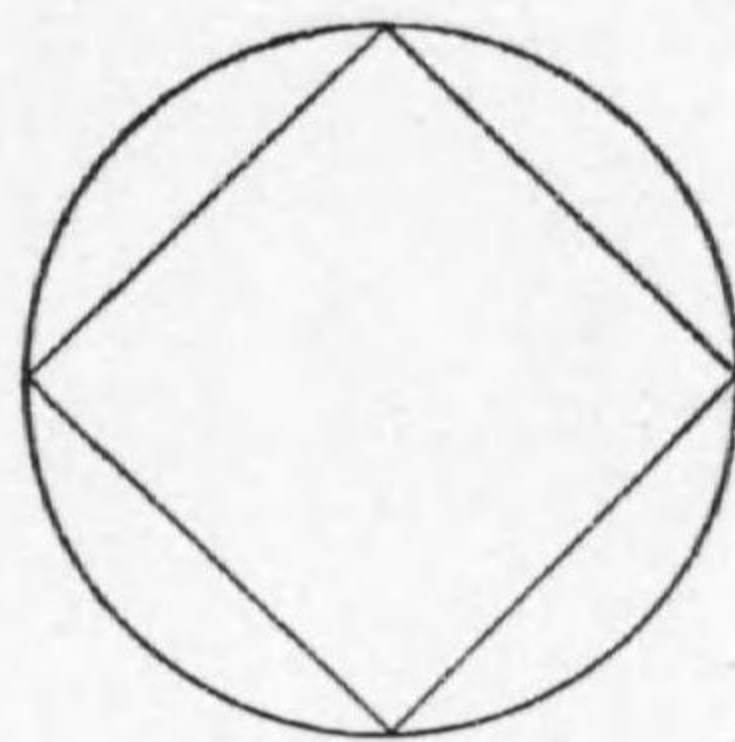
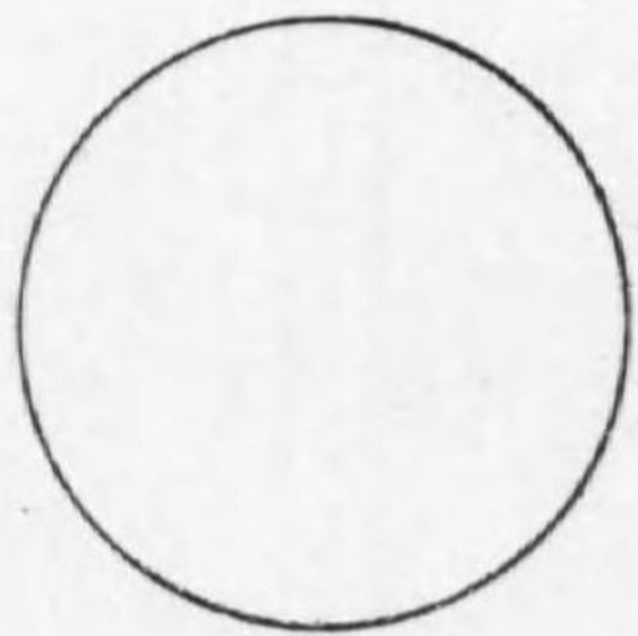
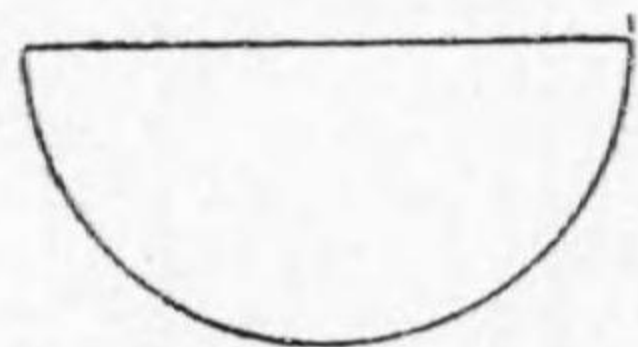
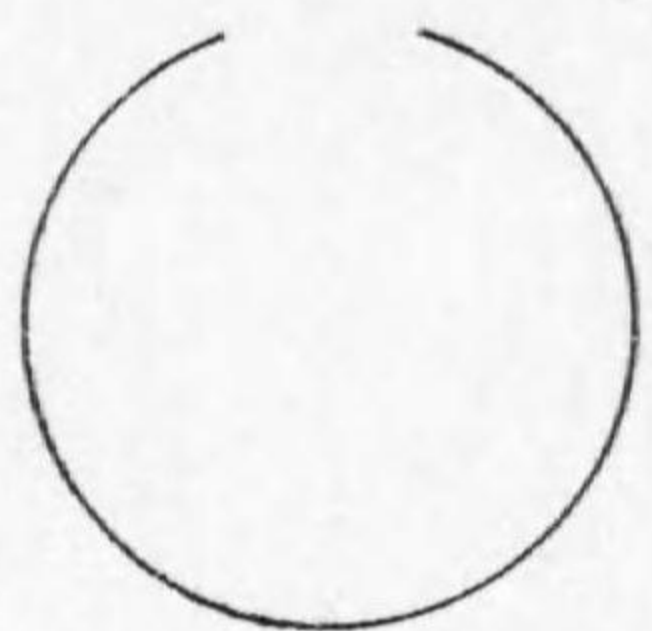
(ニ)



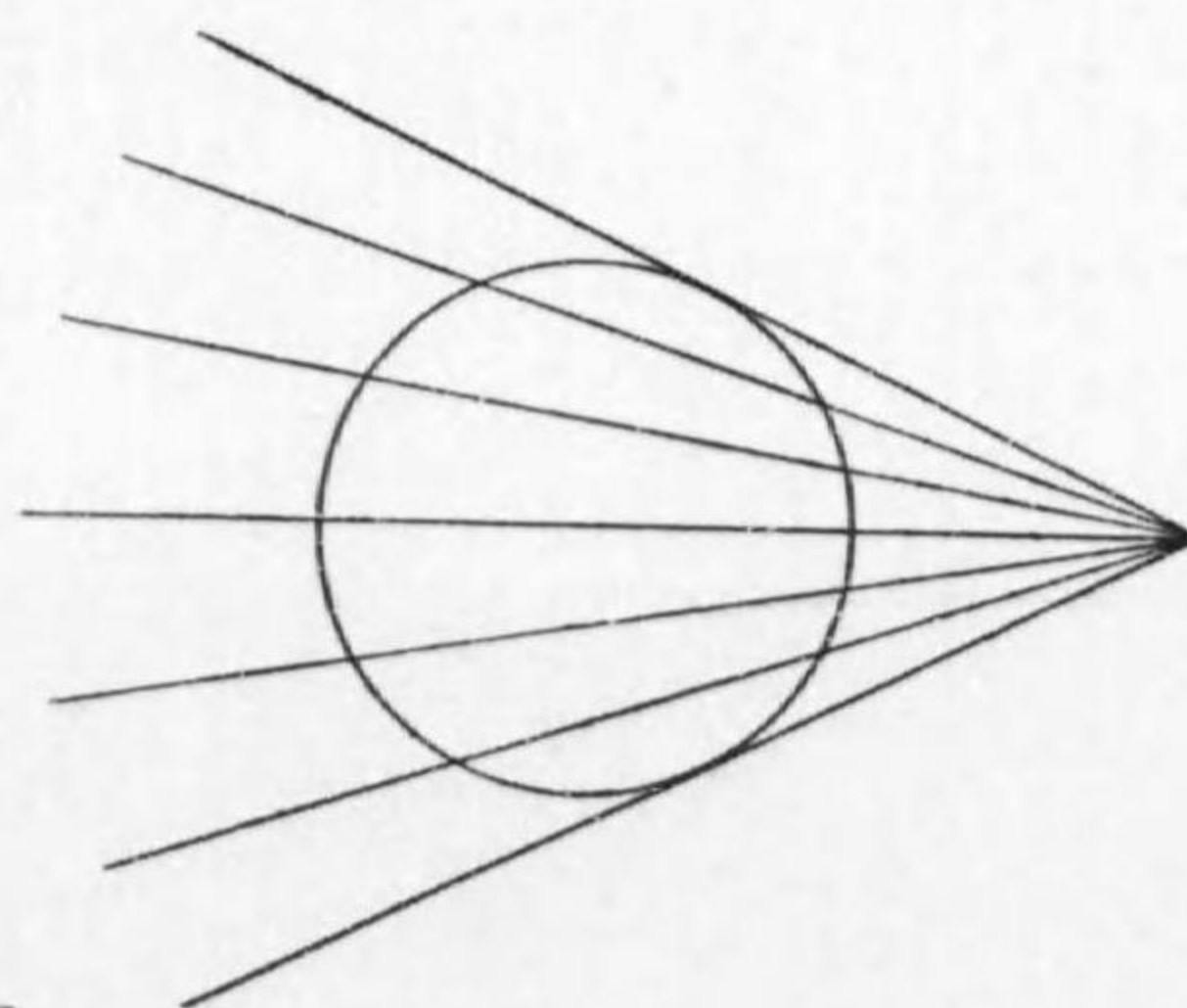
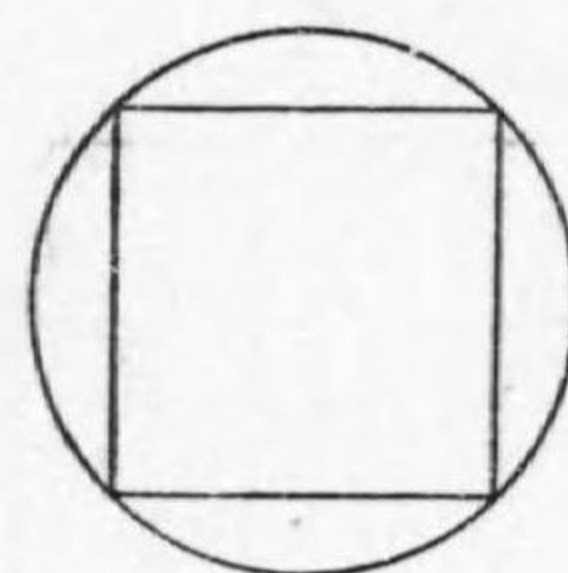
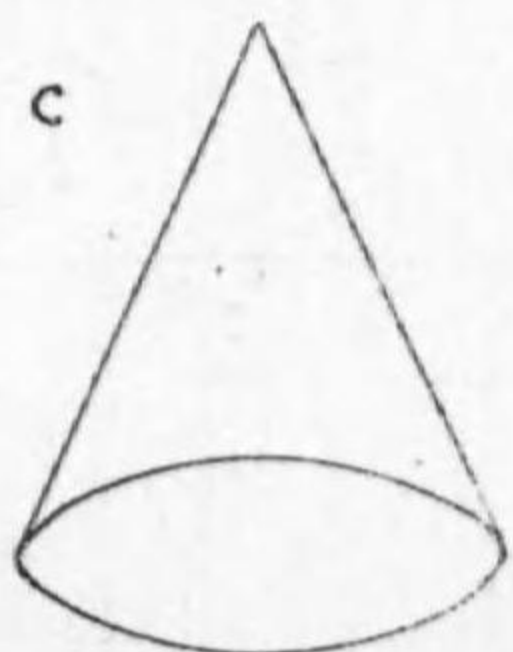
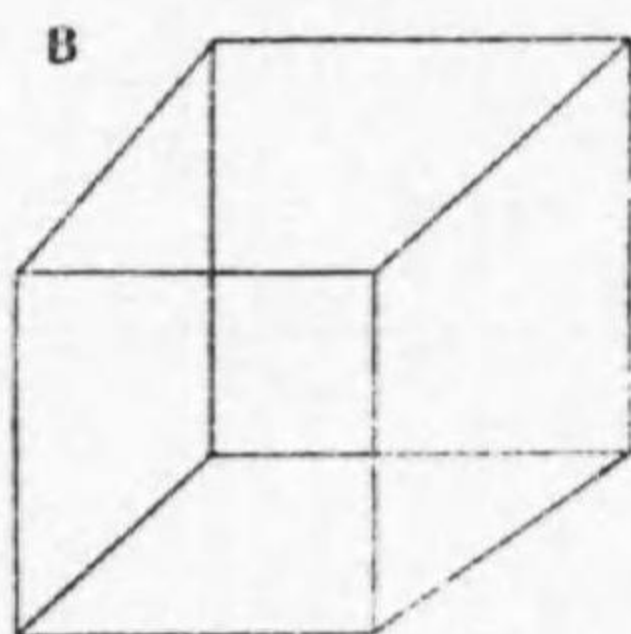
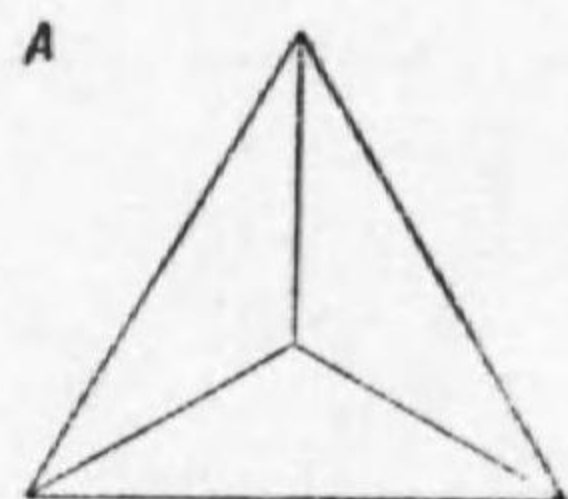




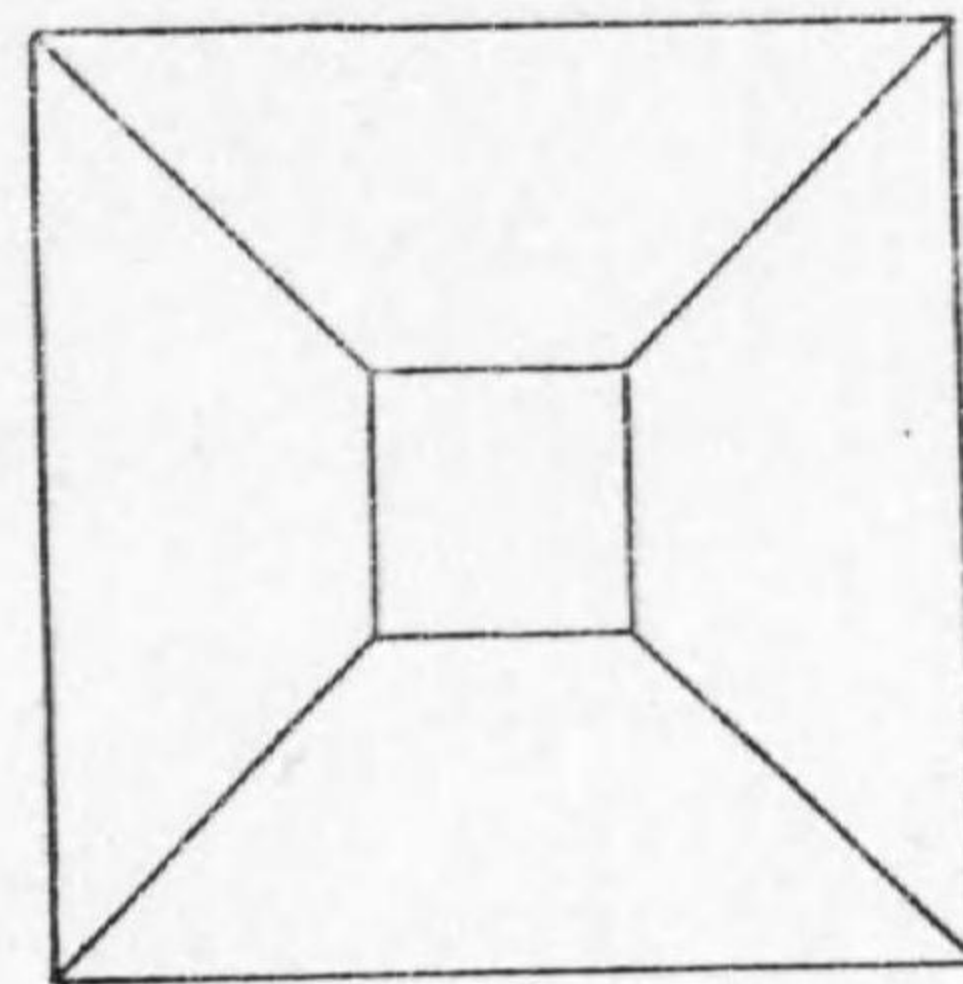
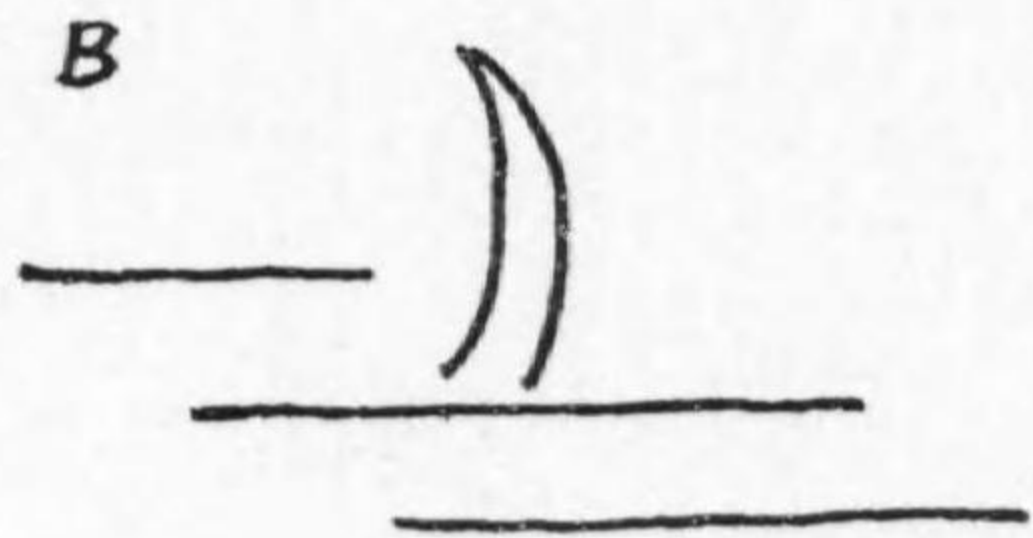




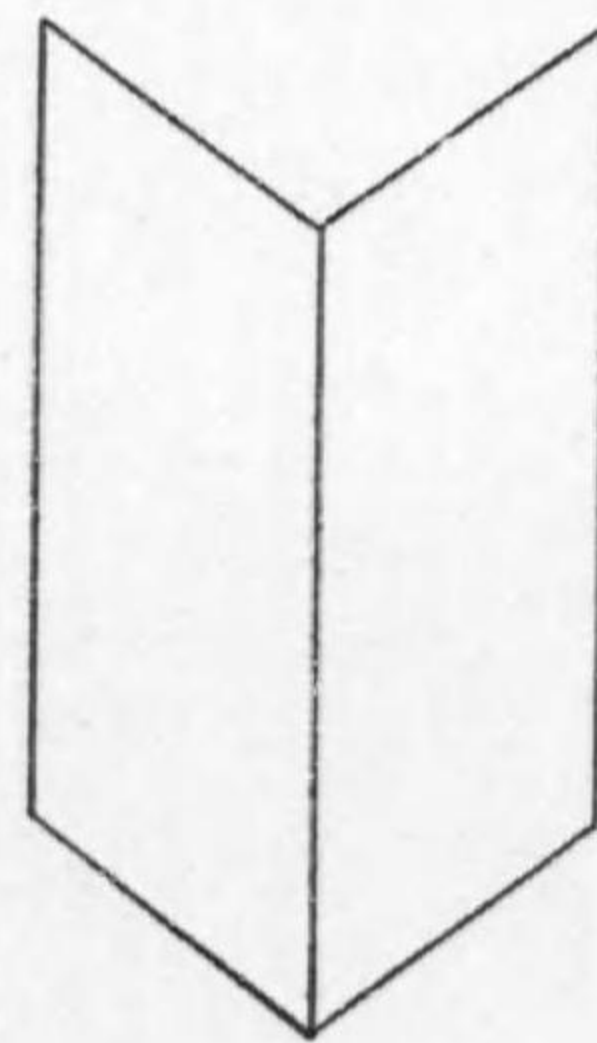








1



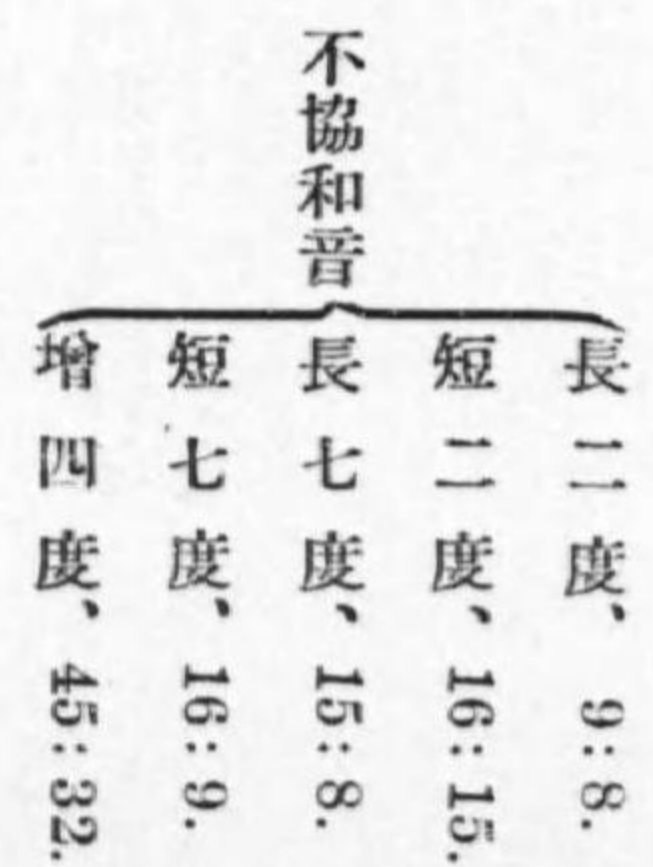
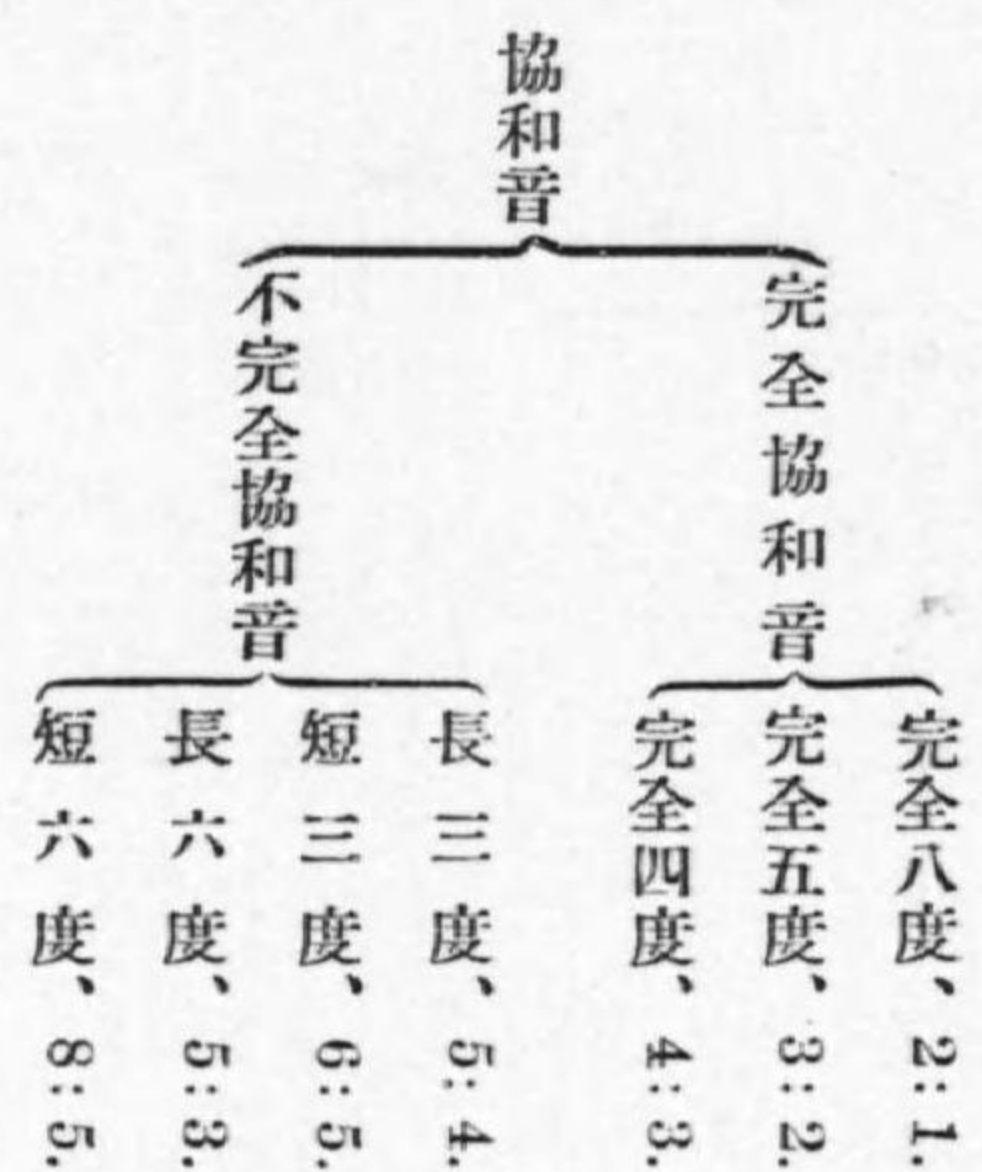
2



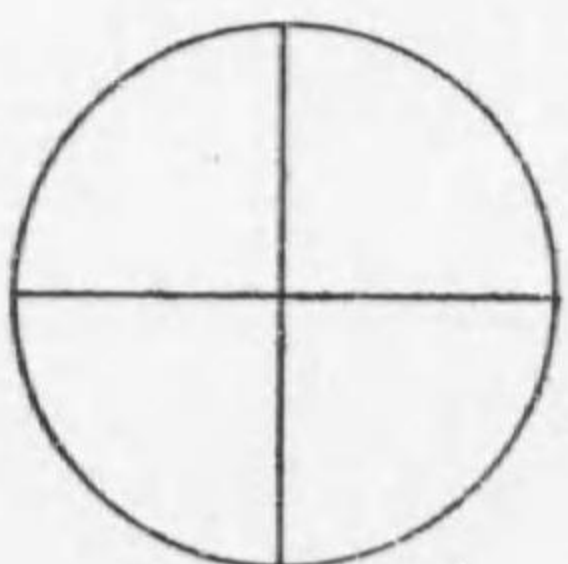
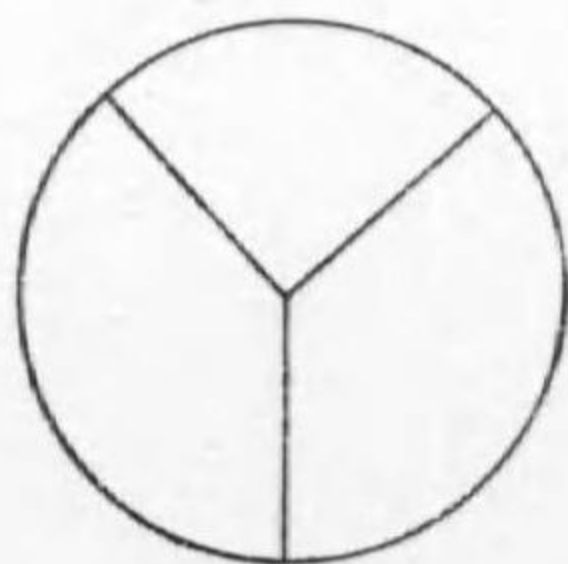
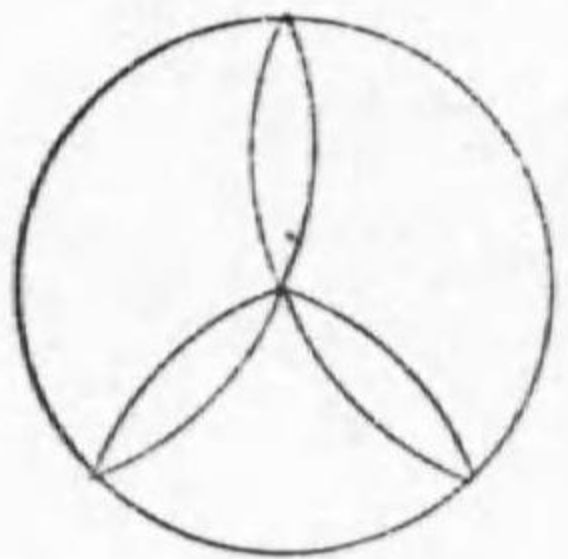
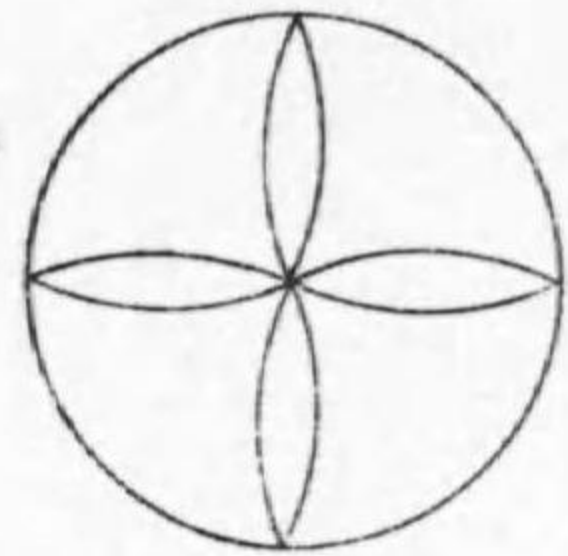
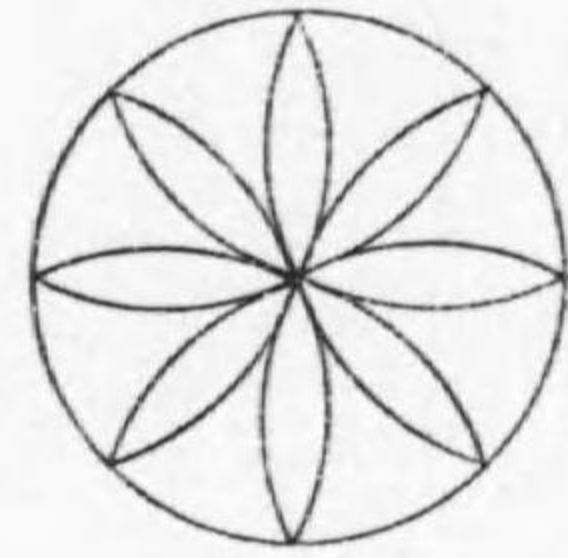
「音の錯覺」

「龜山のあたり近く松のある方にかすかに琴ぞきこえける。峰のあらしか松風か、たづぬる人の琴の音か、おぼつかなくは思へども、駒をはやめて行く程に、片折戸したる内に琴をぞひきすまされたる、ひかへてこれを聞きければ、さてもまがふべくもなく、小督の殿の爪音なり。」（平家物語）



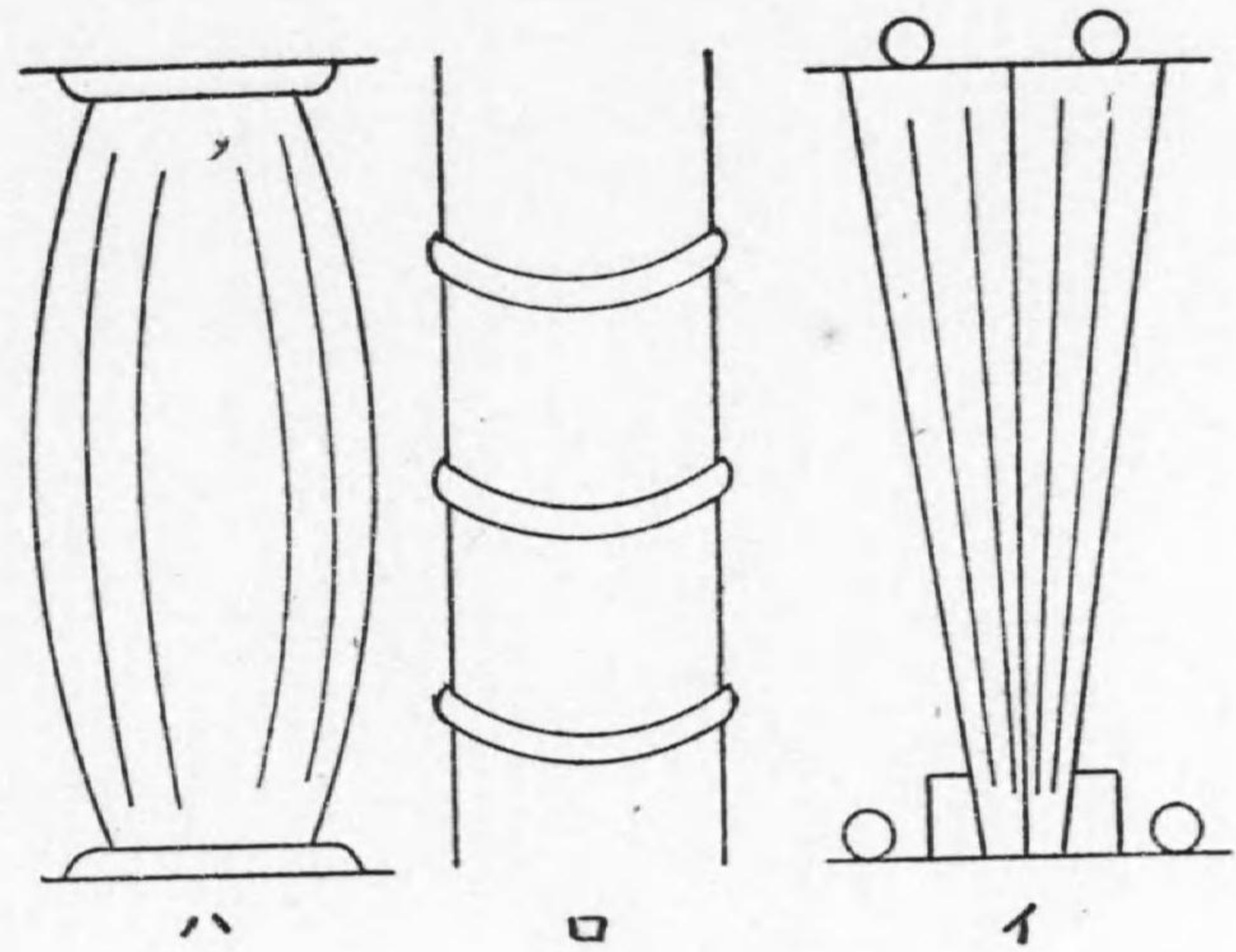
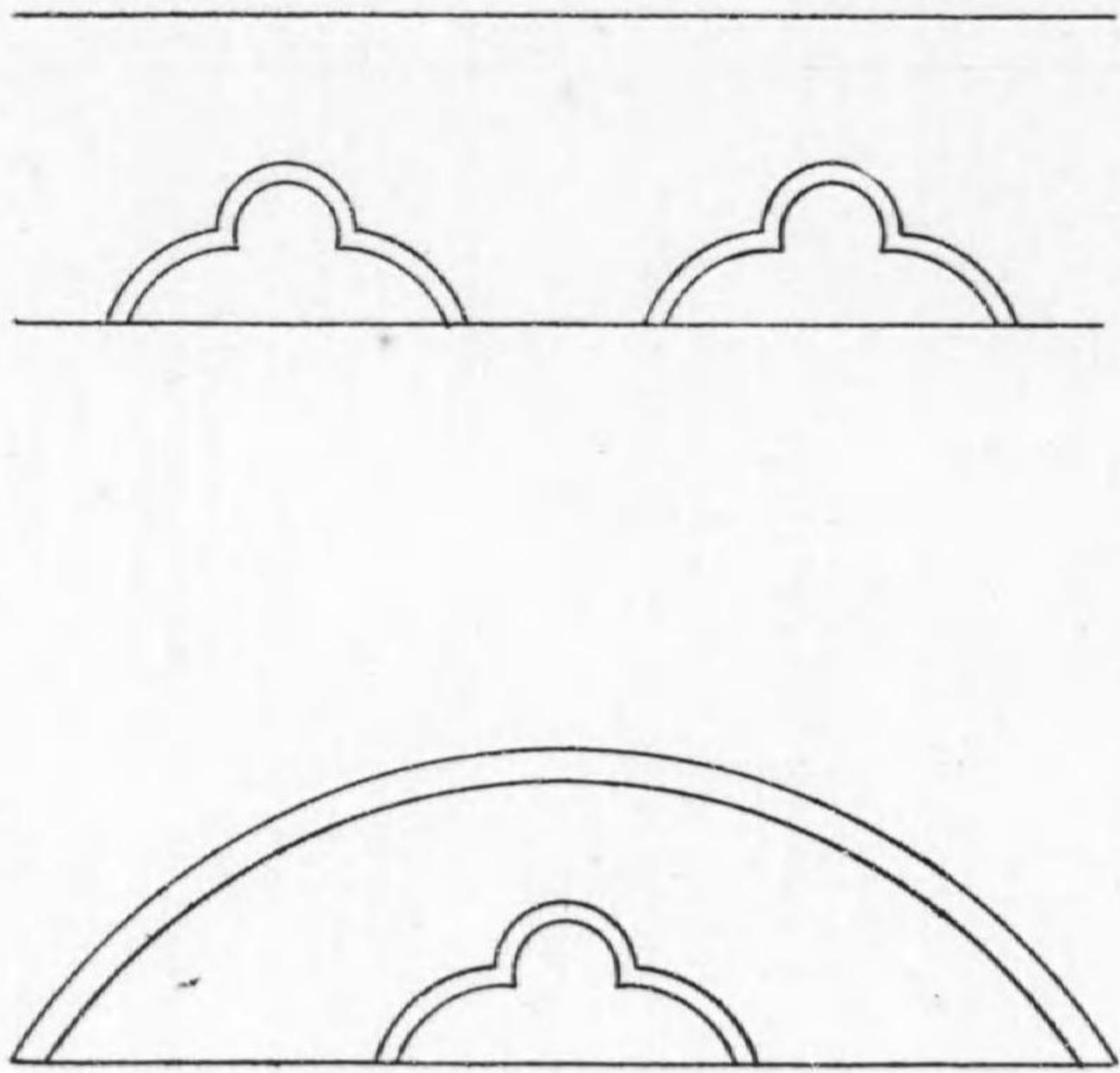




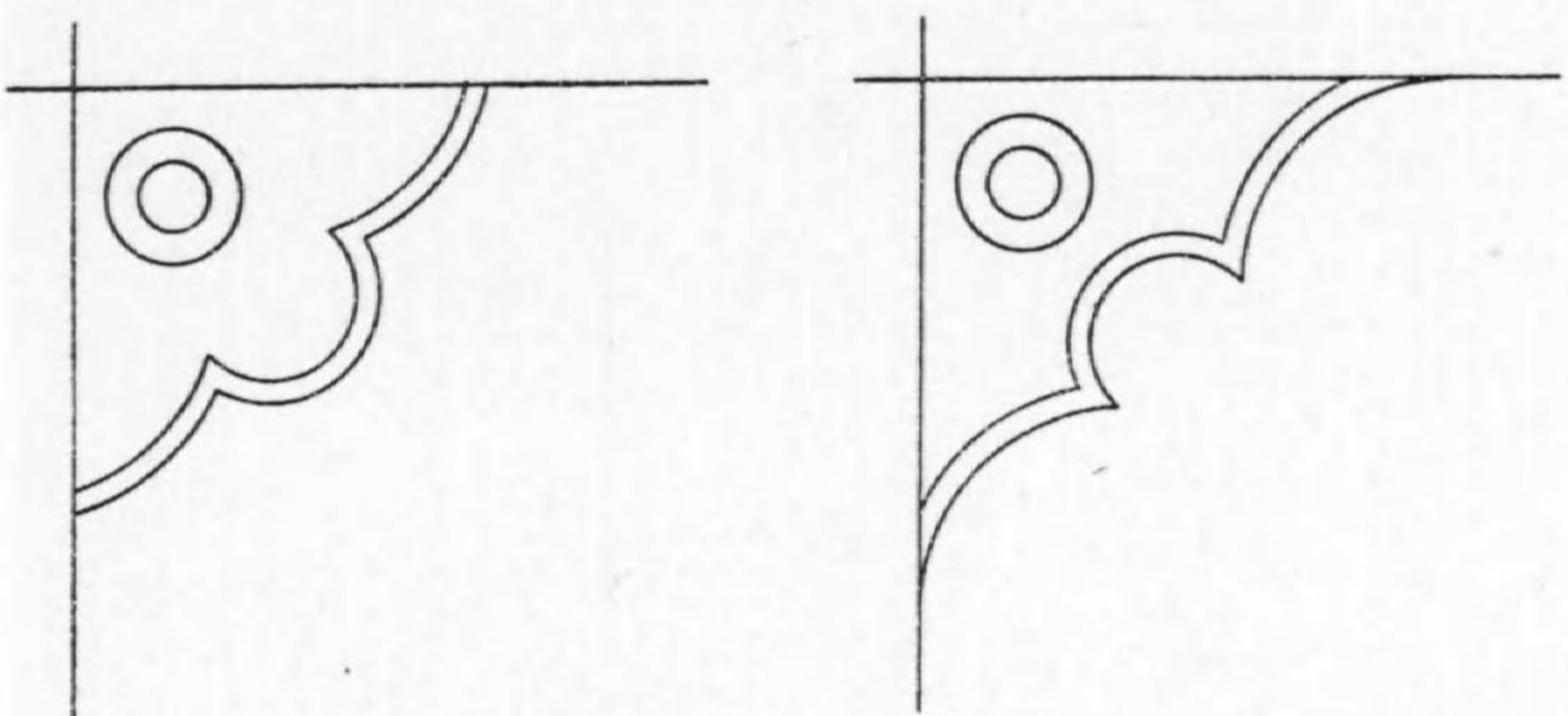


	第二度			第五度	
原、音、	8.	9.	原、音、	2.	3.
第一上音、	16.	18.	第一上音、	4.	6.
第二上音、	24.	27.	第二上音、	6.	9.
第三上音、	32.	36.	第三上音、	8.	12.
:	40.	45.	第四上音、	10.	15.
:	48.	54.	第五上音、	12.	18.
:	56.	63.	第六上音、	14.	:
:	64.	72.	第七上音、	16.	:
:	72.	81.	第八上音、	18.	:
:	80.	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:









$$A : B = (A + B) : A \quad \text{但し } A > B.$$

長邊（縦）の長さ：短邊（横）の長さ = 長短兩邊（縦横）の長さの和：長邊（縦）の長さ。







*The Complex Feeling*





雪の朝二の字二の字の下駄の跡  
つくづくと並び出でたり夕蛙



(一) 同じ種類の拍子が集まったと考へられるものの例。

三拍子が二つ集まったもの、

— 強弱弱中弱弱 — ..... (六拍子)

二拍子が三つ集まったもの、

— 強弱中弱中弱 — ..... (六拍子)

三拍子が三つ集まったもの、

— 強弱弱中弱弱中弱弱 — ..... (九拍子)

(二) 異つた種類の拍子が集まったと考へられるものの例。

二拍子と三拍子と集まったもの、

— 強弱中弱弱 — ..... (五拍子)

— 強弱弱中弱 — ..... (五拍子)

三拍子と二拍子二個と集つたもの、

— 強弱弱中弱中弱 — ..... (七拍子)

(I) 原色の調和感情、

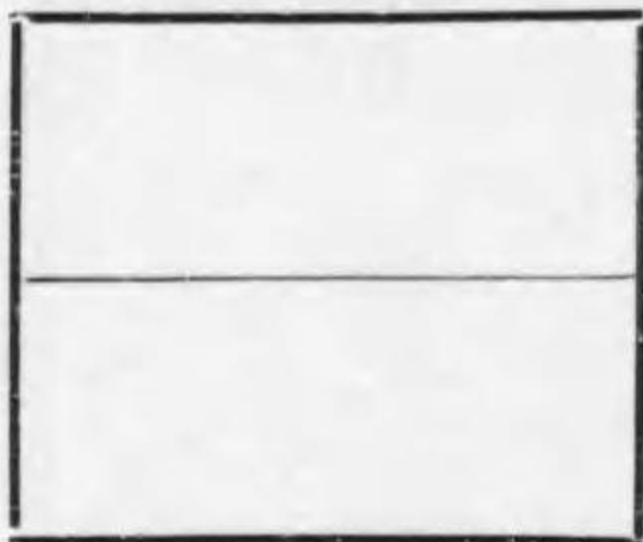
「青と赤」

これは東洋人よりも西洋人のすぐ配合特にこれと白と三色にしたものを西洋人はこのむやうである。

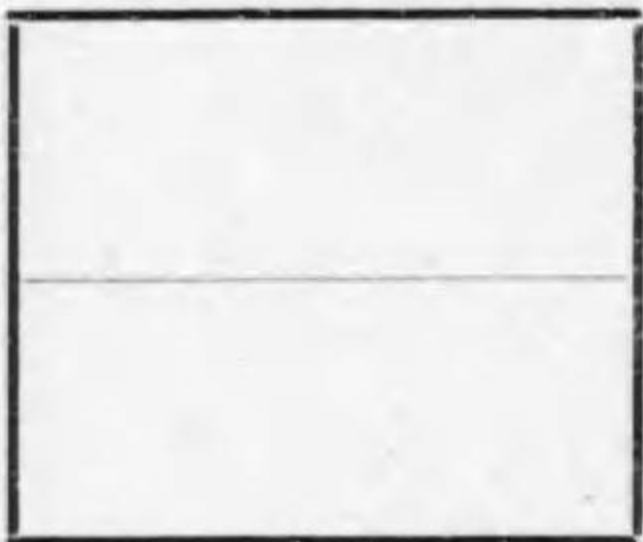
「黄と赤」

いとげない感じのする配合である。婦女子の服装にもよく見受けるもの、葉雞頭の美しいのも、紅葉の美しいのも皆この二色配合である。林檎なども赤と黄のため美しく見える。

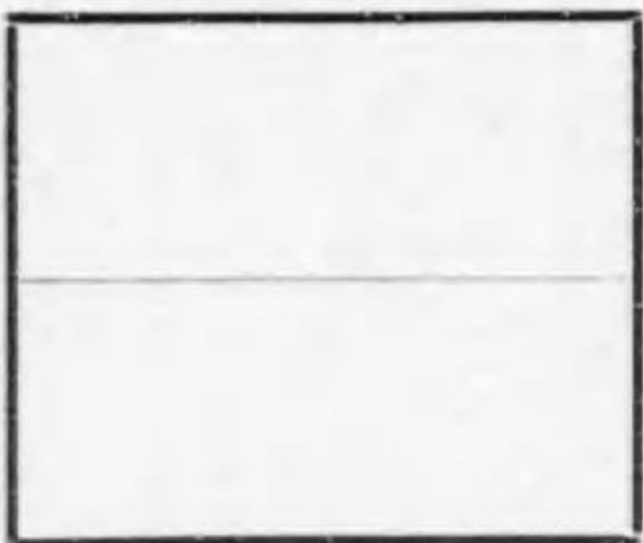
青 赤



黄 赤



黄 青





「黄青」

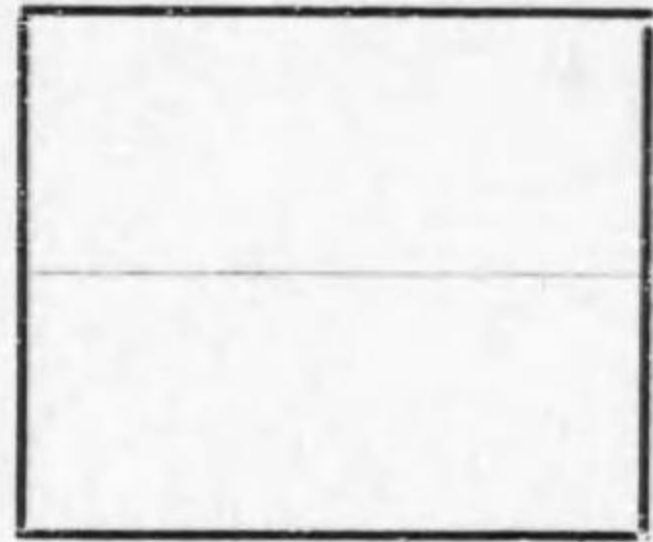
この二色配合は春の野原のやうな氣持もあたへるが、一方又毒々しい感じもあたへる。四十七  
八より五十三四位のいち悪い女の氣持をあらはすときもある。

(2) 間色の調和感情、

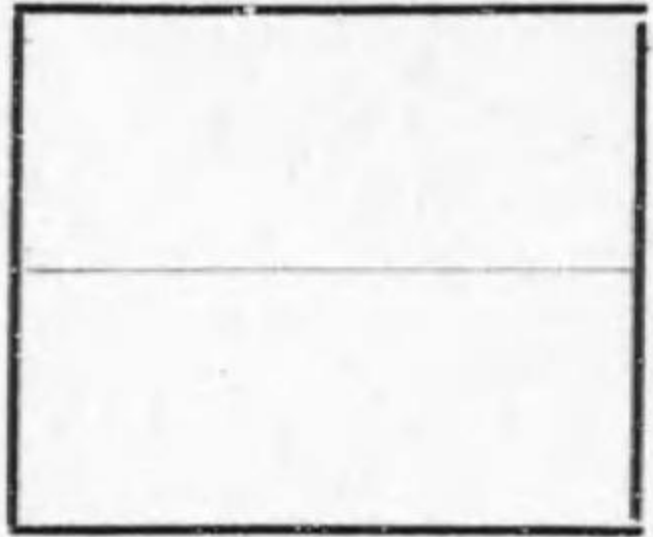
「橙と紫」

これは普通人の眼にはいやな感じを興へるけれども、よくこの二色配合を味つて見ると非常に  
高尚な配合である僧侶の衣の配合までにもこれらのものをつけてをるものはよほど上品なもので  
ある。

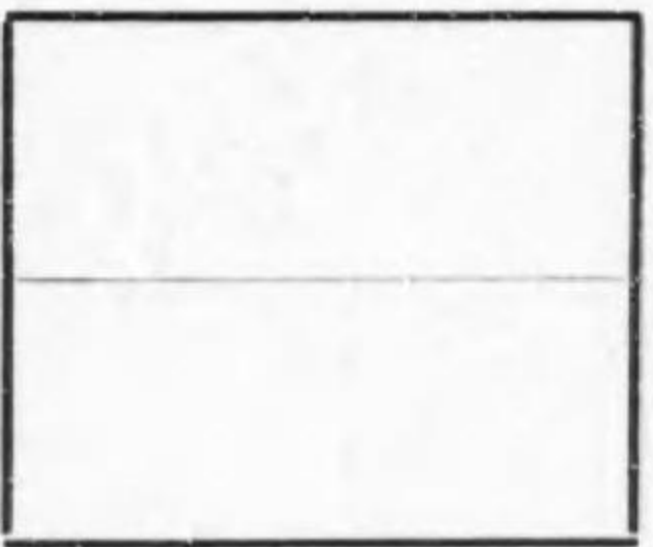
朱  
紫



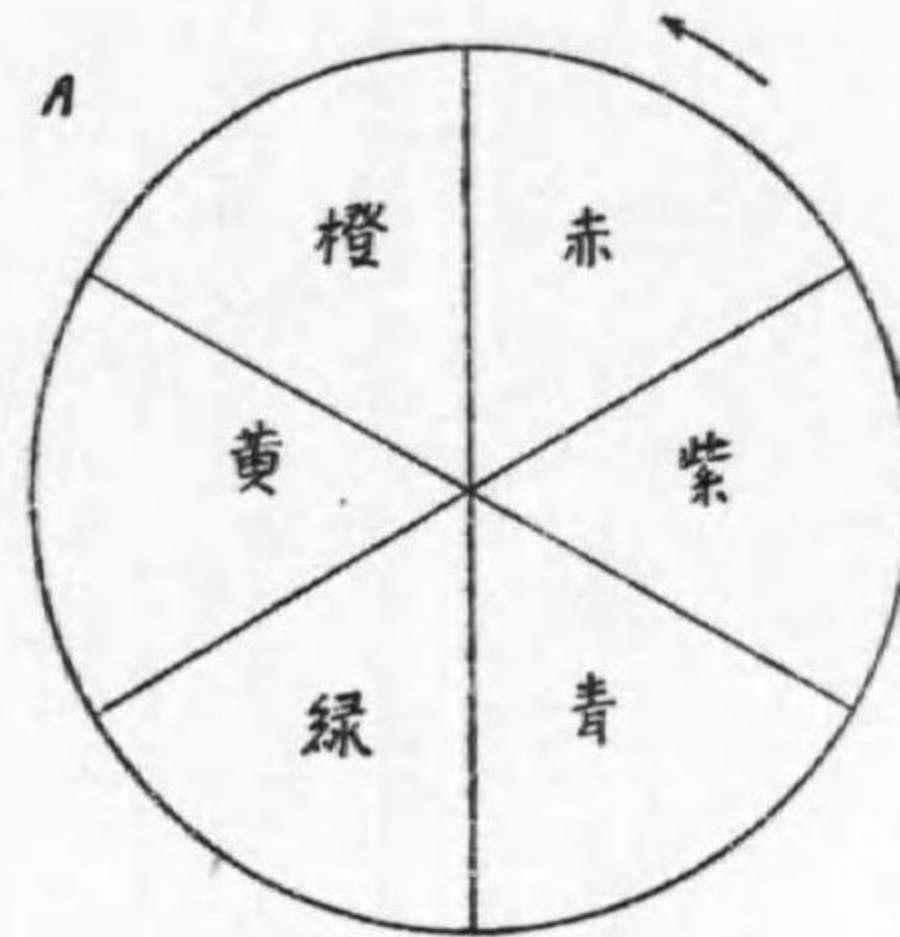
朱  
緑



紫  
緑









「赤と緑」

江南春

千里鶯啼綠映紅。水村山郭酒旗風。

南朝四百八十寺。多少樓臺煙雨中。

江碧鳥逾白。山青花欲然。

今春看復過。何日是歸年。

屋根瓦の色彩にも赤だけ用ふるものと緑だけ用ふるものがあるが、この赤と緑とをまちへて用ゐたものが目の感じはよろしい。

又同じく桃の花でも緑色の麥畑を背景として見た時の桃の花は非常に美しい。

鮑貝の中側の美しいのも全く薄い赤と緑とがたがひに光りながらちらつくがために美しい。

金魚の泳いでをる硝子瓶の中に緑色の藻を入れると、金魚の赤が一層目立って美しい感じをあ  
たへる。

萬年青の葉の色とその間から出てをる赤い實のためとで萬年青が一層美しく見えることも人の

よく知つてをる點である。

次に北原白秋の散文を紹介して、彼がいかに色彩詩人であるか又その緑と赤との二色配合のその中  
にいかにかくみに描かれてをるかを示して見やう。

### 緋桃と木苺

「庭の東西の隅、柴折戸のはづれた隣への通路のそば、圓い白檀の木の上に、造花のやうな緋桃が  
今は盛りに咲き匂つてゐる。

緋桃は孟宗の疎林を前にしてゐるので、その紅むが殊に目立つて輝かしい。

青い葉が出かかつてからの緋桃の花はまことに見づらくなる。

この木はまだ若い。私がここへ越したてには今は庭となつてゐる豌豆畑に出てゐた一尺ばかりの苗  
木であつたのが、邪魔つ氣なので、隣境に殆どうつちやり氣味に移されたのが、忘れるともなく忘れ  
てゐた間に驚くばかりに美しい花をつけ初めた。これで二年目である。

ただ緋桃は紅が強過ぎる。乾いて見える。うちのは竹の葉の影になるので、幾分か柔かみがついて  
見えるかも知れぬ。



「赤と緑」の二色配合は昔から最も多く使用されてをる。茲では下等感覚の結合せる料理にいかにかこの二色配合が使用されてをるかを示して見やう。

(1) 東京の漬物屋の店頭に緑の菜のつけものを出してをいて、その横に紅薑ををいて一層人の目につくやうにしてをるが却つて美しく見える。

人に出す香物でも緑の漬物の脇に必ず紅薑をつけると美しく見える。且つおいしいものである。

(2) 支那料理のチャーハン即ち五目飯に於ては、紅い蟹と緑の豌豆とがは入つてをるために美しくやうい。

(3) 牛肉のすき焼にもつてくる肉にも緑の葱があるために美しい。

(4) ハムサラダ又は野菜サラダの中にも赤いトマトと緑の野菜があるために美しい。

(5) 魚の刺身にも生の緑色の海藻を脇につけてあるために美しく且つおいしい。

尙次に俳句の方で赤緑の二色配合のものを次に掲げて見ると、

春雨や梅紅に竹みどり

春雨や桃紅に麥みどり

麥のたけ梅紅に春更けぬ

蓼 太。

茶 琴。

白 雄。

稍赤き長刀行くや春の野邊

逃水や椿ながるゝ竹の奥

のぼる日や霞隔てし松の中

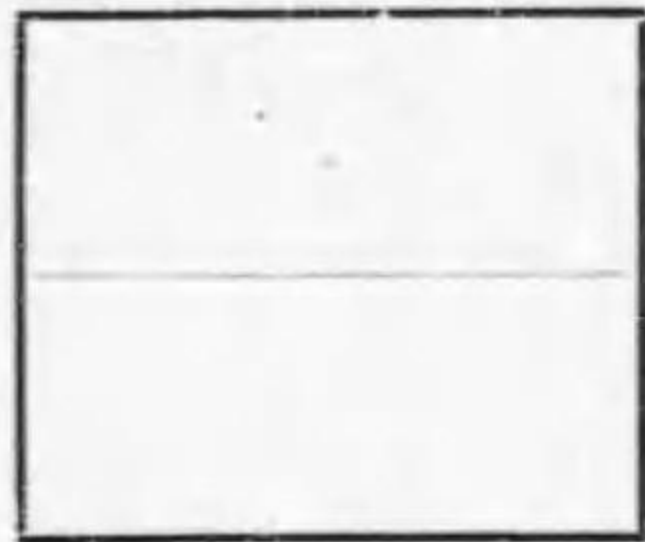
蘭 更。

芭 蕉。

蘭 更。



紫  
黄



「黄と紫」

同じく果物であつてもバナナだけよりも又葡萄だけよりもバナナと葡萄をませたものの方が感じ  
がよろしい。

次に北原白秋の散文を引用して見ると。

桐の花とカステラ

「桐の花とカステラの時季となつた。私は何時も桐の花が咲くと冷めたい吹笛の哀音を思ひ出す。

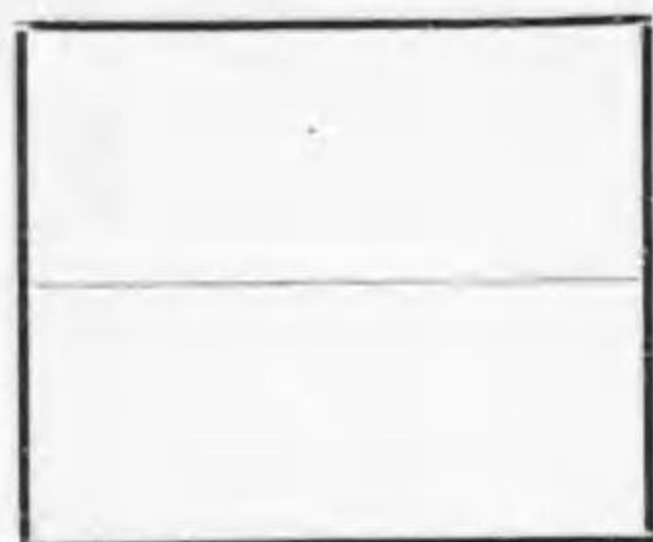
五月がきて東京の西洋料理店の階上にさはやかな夏帽子の淡青い麥稈のにほひが染みわたるころにな  
ると、妙にカステラが粉つぼく見えてくる。さうして若い客人のまへに食卓の上の薄いフラスコの水  
にちらつく桐の花の淡紫色とその曖昧のある新しい黄色さとがよく調和して、晩春と初夏とのやはら  
かい氣息のアレンジメントをしみじみと感ぜしめる。

× × × × × × ×

又私の今まで経験した黄と紫との二色配合の美しかつたものは、國學院大學の講義を終つて裏門を  
出て氷川神社の境内を通つた時非常に心地のよい感じがした。その心地よい感じを分析して見ると丁  
度その日は氷川神社の御祭典の日であつて、拜殿には紫の幕が張りつめてあつた。そして境内にはま  
た大きな眞黄な公孫樹が立つてをつたのである。紫と黄の二色配合が私のこの心地よき氣持の主導要  
素となつてをるものであることに氣がついた。



「橙と青」



この配合は東洋人の好むものと云ふよりは寧ろ西洋人の好む配合である。しかし近來吾が日本でも歐米趣味が豊かになつたために却つてこの二色配合が使用されるやうになつて來た。

- (1) そしてこゝに面白いことは日本の料理などに於ても鱒の子とか又は數の子などを入れる皿の色が大體水色のものが多いのも仲々面白い。
- (2) 又漬物の中でも澤庵とか奈良漬を入れる皿の色が水色のものを用ゐるのも面白い。
- (3) 其他茄子の糠味噌漬などは薄橙色の皿に入れると引き立つて美しく見える。

又建築とか室内裝飾などにもこの青と橙との二色配合がよく用ゐられるやうになつた。青空を背景としての薄橙色のコンクリートの建物などもその例である。その他電車内の板の色と座席の天鰐絨の色などもこの二色の配合であるし、應接間の椅子を塗つた色と椅子の天鰐絨の色もこの二色配合である。或は應接間の板の色に對して青色のカーテンを使用すること、又は橙色の日本風の家に隣れる應接間の外側を青いベンキで塗るのなども、いづれもこの二色配合を應用したものと見ることが出来る。或は青い電球のあるスタンドの傘の色を橙色にするとか、疊の上支那焼等に於てよく見受ける水色の火鉢を置くことや、疊の縁を茶でなくして水色にしたりすること、又は夏の卵色の洋服のネクタイを水色又は青色にすること等も、この二色配合の最も美しいものといふことが出来る。私に最もこの二色配合で大きな印象を與へたものはバチカン宮殿内にあるラファイエルの名畫の中にある、プラトンとアリストートルの着用せる衣服の色である。プラトンは觀念の世界に憧れたために天上を指してとる。従つてその衣服の色は青色である。しかるにアリストートルは實在論者で個物の中に觀念を見出したために下界の方を指してとぶ。従つてその衣服の色は橙色となつてをる。兩者の思想を區別するにその着用せる衣服の色でもつて示してをるのには、さすがはラファイエルのラファイエルたる特色である。これなどは最も偉大な



る二色配合の側と見ることが出来るのである。

次に北原白秋のこの種の代表的の散文を示して見よう。

「折々の季節につれて四邊の風物も改まる。短い冬の間に見る影もなく汚れ果てた田や畑に、刈株のみが鋤きかへされたまま色もなく乾き盡くし、羽に白い斑紋を持った怪しげな高麗鳥コウライトリ（この地方特殊の鳥）のみが廢れた寺院の屋根に鳴き叫ぶ、さうして青い股引をつけた櫛の實採りの男が靜かに暮れてゆく、卵いろの梢を眺めては無言に手を動かしてゐる外には、展望の曠い平野だけに何らの見るべき變化もなく、凡てが陰鬱な光に被はれる。」

「藁壁が壞れ、屋根が傾いた木兎の家の四角な硝子窓の外に、この春も新鮮な一重の山吹が咲き初めた。

その一枝を青磁色の壺に挿して卓上に据ゑると、急にあたりが明るくなつた氣がする。

實にその黄が新鮮なのである。よくもかう明るい色だと思ふ。山吹の黄はたんぽぽより上品で、一重なだけ純で若々しく感じられる。花粉の黄は花よりもまだ鮮かだ。雄蕊は黄絹のやうに繊細である。凡てが黄いろづくめでありながら、その色の濃度が一つ一つに違つて、それでよく統一してゐる。」

る。」

尙次にこの種の中の一のものには入る俳句をあけてをく。

瑠璃鉢に色増さりけり金風華

竹亭。



However, we loved each other tenderly, and our fondness increased as we grew old. There was, in fact, nothing that could make us angry with the world or each other.

We had an elegant house, situated in a fine country, and a good neighbourhood. The year was spent in a moral or rural amusement; in visiting our rich neighbours, and relieving such as were poor. We had no revolutions to fear, nor fatigues to undergo; all our adventures were by the fireside, and all our migration's *from the blue bed to the brown.*

「紅と白」

懸崖飛瀑響淙々。下有深潭栖九龍。  
回首白雲紅樹外。秋高一萬二千峰。  
みかへれば白雲紅樹秋高し

器堂市村瓊次郎

龍やのぼるらんあの瀧の音は

海棠や白粉に紅をあやまてる  
赤い椿白い椿と落ちにけり

燕村。  
碧梧桐。

漫興

糝徑楊花鋪白氈。點溪荷葉疊青錢。  
竹根稚子無人見。沙上鳧雛傍母眠。

杜牧。



「黒とその他の色」

—, yet Benvolio, a friend of Romeo, persuaded the young lord to go to this assembly in the disguise of a mask that he might see his Rosaline, and seeing her, compare her with some choice beauties of Verona, who (he said) would *make him think his swan a crow*

次にラムのセクスピアのロメオとジュリエットからセクスピアの使用した黒と他の色との配合を示して見やう。

And they fell to dancing, and Romeo was suddenly struck with the exceeding beauty of a lady who danced there, who seemed to him to teach *the torches to burn bright*, and her beauty to show by night *like a rich jewel worn by a black-moor*; beauty too rich for use, too dear for earth! *like a snowy dove trooping with crows* (he said), so richly did her beauty and perfections shine above the ladies her companions.

「朦朧美」

江南春

千里鶯啼綠映紅。  
南朝四百八十寺。  
多少樓堂煙雨中。

杜牧。

清明

清明時節雨紛紛。  
借問酒家何處有。  
牧童遙指杏花村。

杜牧。

念昔遊

李白題詩水西寺。  
半醒半醉遊三日。  
紅。白。花。開。山。雨。中。

杜牧。



獨柳

含煙一株柳。拂地搖風久。  
佳人不忍折。帳望回纖手。

杜牧

寂蓮法師。

さびしさはその色としもなかりけり

まきたつ山の秋の夕ぐれ

西行法師。

心なき身にもあはれは知られけり

鳴たつ澤の秋の夕ぐれ

藤原定家。

見渡せば花も紅葉もなかりけり

うらの苦屋の秋の夕ぐれ

尙又次の句も参考までにのべてをく。

ほのぼのと明石の浦のあさぼらけ

漕ぎゆく舟の影をしぞ思ふ

又俳句の方でもこの方面のものを引用すると、

美しう住なす様や青簾

青梅や黄なるも交り雨の中

烟帯びて孤村の柳日暮れたり

里は霞み峰は櫻の曇かな

しかし何を云つても清少納言の枕の草子にあるもの程ボンヤリした氣持の美を最もよくあらはして  
をるものはないやうである。

春はあけぼの

「春はあけぼの。やう／＼白くなりゆく。山際すこしあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたる。  
夏は夜。月の頃はさらなり。やみもなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。」

虚子。

召波。

関更。

魯稿。



秋は夕暮。夕日花やかにさして山の端いと近くなりたるに、鳥のねどころへ行くとして、三つ四つ二つなど飛び行くさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるいとをかし。日入りはてゝ風のおと蟲の音などいとあはれなり。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白き、又さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきゞし。晝になりて、ぬるくゆるびもて行けば、炭櫃火桶の火も白く灰がちになりぬるはわろし。」

「枕草子」

又日柳政章（燕石）の次の句もこの例として面白い。

日柳政章。

春 曉

花氣満山濃似霧。嬌鶯幾轉不知處。

吾樓一刻價千金。不在春宵在春曉。

蘇軾の詩と比較して見るべし。

蘇軾。

春 夜

春宵一刻直千金。花有清香月有陰。

歌管樓臺聲寂寂。鞦韆院落夜沈沈。

春 曉

春 の 夕

春 雨

春 霞

春のおぼろ夜

夏 の 朝

夏 の 夕 暮

夏 の 雨

秋 の 雨

秋 の 夕 暮



				其	雪	時	月
				他			
御	簾	鐵	格				
		格	子				
		子				雨	夜
簾							

等は最もその朦朧美をあらはしてをるものである。

吾々が衛生上からは禁煙禁酒を絶叫するけれども美的氣分を味ふには節煙節酒で行きたい。何故ならば煙草の烟を通して見たる時の自然の景色は實に美しいものである。丁度霞や霧や霜を通して見たる景色と同じ感じである。この意味に於て、あまりきれいに磨きあげた硝子を通して見たる景色よりも少しはよこれた硝子を通して見たる時の景色の方が却つて美しい。又酒に酔つた時の、即ち醉眼朦

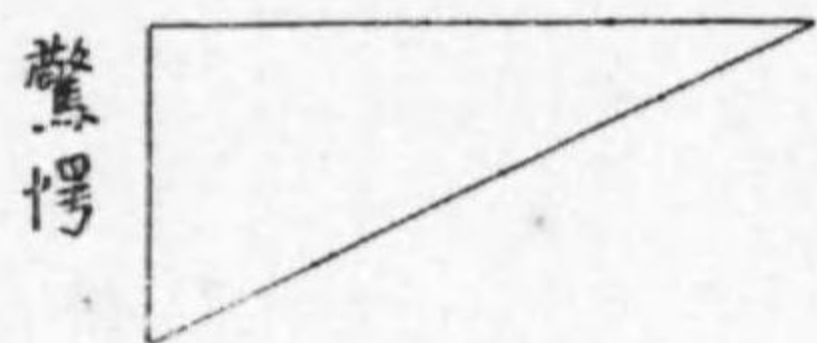
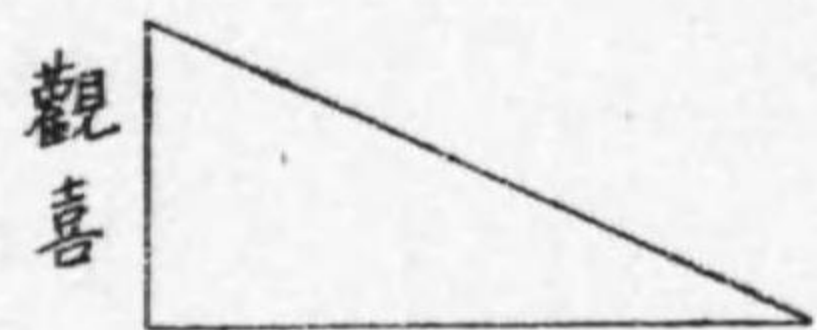
朧たる時の眼にうつる景色は春のおぼろ夜に見る景色と同じ感じを與へるものである。この意味に於て吾々はすべてのものを必しも一方面のみからこれを解釋するといふことは却つて不公平の立場なることを注意しなくてはならない。



— 105 —

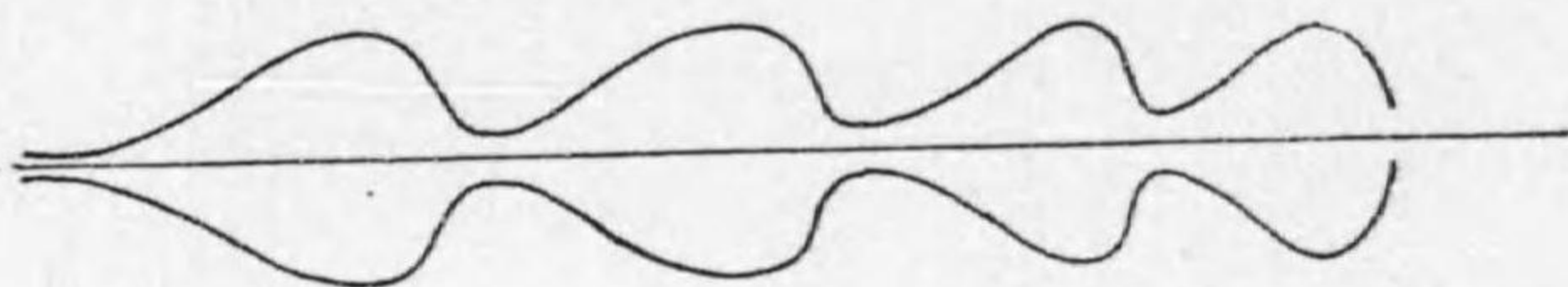
*The Emotion*



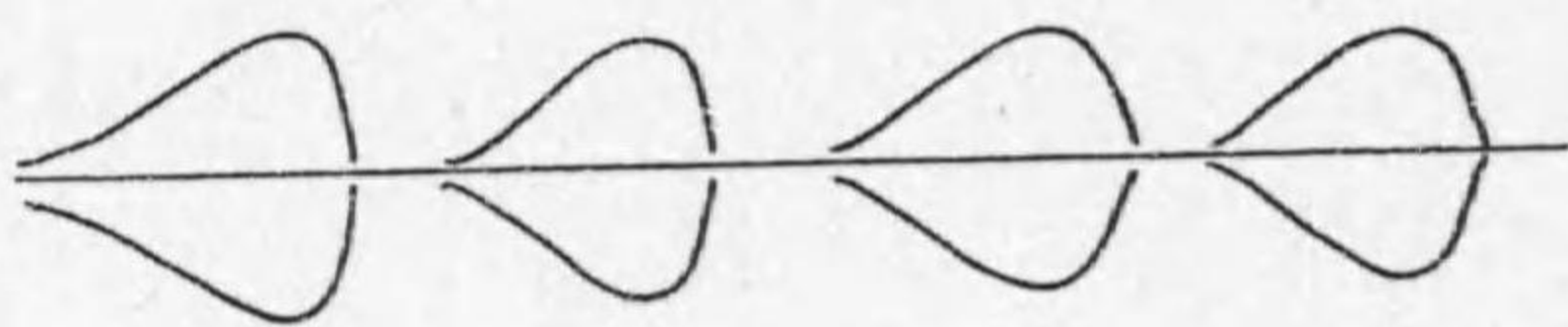




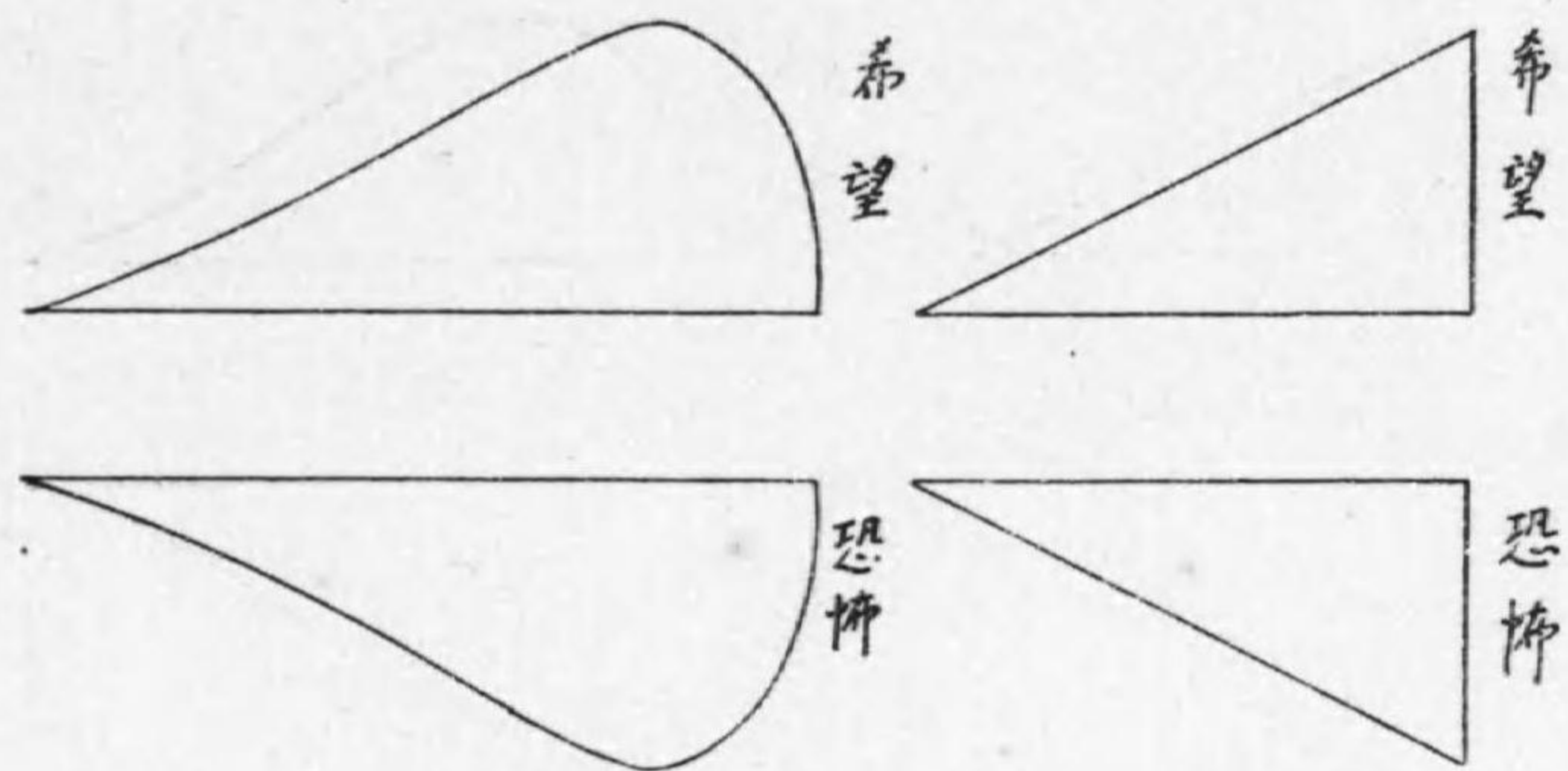
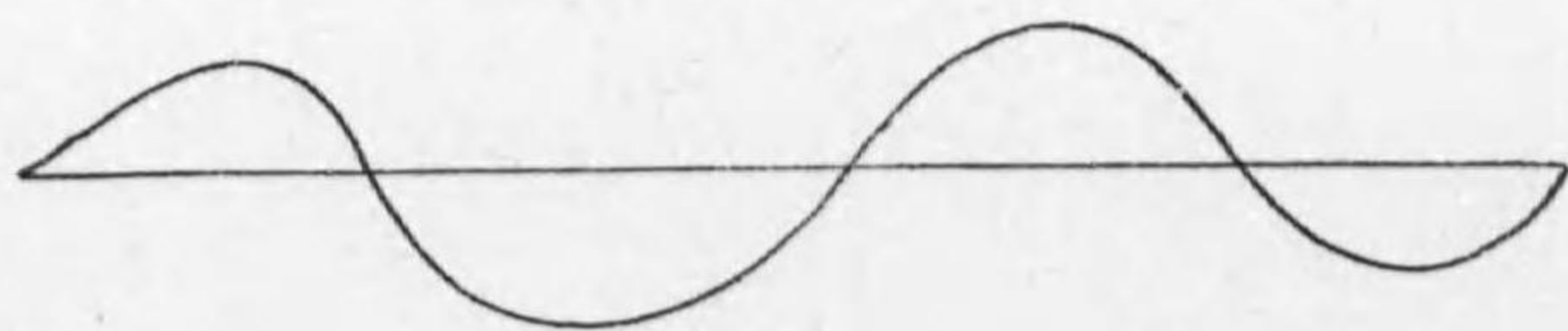
波動的情緒



間歇的情緒



交替的情緒





*The Association of Ideas*



## 一、外的聯想

### 1、同時的觀念の聯結

甲、一つの觀念に於ける部分間の聯結。

- (イ) 全體より部分に聯結するもの例へば家を門戸、木と花。
- (ロ) 部分より全體に聯結するもの例へば頭と人、枝と木。

乙、同位格的に存在するもの間に於ける聯想例へば父と母、手と足。

### 2、時間的に連續する觀念の聯結

甲、音觀念の聯想。

- (イ) もとの順序のままに聯想するもの、例へばわさく。
- (ロ) もとの順序を反對に又は變形して聯想するもの、例へばさわくわさくがさく。

乙、視觀念及びその他の觀念の聯想。

- (イ) もと見た事物をその順序のままに聯想するもの、例へば赤いインキとペン。
- (ロ) もとの順序を變形して聯想するもの、例へばペンと紙と赤インキ。



## 二、内的聯想

- 1、上位下位の關係によつて聯想するもの
    - 甲、上位觀念より下位觀念を聯想するもの、例へば親と子、君と臣。
    - 乙、下位觀念より上位觀念を聯想するもの、例へば臣と君、僕と主。
  - 2 同位的關係によつて聯想するもの
    - 甲、相似の觀念間の聯想、例へばナポレオンとシーザー、紫式部と清少納言。
    - 乙、反對的觀念間の聯想、例へば善と惡、東と西、大と小、黒と白、光と暗。
  - 3、依存關係による聯想
    - 甲、因果關係による聯想、例へば大雨と洪水、泥酔と暴行。
    - 乙、目的關係による聯想(目的と手段との聯想)、例へば大阪行きと汽車又は汽船又は飛行機、實業家と商業學校又は弟子奉公。
- 聯想の効用、
- (1) 教育上の効用……記憶、想像、推理等をたすけること。

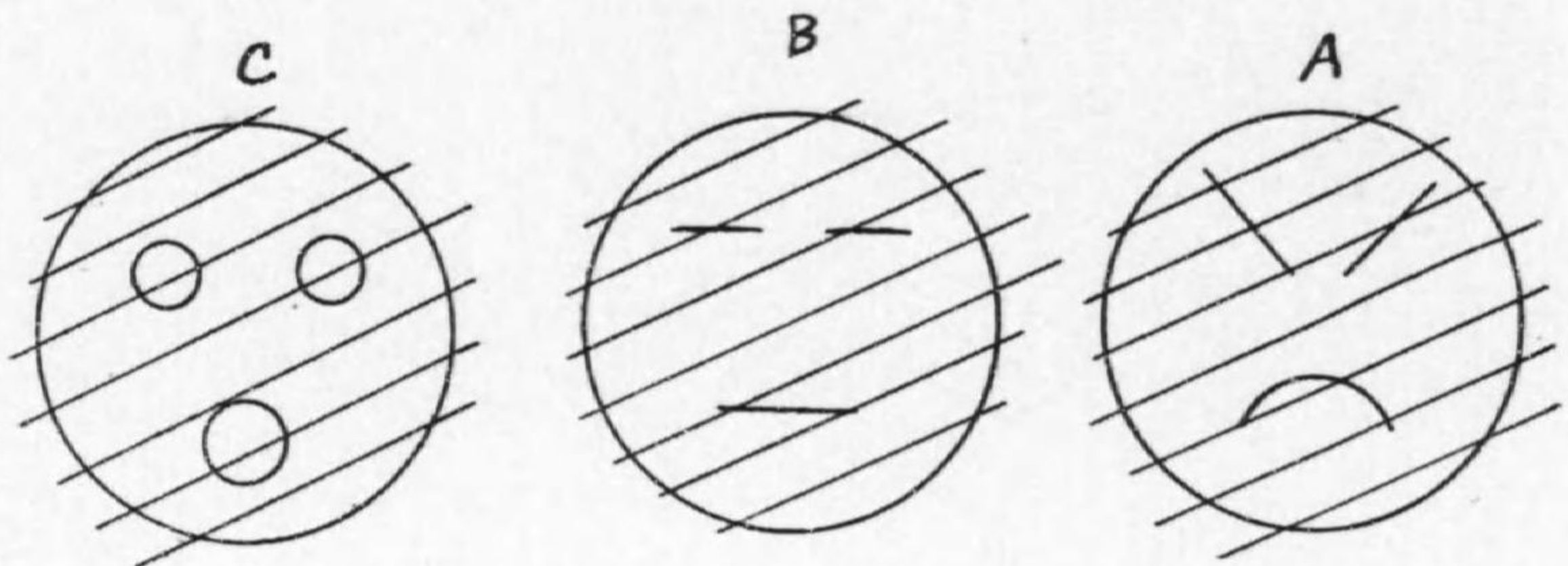
- (2) 文學上の効用……殊に詩歌文章に於て用ゐられる比喩法(Metaphor)擬人法(Personification)は類似聯想作用によるものが多い
- (3) 科學上の發明に於ける効用……かのブラウンといふ人は、蜘蛛の巣を見て吊橋の構造を思ひ出し、又ワットが海老の殻より河水を引き上げる構造を考へ出したことなどはその好實例である。
- (4) 廣告上の効果……ポスターなどはそれである。又店名、家號。
- (5) 藝術上の効用……繪畫、音樂、料理の名、人名、すべて名をつける場合。その他の藝道にはすべて聯想が關係がある。
- (6) 建築上の効用……殊に室内裝飾に於ての効用に於て小學校とか女學校では室内に額とか花ををいてをるが専門學校には少ないのは甚だよろしくない。又應接間でも西洋と東洋は非常に違つてをる。前者は聯想が濃厚であり、後者は稀薄である。



— 117 —

*The Sentiment*



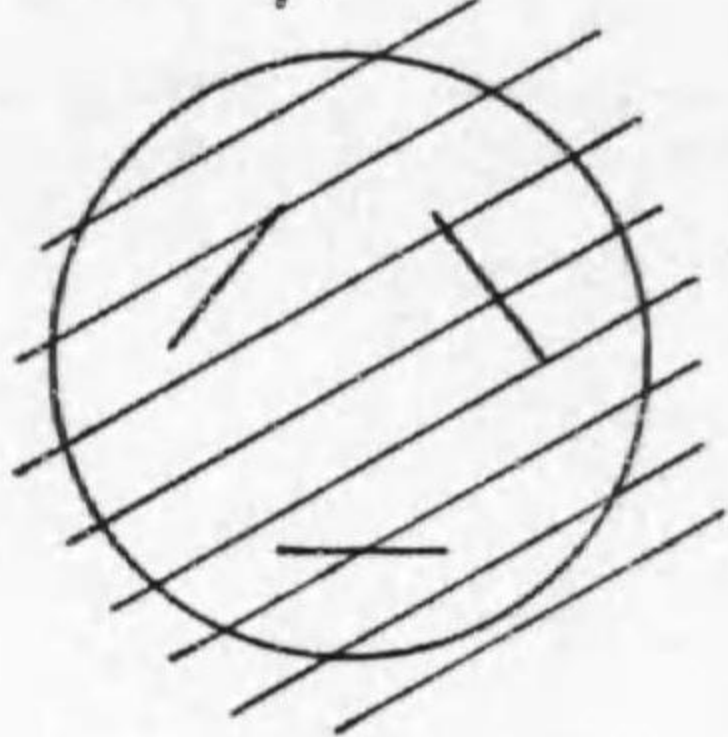




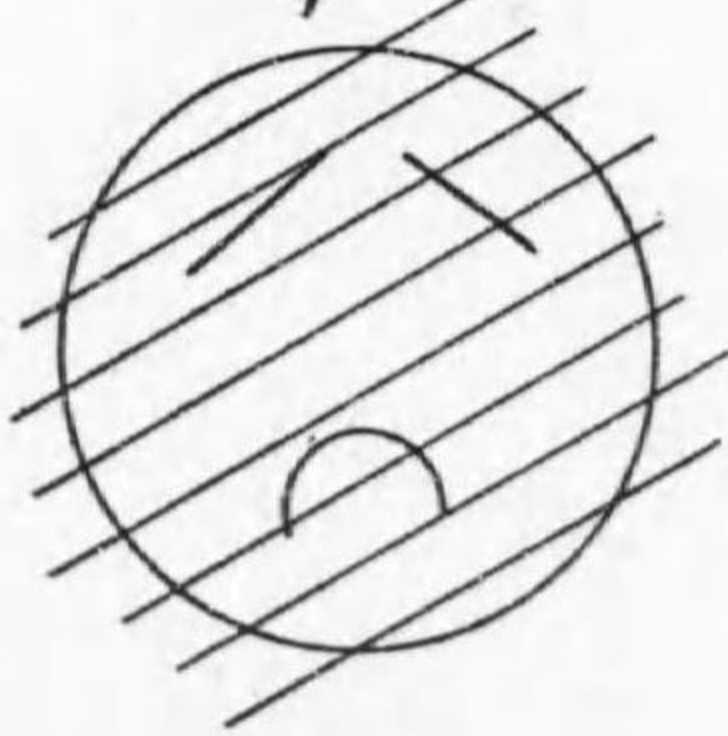
E



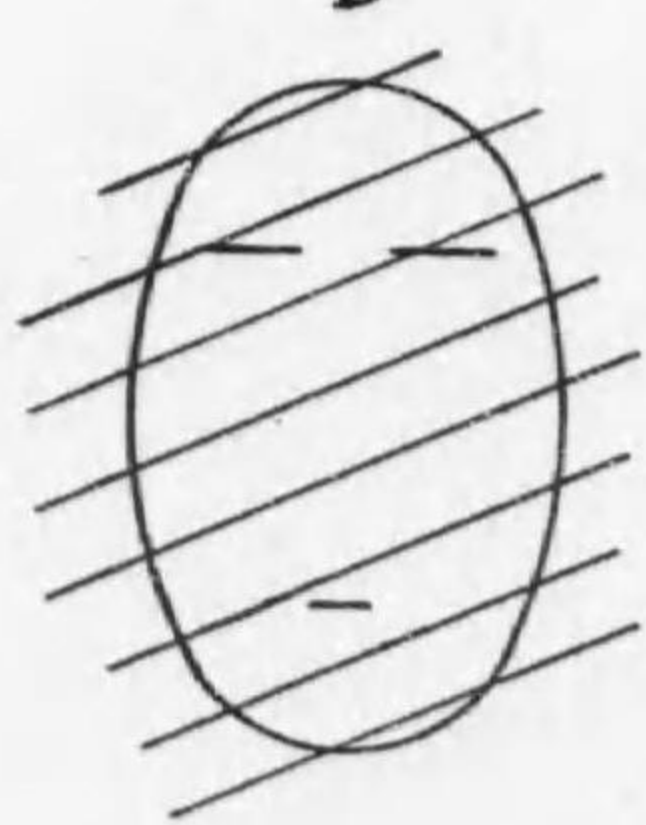
F



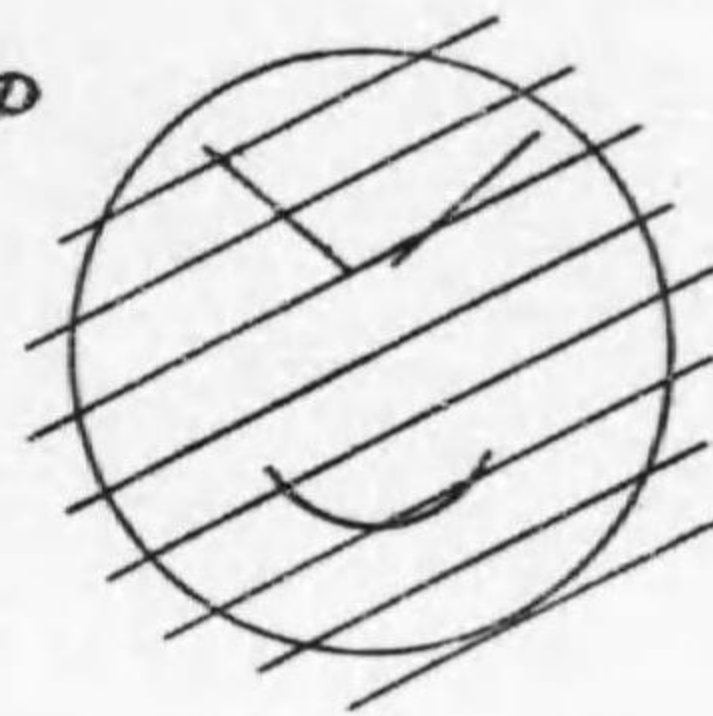
G



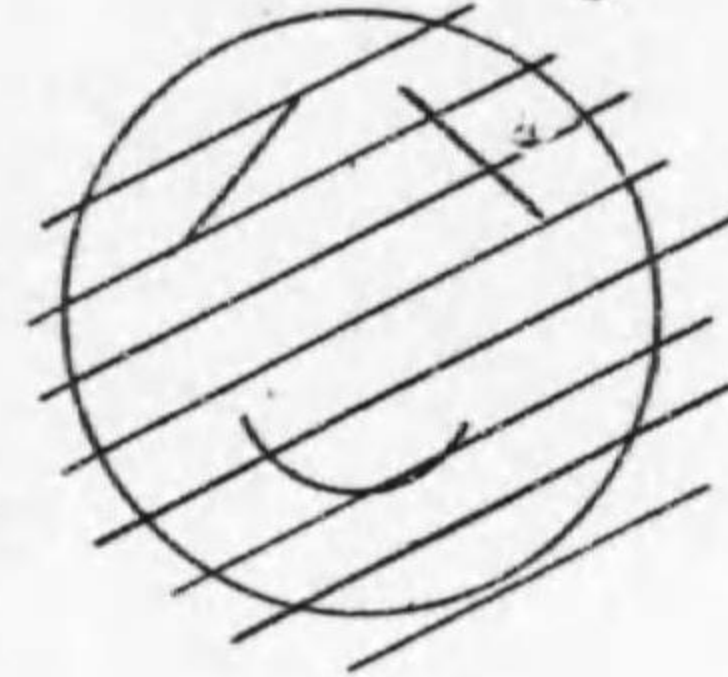
D



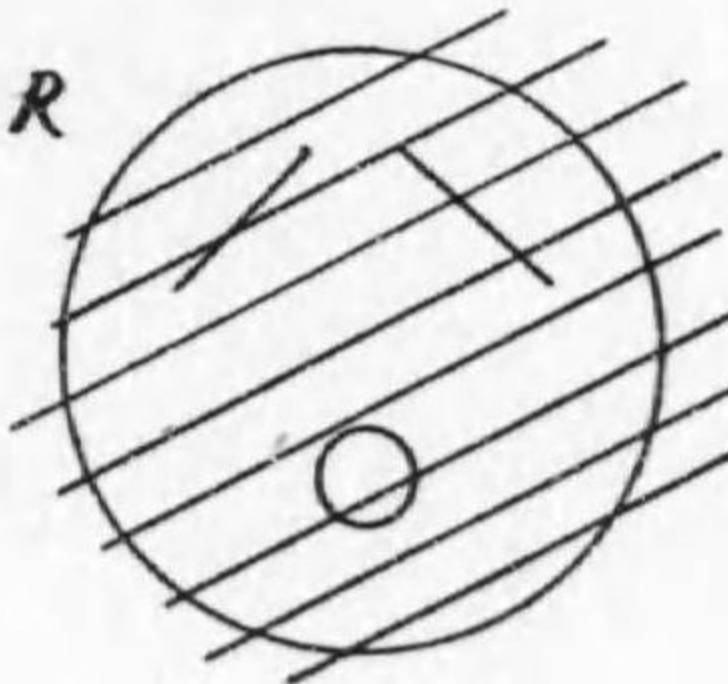
P



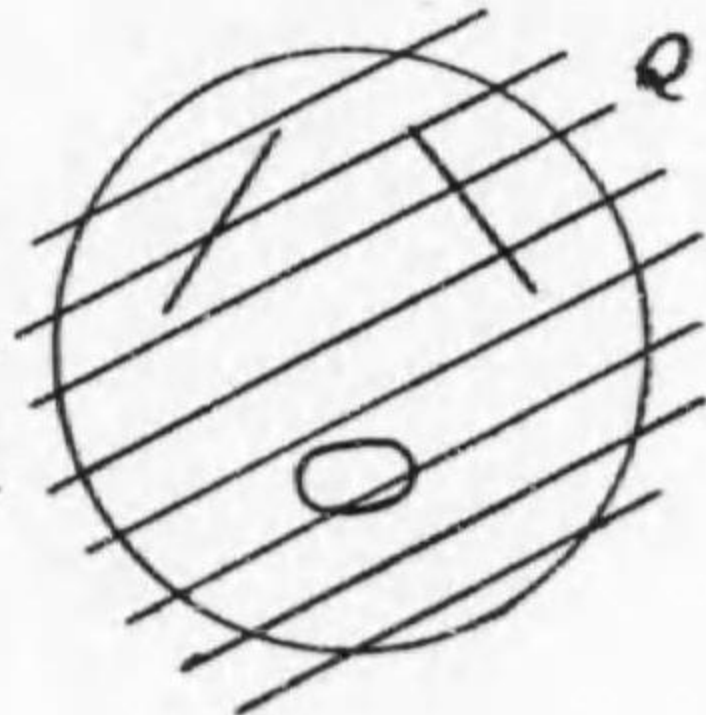
O



R



Q







「情操」

もよしきの大宮人はひまありや

櫻かざして今日も暮しつ

久方の光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらん

古池や蛙飛び込む水の音

静けさや岩に泌み入る蟬の聲

花の雲鐘は上野か浅草か

(イ) 壯美 (Sublime) (Erbabene)

(a) 無限 (Infinity) (Unlimitedness)

天つ風雲の通路吹きとちよ

乙女の姿しばしとどめん

和田の原漕ぎ出て見れば久方の

雲井にまごふ沖つ白波



「天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を、天の原ふりさけ見ればわたる日の影も隠ろひ、てる月の光も見えず、白雲もいゆき憚り、不時<sup>ときどき</sup>ぞ雪は降りける、語り継ぎ言ひ行かむ不盡の高嶺は。

(b) 嚴正 (Strictness) (Rigour)

宿かせと刀投げ出す吹雪かな  
従者起きて雪と申しぬ障子越

燕 村。  
永 孚。

(c) 荒天 (Wildness)

荒熊のかけ散らしてや笹の雪  
狼の聲揃ふなり雪の暮

北 枝。

時雨るるや宮に兀げたる鬼女の面

丈 草。

蚤虱馬の尿する枕元

闌 更。

荒海や佐渡に横ふ天の川

芭 蕉。  
芭 蕉。

(d) 怪異 (Strangeness) (Mystery)

化けさうな傘かす寺の時雨かな

燕 村。

(ハ) 滑稽美 (Comic) (Komicsch)

湯屋を出て怪しの雪よ神わたし  
雨そぼく鬼の灯見ゆる枯野かな

石 鼎。  
闌 更。

おゝそうじや逃るが勝ちぞ益

産みさうな腹をかゝへて啼く蛙

反橋に胸のつかへる蛙かな

一思案出来て飛び込む蛙かな

飛びくゝて穴へ落ちたる蛙かな

玉川や先づ御先へと飛ぶ蛙

罷出でたるは此藪の藪にて候

はぢめから聲枯らしたる蛙かな

親分と見えて上座に鳴く蛙

小蛙も鳴くなり口を持つたとて  
手をついて歌申し上ぐる蛙かな



(二)

悲壯美 (Tragic) (Tragic)

月見れば千々に物こそかなしけれ

我身一つの秋にあらねど

稻妻や親なきものの門に泣

名月や座頭の妻の涙かな

やがて死ぬけしきは見えす蟬の聲

雪の日やあれも人の子樽拾ひ

「月より流るる風梢をわたる毎に、一庭の月光と樹影と相拘いて跳り、白搖ぎ黒さゞめきて、其の中を歩するの身は、是れ無熱地の藻の間に遊ぶの魚にあらざるかを疑ふ」

旅に病みて夢は枯野をかけめぐる

何事のおはしますかは知らねども

かたちけなさに涙こぼるる

(芭蕉)

(西行)

心理學參考書 (外國之部)



心理學一般參考書

- James, — Text Book of Psychology.
- James, — Principles of Psychology.
- Angell, — Psychology.
- Royce, — Outline of Psychology.
- Ebbinghaus, — Abriss der Psychologie.
- Wundt, — Grundriss der Psychologie.
- Wundt, — Grundzüge der physiologischen Psychologie.
- McDougall, Psychology, the Study of Behaviour.
- Titchener, — A Text Book of Psychology.
- Ziehen, — Leitfaden der Physiologischen Psychologie.
- Moore, — The foundations of Psychology.
- Külpe, — Vorlesungen über Psychologie.
- Titchener, — A beginner's Psychology.
- Watson, — Behaviorism.
- Köhler, — Die Physischen Gestalten im Ruhe und Stationären Zustand.
- Koffka, — Die Grundlagen der Psychischen Entwicklung.
- Woodworth, — Dynamic Psychology.



- Stern, — Die menschliche Persönlichkeit.  
 Hunter, — General Psychology.  
 Dunlop, — Psychology.  
 Herrick, — Introduction to Neurology.  
 Howell, — Physiology.  
 Gray — Text-book of Anatomy.

The End

昭和八年五月二十日印刷  
昭和八年五月廿五日發行

心理學圖說

定價金壹圓

著者 見尾勝馬

發行者 齋藤正雄  
東京市神田區表猿樂町二四

印刷所 真興社印刷所  
東京市澁谷區猿樂町五一

印刷者 並河三郎  
東京市澁谷區猿樂町五一



版權所有

發行所 東京市神田區表猿樂町二四 同文社

(振替東京六九二七七九  
電話神田四〇七一)



終

